

# てんとうむし



第 12 号

姫路昆虫同好会

## 兵庫県産蝶類分布資料(10)

### —ミドリシジミ族 6種の記録—

(ウラキシジミ・ウラコマツラシジミ・オカガシジミ・ウスイロオカガシジミ  
・ウラミスジシジミ・ウラクロシジミ)

広畑政巳・近藤伸一

#### はじめに

兵庫県内のミドリシジミ族の分布状況については、これまでにヒロオビミドリシジミ・ハヤシミドリシジミ [きべりはむし No. 24(2) 1996. 11]、ヒサマツミドリシジミ・アイノミドリシジミ・メスアカミドリシジミ [同 No. 25(1) 1997. 5]、ミドリシジミ・フジミドリシジミ・ウラジロミドリシジミ・オオミドリシジミ・ジョウザンミドリシジミ・エゾミドリシジミ [同 No. 25(2) 1997. 11]、と報告してきた。今回は標記のミドリシジミ族6種の分布状況を報告する。記載の方法は、県内の記録を各産地1例ずつをあげて、気付いたことを付記した。採集記録のうち場所が特定出来ない箇所については、分布図、垂直分布表から省いた。

本稿を草するにあたり、岩村 巖、徳岡正己氏には多くの貴重なデータの提供をいただき、また次の方々には採集記録を提供いただき、産地の状況等をご教示いただいた。ここに記してお礼申し上げる。

石井為久 稲田和久 入江照夫 故尾崎 勇  
木下賢司 木村三郎 北浦保夫 黒田 収  
佐々木薫 大東康人 高島 昭 永幡嘉之  
苦木隆幸 春井博文 森下泰治 唐土洋一  
八木 弘 山下剛史 横山隆司 米村和繁

#### 1 ウラキシジミ

##### (1) 分布の状況

北海道、本州、四国、九州の平地から山地にかけて広く分布する。県下の分布は図1のように、淡路島を除く全域に広く点在しており、北部、南部とも海岸付近まで生息が確認されている。

赤穂市を中心とした県南西部と六甲山系から阪神地区にかけての県南東部、及び西脇市周辺に分布が集中している。これらの地域はそれぞれの地

元の方々が精力的に調査をされた地域でもある。西播磨北部から但馬南部にかけての高原地帯に分布の空白域が存在するが、この区域は十分な調査がなされていない区域とも言える。県北部の高標高の地域には採集記録があり、分布の空白域から新しい生息地が発見される可能性は高い。神戸市の記録は古いものが多く、ニュータウンの開発で消滅した産地も多いが、丹生・帝釈山系では現在も多産する。

##### (2) 生息環境の現況

県下では標高400m以下のアカマツ、コナラを主体とした低山地に生息地が集中している。ウラキシジミはモクセイ科のトネリコ類 (*Fraxinus*) を食樹としているが、県下の低標高の広葉樹林やマツ林にもっとも普通に分布するのはマルバアオダモ (*F. sieboldiana*) で、これが主要な食樹と思われる。県北部の高標高地の採集記録は、高地に分布するアオダモ (コバノトネリコ *F. lanuginosa*)、ヤマトアオダモ (*F. longicuspis*)、シオジなどを食樹としているのか、低地で羽化した成虫が移動したものは不明である。関宮町ではシオジの葉上で終齢幼虫を確認した記録もあるが、過去の食樹の同定には混乱がみられるため、再調査が必要である。初夏には幼虫が比較的簡単に見つかるので、今後の調査を期待したい。

##### (3) 採集記録

三田市波豆川	1♂	16-VI-1963	若林守男	1)
〃	本郷香下峠	1♂	17-VI-1995	27)
〃	志手原	8卵	-XI-1983	有田 斉 48)
川西市笹部	1♂1♀	9-VI-1956	田中 蕃	1)
〃	西多田	4卵	23-I-1994	27)
〃	緑台			2)
〃	東谷			34)

川西市大和団地	1♂1♀		
	15-VI-1979	櫛原俊嗣	48)
〃 黒川	1♂	4-VII-1993	27)
猪名川町三草山	25卵	6-V-1984	鎌田邦彦 23)
〃 下阿古谷			
〃 上阿古谷	1♂	28-VI-1995	27)
〃 木津北	1♂	21-VI-1992	24)
〃 民田	1ex.	松井賢慈	48)
〃 槻並	24-VI-1973	小坂利明	18)
〃 銀山	29-VI-1975	小坂利明	18)
〃 内馬場	27-VI-1976	仲田元亮	18)
〃 清水	18-VI-1978		18)
〃 仁頂寺	15-VI-1980	森地重博	18)
〃 栃原	30-VI-1984	小坂利明	18)
宝塚市武田尾	1♂	24-VI-1951	吉坂道雄 49)
〃 丸山	1♀	19-VI-1986	櫛原俊嗣 49)
〃 惣河合	1♂1♀		
	15-VI-1963	鈴木雅弘	49)
〃 千刈水源地	羽化	4-VI-1975	78)
〃 島ヶ脇	1-VII-1979		78)
〃 立合新田	24-VI-1984		78)
〃 波豆～三田市木器	24-VI-1978		78)
芦屋市三条町(城山)	1♂		
	6-VI-1982	西 隆広	35)
西宮市山口町		浅田 卓	
〃 金仙寺	1♂	9-VI-1978	杠 隆史 14)
〃 甲山町甲山	1♂	12-VI-1993	法西 治67)
神戸市			
六甲山	1♀	17-VII-1961	尾崎 勇
摩耶山	2♂2♀	18-VII-1958	吉坂道雄 49)
灘区上筒井	1932～1933年頃	吉田真日出	47)
中央区市ヶ原	1♂1♀		
	21-VI-1964	三木 進	68)
北区道場町	2exs.	1-VII-1983	住田正雄
〃 藍那	1♂1♀	16-VI-1996	青木陽一 69)
〃 山の街	1♀	10-IX-1953	吉坂道雄 49)
〃 帝釈山	1ex.	9-VII-1983	住田正雄
〃 再度山	1♀	16-VI-1962	若林守男 1)
〃 小部・奥妙法寺			34)
〃 森林植物園	3卵	12-XI-1993	27)
〃 千刈水源地			68)
〃 有野台	15幼虫	28-IV-1981	山岡万寿夫 80)

北区鈴蘭台		68)
〃 菊水山		68)
鷹取山	40exs.	18-VI-1931 山田舜亮 34)
西区押部谷	1♀	21-VI-1964 尾崎 勇
〃 押部谷町高和	1♂	18-VI-1979 山下剛史
〃 樋谷町寺谷	1♀	15-VII-1990 山下剛史

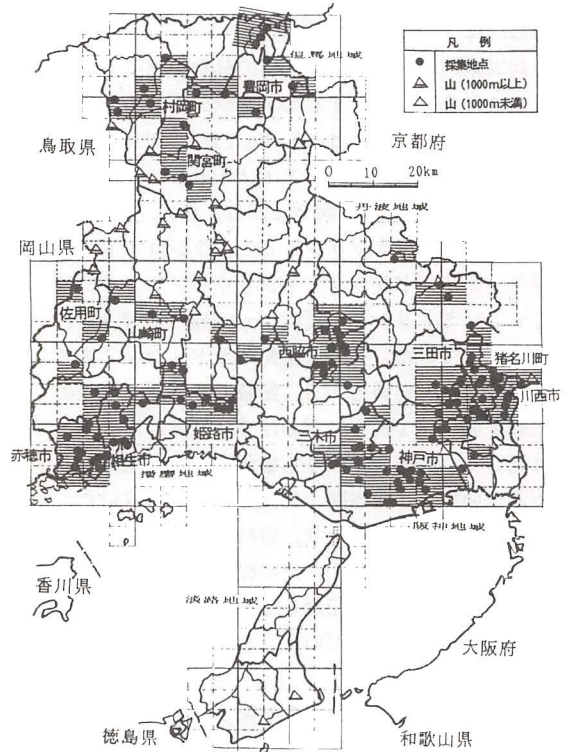


図1 ウラキシジミの県内分布

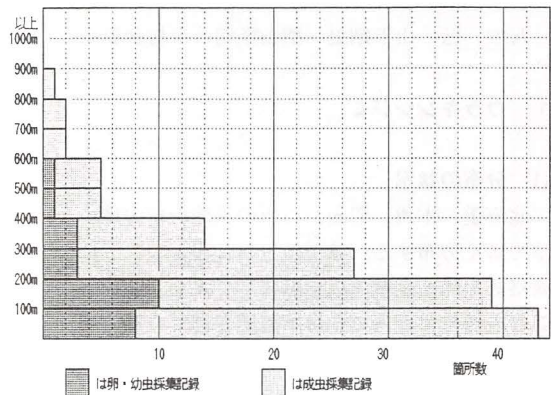


表1 ウラキシジミの垂直分布



西区大山寺 3♂1♀ 19-VI-1963 尾崎 勇	相生市三濃山 1♂ 23-VI-1975 広畑政巳
〃 神出町山西 1♂ 6-VI-1980 高島 昭	〃 川原町 1♀ 29-VI-1981 唐土洋一
〃 神出町吉生 3♂ 10-VI-1980 高島 昭	〃 佐方 2♂2♀ 13-VI-1964 岩村 巖
三木市志染町戸田 2♀ 22-VI-1986 永幡嘉之(17)	〃 陸光明山 1♀ 26-VI-1967 岩村 巖
〃 細川町増田 -VI-1977 小倉 滋 66)	〃 大谷町 1♀ 4-VI-1967 米村和繁
〃 御坂 4♂ 17-VI-1990 芝 直幸 17)	〃 森 12卵 6-II-1977 高田忠彦 1)
〃 殿畑 1♂ 20-VI-1988 永幡嘉之 17)	赤穂市春日 4幼虫 2-V-1983 近藤伸一
〃 高畑(密屋) -VI-1977 小倉 滋 66)	〃 富原 1♂ 6-VI-1975 広畑政巳
西脇市武島 1♀ 12-VI-1959 岡本 清 32)	〃 尾崎 1♂ 9-VI-1963 岩村 巖
〃 寺山 1♂ 21-VI-1958 猪俣涼一 32)	〃 周世 1♂1♀ 15-VI-1963 岩村 巖
〃 平野町(鳴尾山)	〃 小山 2♀ 13-VI-1973 藤原 59)
5卵 12-III-1977 高田忠彦 1)	〃 横山 3♀ 2-VII-1975 岩村 巖 59)
〃 塚口 多数目撃	〃 檜原 2♂ 13-VI-1976 岩村 巖 59)
22~23-VI-1974 徳岡正己	〃 大津 1♂1♀ 19-VI-1977 岩村 巖 59)
〃 板波 1卵 20-XI-1977 徳岡正己	〃 真木 1♂1♀ 19-VI-1977 岩村 巖 59)
〃 八坂 18幼虫 26-IV-1985 徳岡正己	〃 奥 28卵 2-III-1978 岩村 巖 59)
〃 比延(岡野山) 3幼虫	〃 折方 17卵 2-III-1978 岩村 巖 59)
29-IV-1985 徳岡正己	〃 田端 6幼虫 3-V-1978 岩村 巖 59)
〃 上比延 7幼虫 8-IV-1984 徳岡正己	上郡町野桑 1♂1♀ 19-VI-1977 福原 1)
〃 平野 卵多数 12-III-1978 徳岡正己	佐用町上石井 1♂ 23-VI-1975 広畑政巳
社町下久米 7卵 11-II-1985 近藤伸一	上月町久崎 1♀ 22-VI-1957 若林守男 1)
滝野町滝野 2卵 12-III-1977 高田忠彦 1)	南光町東徳久 1♂1♀ 春井博文
黒田町町喜多 1♂ 16-VI-1959 岡本 清 32)	豊岡市森尾赤石 62)
〃 白山 1♂ 27-VI-1959 岡本 清 32)	〃 小島 2♂1♀ 17-VI-1975 小林 1)
〃 岡 1♀ 徳岡正己	〃 下鶴井 1ex. 15-VI-1975 足立義弘 63)
姫路市上砥堀 1♀ 16-VII-1972 相坂耕作 9)	城崎町来日岳 1ex. 26-VI-1978 福井丈嗣 4)
〃 砥堀 14-VI-1974	〃 大師山 1ex. 14-VI-1983 福井丈嗣 4)
〃 仁豊野 1♂ 3-VII-1971 西川一実 9)	日高町大岡山 1♂ 28-VI-1968 木下賢司 4)
〃 書写山 3卵 8-I-1978 広畑政巳 9)	〃 鶴岡 1♂ 13-VI-1980 木下賢司 4)
〃 広峰・増位 58)	〃 稲葉 1♂ 3-VII-1978 高田忠彦 1)
〃 林田町出屋敷14卵	村岡町耀山 1♂ 7-VII-1984 前平照雄 4)
21-III-1976 高田忠彦 1)	〃 祖岡 1♂ 8-VII-1984 永幡嘉之 61)
夢前町奥護持 7卵 21-III-1976 高田忠彦 1)	温泉町海上 1♂ 2-VII-1992 永幡嘉之 61)
〃 山富 佐々木薫	〃 湯谷 1♀ 6-VII-1992 川元 裕 61)
福崎町七種 森下泰治	〃 扇ノ山(上山高原) 62)
〃 山崎 森下泰治	浜坂町本谷 1♀ 15-VI-1994 25)
市川町下牛尾 1♀ 27-VI-1993 広畑政巳 10)	関宮町鶴縄 1幼虫 3-V-1975 糀谷 徹 1)
龍野市平木 5卵 18-XII-1977 福原 1)	〃 鶴 1幼虫 3-IV-1977 高田忠彦 1)
安富町大河弁獄 1♂ 8-VII-1978 広畑政巳	〃 氷ノ山(杉ヶ沢) 62)
〃 瀬川 3幼虫 7-III-1976 高田忠彦 1)	大屋町筏 1♀ 22-VI-1975 糀谷 徹 1)
山崎町梯 2♂ 7-VI-1964 岩村 巖	篠山町原 1♂ 29-VI-1964 喜多舒彦 1)
〃 大沢 7卵 7-III-1977 高田忠彦 1)	〃 三岳頂上 1ex. VIII-1962 野上 正 75)



篠山町火打岩 lex. VIII-1964 山口勝幸 75)  
市島町鴨庄 34)  
春日町春日部 34)

## 2 ウラゴマダラシジミ

### (1) 分布の状況

北海道、本州、四国、九州の平地、山地に広く分布する。県下の分布は図2のように、全域に広く点在し、県南部、北部とも海岸付近まで生息している。淡路島では北淡町で採集記録が1例あるが、古い記録であり、再調査が必要と思われる。県中央部に分布の空白域があるが、ウラケンシジミと同様に詳しい記録がないだけで、今後新しい生息地が発見される可能性は高い。

### (2) 生息環境の現況

食樹であるイボタが分布する低山地が主な生息地で、山林から流れ出る溪流が田畑にそそぐような、ちょうど山地と集落の接点になる林縁部のイボタで卵がよく見つかる。標高400m以下の低山地が主な生息地であり、集落周辺に生息場所が多い。卵はイボタの幹に数個から十数個まとめて産付されるため、発見は容易であり、集落周辺を丹念に調査すれば新産地は数多く見つかるはずである。

### (3) 採集記録

三田市福島 1♀ 17-VI-1995 27)  
" 志手原 8卵 -XI-1983 有田 斉 48)  
川西市大和団地 1♀ 28-VI-1983 櫛原俊嗣 48)  
" 西多田 18卵 -XII-1981 有田 斉 48)  
" 東畦野 1♂ 21-V-1964 日浦 勇 49)  
" 芋生 1♂ 9-VI-1986 品川 恭 28)  
" 黒川 1♀ 1-VII-1995 27)  
" 鼓ヶ滝 2)  
" 笹部 4幼虫 28-III-1981 櫛原俊嗣 48)  
" 多田 2)  
" 新滝入口 4卵 27-XI-1987 櫛原俊嗣 48)  
" 東谷 34)  
" 一の鳥居 4卵 20-I-1991 27)  
猪名川町槻並 60卵 XII-1994 27)

猪名川町三草山 1♂ 24-VI-1980 黒田昌利 23)  
" 阿古谷 1幼虫 19-IV-1960 田中 蕃 1)  
" 上阿古谷 1♂ 6-VI-1982 櫛原俊嗣 48)  
" 上原 1♀ 18-VI-1988 松井賢慈 48)  
" 山田 1♀ 17-VI-1979 品川 恭 28)  
" 大谷 ♂数頭 11-VI-1997 56)  
" 内馬場 1♂ 19-VI-1988 高橋邦明 70)  
" 清水 lex.(目撃) 17-VI-1990 70)  
" 島 1♀ 3-VI-1970 70)  
" 銀山 19-VI-1977 小坂利明 64)  
" 栢原(大谷) 26-VI-1988 小坂利明 64)  
" 民田 5卵 24-XI-1996 71)  
宝塚市丸山 1♀ 4-VI-1983 遠山 豊 48)  
" 武田尾 幼虫 24-IV-1956 田中 蕃 1)  
" 西谷猪倉峠 ♂ 13-IV-1979 78)  
西宮市山口町金仙寺 3♂ 5-VI-1979 松浦徹 14)  
" 百合野町 5幼虫 7-I-1992 27)  
神戸市  
東灘区御影 1♀ 18-VI-1951 吉坂道雄 49)  
再度山 1♂1♀ 11-VI-1961 吉坂道雄 49)  
北区山の街 1♀ 20-VI-1956 吉坂道雄 49)  
北区道場町鎌倉峠 7卵 30-XI-1996 71)  
北区道場町生野 lex.(目撃) 7-VI-1997 45)  
北区道場町 1♀ 8-VI-1986 住田正雄 45)  
中央区市ヶ原 23exs. 9-VI-1963 三木 進 68)  
" 布引 1幼虫 27-VI-1963 若林守男 1)  
兵庫区烏原 1♂ 31-V-1959 尾崎 勇  
西区押部谷 2♂2♀ 17-VI-1962 尾崎 勇  
" 伊川谷町前開 lex. 17-VI-1964 大東康人  
" 伊川谷町長坂 lex. 12-VI-1965 大東康人  
" 神出町 3♂ 4-VI-1980 高島 昭  
" 檀谷町寺谷 2幼虫 5-V-1994 大東康人  
兵庫区. 山田町. 住吉町 34)  
明石市大蔵谷東山西山 lex.  
2-VI-1963 大東康人  
三木市大村 3♂ 6-VI-1987 永幡嘉之 17)  
" 福井 1♀ 13-VI-1987 永幡嘉之 17)  
" 志染町戸田 1♀ 1-VI-1986 芝 直幸 17)  
" 志染町大谷 7卵 14-III-1993 山下剛史  
" 伽耶院 卵殻 14-III-1993 山下剛史 72)  
" 別所町朝日丘 1♀羽化  
18-V-1987 永幡嘉之 17)

三木市別所町興治 2♂ 8-VI-1986 永幡嘉之(17)  
 吉川町新田 7卵 中旬-XII-1994 27)  
 小野市下来住 5幼虫 16-IV-1981 山本俊良  
 加古川市志方町広尾 4幼虫  
 17-IV-1983 近藤伸一  
 西脇市武島 24-V-1959 32)

西脇市西林寺 2-VII-1957 32)  
 // 比延(岡野山) lex.  
 2-VI-1974 徳岡正己  
 // 蒲江 30卵 25-II-1978 徳岡正己  
 // 塚口 3卵 26-II-1978 徳岡正己  
 // 谷 16幼虫 8-IV-1978 徳岡正己  
 // 大木 8卵 25-II-1979 徳岡正己  
 // 板波 1♂ 10-VI-1981 徳岡正己  
 // 出合町木地山 8幼虫  
 8-IV-1990 徳岡正己  
 黒田庄町船町27卵 3-I-1981 徳岡正己  
 // 白山 2)  
 八千代町上三原 5卵 18-I-1981 徳岡正己  
 // 仕手原 4幼虫 20-IV-1991 徳岡正己  
 中町西安田 3幼虫 15-IV-1990 徳岡正己  
 社町 下久米 1♀ 25-VI-1977 徳岡正己  
 東条町黒谷 8幼虫 3-V-1995 山下剛史  
 姫路市上砥堀 1♂ 13-VI-1971 相坂耕作 65)  
 // 奥佐見 1♂ 1-VI-1980 広畑政巳 65)  
 // 仁豊野 1♀ 15-VI-1991 山下剛史  
 // 林田町大堤 10卵 29-I-1984 近藤伸一  
 // // 六九谷 4卵  
 13-I-1980 広畑政巳 65)  
 // 広峰・増井 58)  
 夢前町岡 1♂ 5-VI-1983 広畑政巳  
 // 大坪 18卵 23-XII-1984 広畑政巳  
 // 坂根 2)  
 福崎町七種山 1♀ 7-VI-1974 石井為久  
 龍野市平木 5卵  
 18-XII-1977 福原・白井・糞谷 1)  
 新宮町牧 13卵 15-I-1984 広畑政巳 51)  
 // 千本 3卵 15-I-1984 広畑政巳 51)  
 一宮町福中 1幼虫 20-V-1984 広畑政巳  
 相生市大谷町 1♂ -VI-1973 尾崎 勇  
 // 矢野町三濃山 5♂  
 1-VI-1963 岩村 巖  
 赤穂市有年 1♂ 15-VI-1965 岩村 巖  
 // 木津 1♂ 1-VI-1969 粉引敏彦  
 // 横尾 1♂ 15-VI-1965 岩村 巖 59)  
 // 尾崎 1♀ 21-VI-1968 岩村 巖 59)  
 // 大津 1♂ 1-VI-1967 粉引敏彦 59)  
 // 折方 1♂1♀ 23-V-1974 岩村 巖 59)

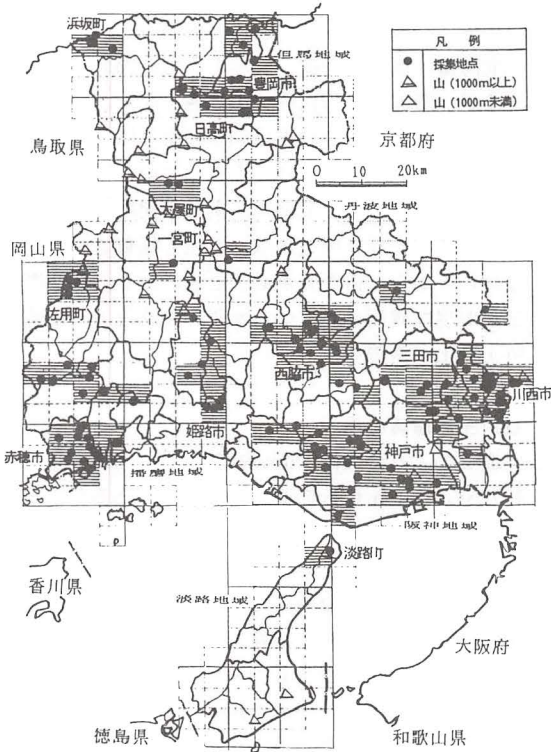


図2 ウラゴマダラシジミの県内分布

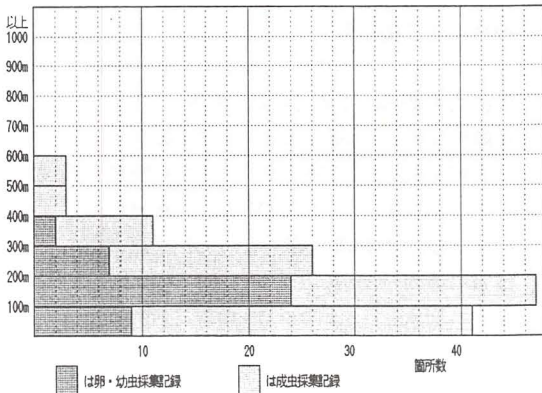


表2 ウラゴマダラシジミの垂直分布

赤穂市目坂	1♂	28-V-1975	岩村 巖	59)
"  中山	1♂	28-V-1975	岩村 巖	59)
"  横山	1♂1♀	21-V-1975	岩村 巖	59)
"  上所	1♀	24-V-1976	岩村 巖	59)
"  牟礼	1♂	24-V-1976	岩村 巖	59)
"  坂越	1♀	21-V-1977	岩村 巖	59)
"  春日	2幼虫	3-V-1978	岩村 巖	59)
"  田端	1幼虫3蛹	8-V-1978	岩村 巖	59)
"  周世	2幼虫	3-V-1978	岩村 巖	59)
上郡町黒石	1♂1♀	21-VI-1985	墨谷 健	23)
"  野桑	2♂1♀	1-VI-1963	岩村 巖	
"  富満	1♂	2-VI-1963	岩村 巖	
佐用町上石井	1♀	17-VI-1962	岩村 巖	
"  若州	2卵	27-XI-1983	広畑政巳	
"  奥海				4)
"  青木	1♀	12-VI-1982	高島 昭	
上月町久崎	1♂	31-VI-1962		
"  西新宿	3♂2♀	4-VI-1993	高島 昭	
三日月町三原	2♂	2-VI-1963	西垣憲治	
豊岡市小島	1♀	6-VI-1974	小林健介	1)
"  下鶴井	1♂	21-VI-1982	前平照雄	4)
"  土洩	1♂	27-VI-1963	木下賢司	4)
"  福成寺	1♂	14-VI-1979	木下賢司	4)
"  上佐野		9-VI-1973	谷角素彦	55)
"  吉井	2♂	4-VI-1989	木下賢司	5)
"  船谷	19卵	26-XI-1996	横山隆司	76)
城崎町雲光寺(来日岳)	1♀			
		6-VI-1961	木下賢司	
竹野町須谷	3♂2♀	3-VI-1964	小崎茂樹	4)
日高町鶴岡	3♂	15-VI-1981	木下賢司	4)
"  神鍋山	1♀	19-VI-1991	木下賢司	5)
"  上ノ郷	3♂	7-VI-1987	木下賢司	5)
"  栃本	1♂	15-VI-1981	木下賢司	4)
"  稲葉三川山目撃		18-VI-1994	大竹隆明	
"  分尾				62)
香住町相谷	16卵	24-XI-1997		79)
浜坂町田君	2卵	19-III-1977	高田忠彦	1)
"  城山	3exs.	15-VI-1986	黒井和之	47)
"  諸寄	49卵	23-XI-1997	横山隆司	77)
生野町栃原	1ex.	22-VI-1968	大東康人	5)
大屋町天滝	1♀	28-VI-1965	木下賢司	4)
"  筏	1♀	22-VI-1986	墨谷 健	23)

西紀町小坂	4幼虫	30-IV-1990	徳岡正己	
篠山町西野々天引峠	5卵			
		3-XI-1997	横山隆司	77)
北淡町谷山	卵	7-I-1979		14)

3 オナガシジミ

(1) 分布の状況

北海道、本州、四国、九州の平地、山地に分布するが、南部に移るに従い山地性となり、分布は局限される。県下の分布は図3のように、西播磨北部から但馬西部にかけて点在しているが、個体数は少ない。神戸市北部に1例採集記録があるが、古い記録であり、周辺地域から全く採集されていないことから、再調査が必要と思われる。香住町三川が現在確認されている北限の生息地で、山崎町上の上が南限である。

(2) 生息環境の現況

表3のように標高200m未満の低地(三川権現神社)から1,000m付近の高地まで記録はあるが、一般的な生息地は、オニグルミが分布する標高300m~800m程度の溪流沿いの落葉広葉樹林である。成虫の採集例は少ないのは、個体数が少ないこともあるが、成虫の発生時期が他のゼフィルスに比べて遅いことも理由として考えられる。但馬から西播磨にかけては、オニグルミが広く分布しているので、今後の調査を期待したい。

(3) 採集記録

神戸市北区道場町				
	1♂	10-VIII-1969	白井一郎	37)
大河内町砥峰	1♀	24-VI-1978	石井	1)
山崎町上の上	10卵	30-IV-1978	福原	1)
一宮町福知溪谷	25卵	30-X-1969	勝屋 潤	38)
"  阿舍利		9-V-1976	高田忠彦	1)
"  樫ノ木林道	5卵	-XI-1983	近藤・浅田	
波賀町赤西	6幼虫	15-V-1983	近藤伸一	
"  音水	1♀	16-VII-1978	広畑政巳	
"  坂の谷林道	数卵	12-VIII-1990		40)
日高町金山				4)
"  金山峠				4)



日高町阿瀬溪谷	31-VII-1977	41)
香住町三川	4卵 21-XI-1977 若林・高田	1)
〃 三川山三川権現神社	1卵 15-IX-1976	42)
温泉町霧ヶ滝	30卵 15-I-1992 永幡・黒井	39)
〃 肥前畑	6卵 30-X-1977 高田・井出	1)
〃 花口	2卵 15-I-1992 永幡・黒井	39)

美方町熱田	4卵 4-IV-1976 高田忠彦	1)
村岡町和佐父	1卵 17-X-1977 高田忠彦	1)
朝来町平野	18卵 6-III-1978 高田忠彦	1)
大屋町横行	6卵 19-XI-1977 若林・高田	1)
〃 天滝	1♀ 4-VII-1970 木下賢司	16)
〃 杉ヶ沢	1♂ 10-VIII-1969 白井一郎	1)
〃 西谷	1♂ 30-VII-1964 中尾淳三	31)
関宮町須賀ノ山	12卵 10-X-1977 高田・福田	1)
〃 福定	3♂ 14-VII-1991 永幡嘉之	32)
養父町建屋	3令幼虫 5-V-1976 高田忠彦	1)
八鹿町妙見	10卵 14-X-1977 高田・井出	1)

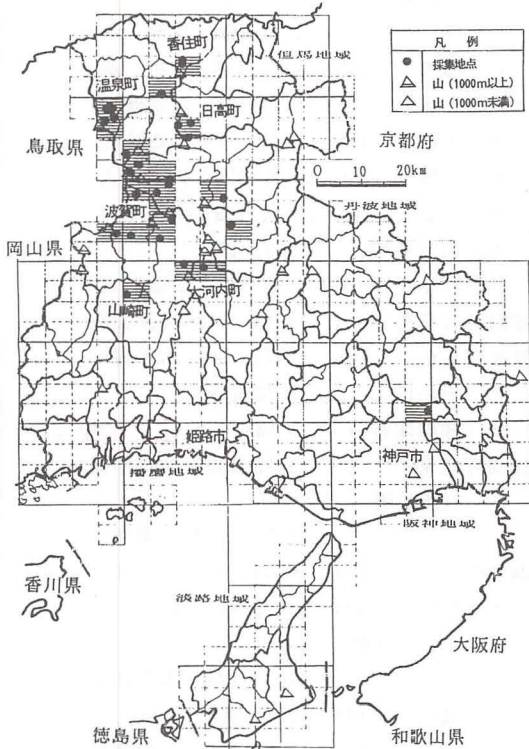


図3 オナガシジミの県内分布

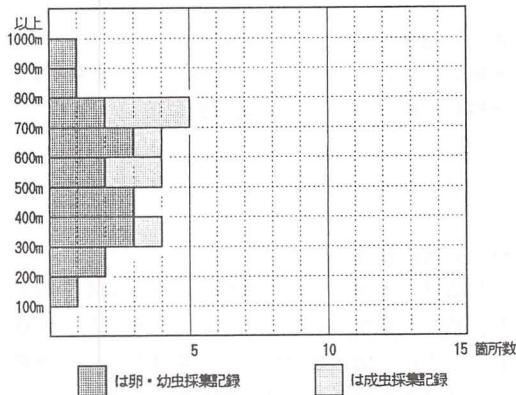


表3 オナガシジミの垂直分布

#### 4 ウスイロオナガシジミ

##### (1) 分布の状況

北海道、本州、九州の平地、山地に分布する。県下の分布は図4のように、西播磨西部と但馬に点在している。淡路島の北淡町に卵の採集記録が1例あるが、古い記録であり、再調査を要する。北限は浜坂町城山で、相生市小河が現在生息が確認出来る南限である。

##### (2) 生息環境の現況

表4のように標高100mから400m以下に生息地が集中しているが、1,000mを越える場所でも採集されている。西播磨地域の低山地ではナラガシワが分布する 雑木林が主要な生息域で、中央部の高標高の生息地はミズナラが主体の落葉広葉樹林である。北限の浜坂町城山では、海岸付近に自生するカシワとミズナラの混交林で採集されている。

##### (3) 採集記録

大河内町砥峰	6♂4♀ 12-VII-1966 米村和繁
新宮町牧	9卵 15-I-1984 近藤伸一 51)
〃 千本	14卵 15-I-1984 広畑政巳 51)
〃 二柏野	8卵 6-I-1984 広畑政巳 52)
〃 角亀	1♀ 9-VI-1974 尾崎 勇
〃 新宮	3♂1♀ 15-VI-1963 岩村 巖
一宮町井ノ内	2卵 3-IV-1977 若林守男 1)
〃 福中、上片田部落	3)
相生市小河	3♂1♀ 26-VI-1966 岩村 巖

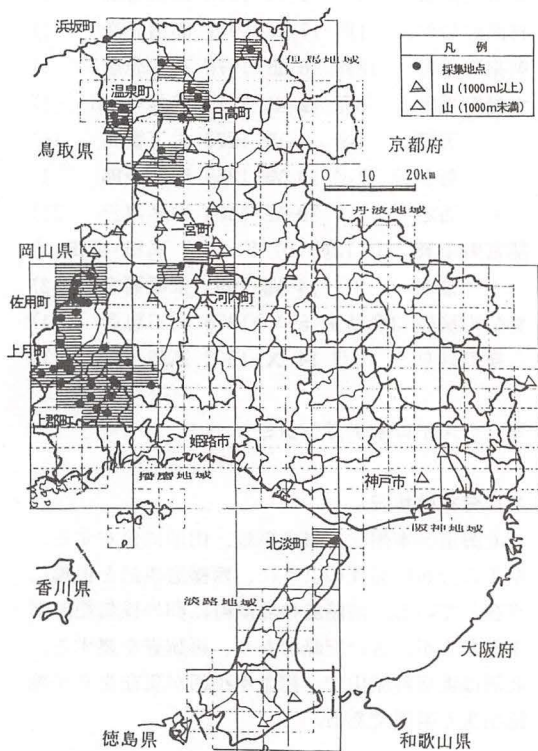


図4 ウスイロオナガシジミの県内分布

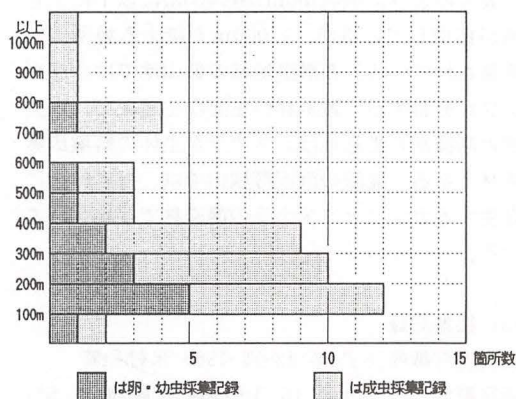


表4 ウスイロオナガシジミの垂直分布

- 上郡町尾長谷 1exs. 12-VI-1997 56)
- 佐用町青木 1♂1♀ 14-VI-1959 岩村 巖 33)
- " 羽蔵 3♂1♀ 17-VI-1972 喜多舒彦 1)
- " 下石井 5卵 4-I-1976 広畑政巳
- " 若州 20卵 27-XI-1983 広畑政巳
- " 上石井 1♀ 24-VI-1967 米村和繁
- " 日名倉山 2♂1♀ 14-VII-1968 米村和繁
- " 平谷 2♂1♀ 21-VI-1961 尾崎 勇
- " 海内 6♂♀ 23-VI-1963 岩村 巖
- 上月町下秋里 3♂ 15-VI-1978 広畑政巳
- " 上秋里 24卵 27-II-1981 広畑政巳
- " 久崎 1ex. 18-VI-1967 大東康人
- " 中山 1ex. 29-VI-1997 大東康人
- " 円光寺 2exs. 12-VI-1997 56)
- 三日月町春哉 7卵 17-II-1980 広畑政巳
- 城崎町来日岳 2exs. 11-VII-1978 福井文嗣 4)
- 日高町名色 1ex. 27-VI-1978 木下賢司 4)
- " 三川山 1♀ 4-VII-1993 27)
- " 神鍋溪谷 1♀ 20-VIII-1995 27)
- 村岡町大笹 1♀ 3-VII-1983 前平照雄 4)
- " 村岡昆陽川上流 1ex. 16-VII-1994 大東康人 5)
- 温泉町上山 1ex. 19-VIII-1984 黒井和之 4)
- " 肥前畑 4卵 22-X-1977 糺谷 徹 1)
- " 花口 終齢3幼虫 19-V-1985 黒井和之 4)
- " 霧滝 4卵 15-I-1992 永幡・黒井 20)
- " 海上 1ex. 28-VI-1991 永幡嘉之 5)
- 浜坂町本谷 2exs. 25-VI-1993 永幡嘉之 26)
- " 城山 1ex. 19-VI-1992 永幡嘉之 5)
- 関宮町須賀ノ山 10-VIII-1957 山本広一 1)
- 大屋町杉ヶ沢 25-VI-1983 入江照夫 43)
- 北淡町江崎 10卵 31-X-1978 高田・井出 1)

5 ウラミスジシジミ

(1) 分布の状況

北海道、本州、九州の平地、山地に広く分布する。県下の分布は図5のように、全域に広く点在しているが、個体数は少ない。東播磨から西播磨にかけて大きな分布の空白域がある。しかし、これらの区域も生息する条件は整っているものと思



われ、詳しい記録がないだけで、新しい生息地が発見される可能性は極めて高い。淡路島では北淡町で1例だけ記録はあるだけで、今後の調査が期待される。竹野町小丸が現在確認されている北限の生息地である。

(2) 生息環境の現況

表5のように標高100mから300mにかけて生息地が集中しているようであるが、高標高でも産地がみられ、標高に対する適応力はあるようである。アベマキ、コナラ、ナラガシワなどを主体とした低山地の広葉樹林や、高標高のミズナラ林、カシワ林に生息する。かつては六甲山系でもよくみられたようであるが、最近の記録はほとんどないので再発見を期待したい。

(3) 採集記録

川西市笹部	10-VI-1974	勝屋 潤	18)
"  大和	4-VII-1981	仲田元亮	18)
"  新滝道	1♀ 14-VIII-1972	松浦 徹	48)
三田市上青野	1♀ 29-VII-1995		27)
"  藍本	2♀ 18-VIII-1967	高橋邦明	28)
"  高次	7exs. 16~19-VI-1963	森 博	44)
猪名川町三草山	1♂ 22-VI-1980	黒田昌利	23)
"  上阿古谷	2卵 20-II-1991		16)
"  银山	2-IX-1972	小坂利明	18)
西宮市山口町金仙寺	1ex.		
	11-VI-1983	春藤政司	14)
芦屋市三条町	1♂ 12-VI-1983	西 隆広	35)
神戸市			
東灘区御影			34)
"  甲南大付近			34)
灘区 篠原	1ex. 16-VII-1930	小林賢三	36)
"  青谷	1ex. 16-VI-1956	吉坂道雄	49)
中央区布引	10exs. 14-VI-1964	三木 進	4)
"  再度山		三木 進	
北区山の街	1ex. 28-VI-1959	吉坂道雄	49)
"  山田町森林植物園	1♀		
	26-VI-1977	山下剛史	
"  藍那	1♀ 20-VI-1995	青木陽一	69)
"  有馬			34)
"  丹生山		永幡嘉之	

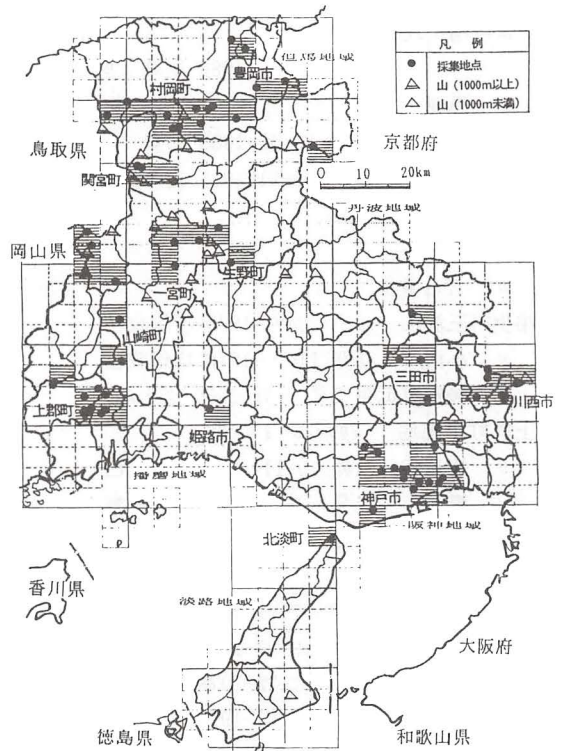


図5 ウラミスジジミの県内分布

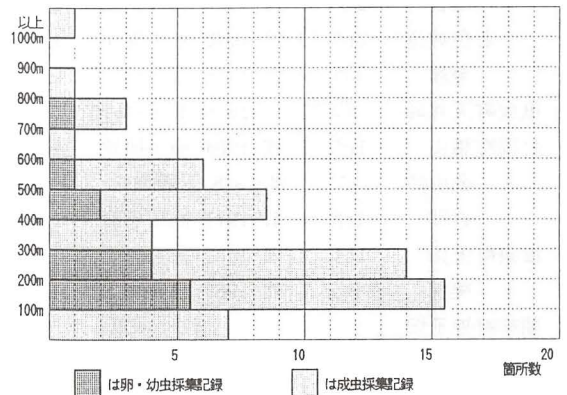


表5 ウラミスジジミの垂直分布

須磨区多井畑		34)
三木市志染町戸田	1♀ 22-VI-1986	永幡嘉之 17)
姫路市広峰	1♀ 23-VI-1982	沼田憲治 60)
新宮町牧	2卵 15-I-1984	川崎悟良 51)



山崎町塩田		3)
一宮町福中2♂1♀羽化		
	20-V-1980 尾崎 勇	53)
〃 黒原	佐々木薫	
〃 公文付近 1卵	23-X-1983 勝屋 潤	38)
千種町江浪峠 1♂	25-VI-1966 喜多舒彦	1)
〃 西河内木地山		57)
〃 鷹巣		57)
〃 日名倉山		57)
相生市三濃山 2♂	22-VI-1975 広畑政巳	
〃 小河 8卵	11-I-1976 広畑政巳	
〃 矢野町瓜生 2♀	5-VII-1966 唐土洋一	
上郡町金出地 7卵	20-I-1997	74)
〃 佐用谷 1卵	19-II-1984 広畑政巳	
〃 野桑 1♀	3-VII-1966 米村和繁	
〃 小野豆 6卵	19-II-1984 広畑政巳	
〃 黒石		57)
豊岡市妙楽寺 1♂	7-VI-1983 福井丈嗣	4)
〃 奥野 1ex.	19-VI-1964 木下賢司	4)
城崎町来日岳 1ex.	11-VII-1978 福井丈嗣	4)
竹野町小丸 1ex.	29-VI-1978 井出敏晴	1)
日高町岩中 1♂	7-VII-1978 木下賢司	4)
〃 栃本 1♂	23-VI-1979 木下賢司	4)
〃 山宮 2♂	30-VI-1983 前平照雄	4)
〃 名色林道 2♂	13-VII-1978 木下賢司	4)
〃 金屋 3卵	14-III-1976 若林・高田	1)
但東町天谷峠 2卵	21-II-1976 高田・井出	1)
村岡町糶山 1♂	3-VII-1984 前平照雄	4)
〃 金山峠 3♂	16-VII-1988 近藤伸一	
〃 村岡 1卵	20-XI-1977 高田忠彦	1)
温泉町上山 1ex.	3-VII-1982 黒井和之	4)
〃 美原 2exs.	2-VII-1983 黒井和之	4)
朝来町神子畑	佐々木薫	
生野町栃原 3卵	-XII-1996 近藤伸一	
関宮町杉ヶ沢 3卵	5-IV-1977 高田・井出	1)
〃 大久保 5卵	5-XI-1978 徳岡正己	
〃 福定 4卵	23-XI-1983 徳岡正己	
丹南町東吹 10卵	21-IX-1978 徳岡正己	
北淡町江崎 3卵	31-X-1978 高田・井出	1)

6 ウラクロシジミ

(1) 分布の状況

北海道南部、本州、四国、九州の山地に広く分布する。県下の分布は図6のように、西播磨北部から但馬全域にかけて分布している。食樹であるマンサクは、県南部にも分布するが、過去に三田市で1例古い採集記録があるだけで、他に生息が確認された場所はなく、現在のところ南限は山崎町、大河内町付近と思われる。

(2) 生息環境の現況

但馬では標高100m以下の低山地から1,000mを越える場所まで分布がみられ、比較的個体数も多い。西播磨では標高300m以上の奥山に生息する。溪流に沿ったマンサクが分布する明るい落葉広葉樹林が生息に適しているようである。

(3) 採集記録

三田市高次 1♂	23-VI-1965 森 博	44)
大河内町宮野 6♂	25-VI-1983 高嶋 明	46)
〃 横瀬 4♂	25-VI-1983 高嶋 明	46)
山崎町上ノ上		
一宮町公文	佐々木薫	
〃 縦ノ木 3♂	20-VI-1982 佐々木薫	46)
〃 千町 2卵	25-III-1977 高田・井手	1)
〃 百千家満 20卵	7-III-1982 花岡 正	22)
〃 草木 2幼虫	5-V-1982 佐々木薫	46)
〃 福野 1幼虫	9-V-1982 佐々木薫	46)
波賀町坂の谷 4卵	10-VII-1977 高田・井手	1)
〃 道谷 3卵	19-X-1977 井出敏晴	1)
千種町江浪峠 1♂	25-VI-1966 喜多舒彦	1)
〃 鍋ヶ谷 1幼虫	8-V-1982 入江照夫	46)
〃 西河内千種高原 3幼虫		
	7-V-1988 徳岡正己	
豊岡市愛宕山 1♂1♀	14-VI-1964 木下賢司	4)
〃 高屋(金山) 1♀	17-VI-1974 木下賢司	4)
〃 福成寺 1♂	14-VI-1979 木下賢司	4)
〃 宮井 1♀	17-VI-1979 木下賢司	4)
〃 江野 1♂	17-VI-1982 前平照雄	4)
〃 奥野 2♂1♀	9-VI-1983 前平照雄	4)
〃 小島 2♂3♀	9-VI-1974 小林健介	

- 豊岡市妙楽寺 31-V-1973 中野 真 55)
- 〃 森尾 22-VI-1974 中野 真 55)
- 城崎町来日 1♂ 11-VI-1985 福井丈嗣 4)
- 〃 来日岳 3♂1♀ 18-VI-1978 木下賢司 4)
- 〃 大師山 5♂ 11-VI-1985 福井丈嗣 4)
- 〃 戸島 10幼虫 3-V-1984 徳岡正己

- 日高町名色林道 1♂ 24-VI-1979 木下賢司 4)
- 〃 栃本 1♂ 18-VI-1984 福井丈嗣 5)
- 〃 小河江 1♀ 9-VI-1985 木下賢司 5)
- 〃 金谷 2♂ 9-VI-1982 前平照雄 4)
- 〃 稲葉(三川山) 1♂ 20-VI-1985 福井丈嗣 5)
- 〃 三川山 1♂1♀ 28-VI-1987 田岡健一郎 23)
- 〃 神鍋山 1♂ 22-VI-1997 45)
- 竹野町阿金谷 1♀ 8-VI-1964 小崎茂樹 4)
- 香住町三川 3卵 26-XI-1977 高田・井手 1)
- 〃 三川権現神社 1幼虫 25-VI-1982 徳岡正己
- 〃 余部市午 多数 7-VI-1994 永幡嘉之 25)
- 出石町桐野 1♂ 18-VI-1983 高島 昭 4)
- 〃 奥山 1♀ 24-VI-1984 木下賢司 4)
- 〃 袴狭 3♂ 9-VI-1981 木下賢司 4)
- 〃 出石神社 3卵 16-X-1977 高田・井手 1)
- 扇ノ山 辻 啓介
- 温泉町上山 1♂ 8-VII-1984 黒井和之 4)
- 〃 菅原 5卵 9-V-1978 佐々木薫
- 〃 檜尾 1♀ 12-VI-1983 黒井和之 4)
- 〃 海上 1卵 30-X-1977 高田・井手 1)
- 〃 肥前畑 1卵 30-X-1977 高田・井手 1)
- 〃 越坂 5♂2♀ 13-VI-1992 永幡嘉之 5)
- 〃 霧ヶ滝 2♂ 17-VI-1992 永幡嘉之 5)
- 〃 扇ノ山小ズッコ 2♀ 20-VII-1992 永幡嘉之 5)
- 美方町熱田 7卵 10-VI-1977 高田・井手 1)
- 〃 秋岡 3卵 9-X-1994 近藤伸一
- 村岡町村岡 1♀ 2-VII-1978 高田忠彦 1)
- 〃 瀨川山 1♂ 23-VI-1978 福井丈嗣 4)
- 〃 和佐父 1♀ 6-VII-1992 永幡嘉之 5)
- 浜坂町田君 1卵 19-III-1977 高田忠彦 1)
- 〃 本谷 2♂ 2-VI-1994 永幡嘉之 25)
- 〃 久斗山 3♂ 14-VI-1991 永幡嘉之 5)
- 朝来郡段ヶ峰 多数 29-VI-1951 西村公夫
- 生野町栃原 1幼虫 8-V-1983 近藤伸一 5)
- 〃 黒川 3卵 24-III-1985 近藤伸一 5)
- 和田山町糸井 1幼虫 25-IV-1982 広畑政巳
- 養父郡野谷 6卵 5-III-1978 高田・福原・糞谷 1)
- 関宮町鉢伏山小代越 1♂ 28-VI-1992 永幡嘉之 5)
- 〃 杉ヶ沢 1ex. 25-VI-1983 入江照夫 43)

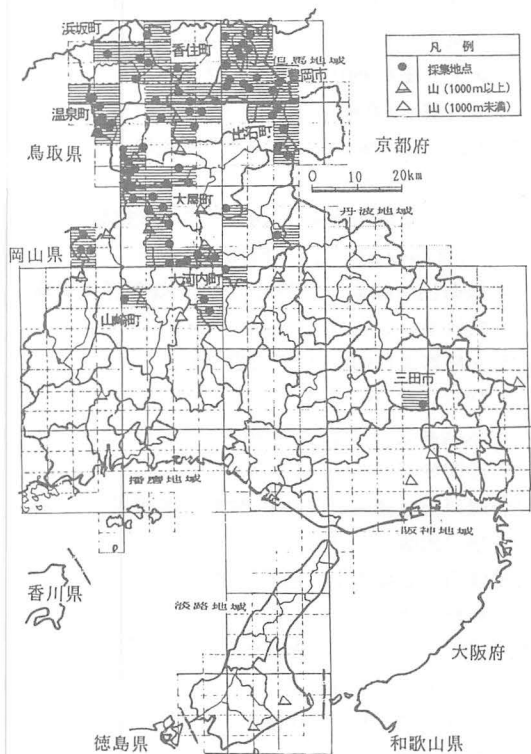


図6 ウラクロシジミの県内分布

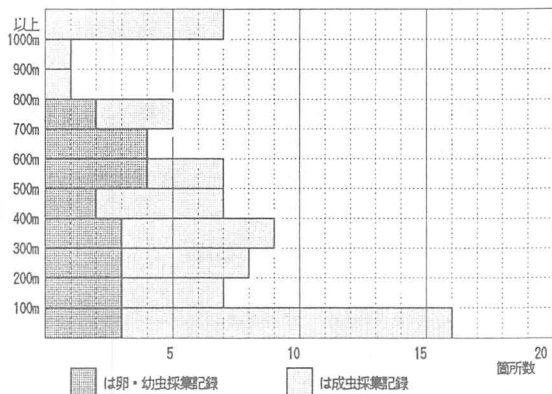


表6 ウラクロシジミの垂直分布

- 関宮町氷ノ山夏道 7♀ 4-VII-1972 木下賢司 4)  
 // 福定 7♀ 24-VII-1991 永幡嘉之 5)  
 // 相地 4卵 17-X-1977 高田忠彦 1)  
 大屋町横行 1♂1♀ 19-VI-1982 高島 昭  
 // 加保 10卵 21-X-1976 糀谷 徹 1)  
 // 若杉 1ex. 25-VI-1983  
 // 氷ノ山林道 1♀ 4-VII-1993 大東康人 5)
- <参考文献>
- (1) 高田忠彦・井手敏晴(1978) 兵庫県産蝶類調査報告 MDKニュース(28)79:27~35  
 (2) 蝶類年鑑出版部(1989) スーパー採卵術 蝶研出版(茨木市)  
 (3) 尾崎 勇(1984) 兵庫県の蝶相(2) 揖保川水系の蝶相 ひろおび(7):16~22  
 (4) 木下賢司・前平照雄・福井丈嗣(1986) 但馬地域の蝶類目録 IRATSUME(10):55~95  
 (5) 木下賢司ほか(1996) 但馬地域の産蝶目録II IRATSUME(20):66~86  
 (6) 登日邦明(1974) 淡路島の蝶相(2) 佳香蝶26(99):25~32  
 (7) 尾崎 勇(1982) 一宮町で採集したゼフィルス数種の記録 ひろおび(6):38  
 (8) 岩村 巖(1980) 西播の蝶分布資料(7) 山崎の蝶類 ひろおび(5):2~9  
 (9) 相坂耕作(1980) 姫路市の昆虫 てんとうむし(6):10-24  
 (10) 広畑政巳(1994) 市川町で採集したゼフィルス数種の記録 姫昆サロンニュース(100):29  
 (11) 山本広一(1971) 兵庫県の蝶相 月刊むし(3):2~10  
 (12) 苦木隆幸(1982) 夏季採集大会報告 ひろおび(6):39  
 (13) 永幡嘉之(1992) 夏の訪れ-兵庫の尾根・奥但馬にて 因幡のむし(27):50~53  
 (14) 蝶類年鑑出版部(1991) 蝶類年鑑1990 蝶研出版(茨木市)  
 (15) 大阪昆虫同好会編(1989) 北摂の蝶 大阪昆虫同好会(宝塚市)  
 (16) 蝶研出版編集部(1991) 1991年蝶類採集情報 蝶研サロン(48):156  
 (17) 永幡嘉之(1993) 三木市内における蝶の採集記録 きべりはむし20(1):10~22  
 (18) 小坂利明(1994) 猪名川流域の蝶 詩画工房・大阪  
 (19) 加藤昌宏・武衛晴彦(1981) 神戸の蝶 神戸市立教育研究所・神戸市  
 (20) 永幡嘉之・黒井和之(1991) 1992年採卵情報 昆虫ずかん(32):7  
 (21) 田中 蕃(1980) 森の蝶ゼフィルス 築地書店・東京  
 (22) 花岡 正(1982) ウラカシジミの新産地 てんとうむし(8):27  
 (23) 京都大学蝶類研究会(1987) 日本産蝶類239種類の記録(上) SPINDANOU(2)  
 (24) 蝶研出版編集部(1992) 1992年蝶類採集情報 蝶研サロン(64):20~24  
 (25) 永幡嘉之(1995) 但馬の蝶3題 IRATSUME(19):1-3  
 (26) 永幡嘉之(1994) 浜坂町九斗山のゼフィルスの記録 IRATSUME(18):43  
 (27) 蝶研出版編集部(1996) 蝶類採集情報・総集編 蝶研出版・茨木市  
 (28) 蝶研出版編集部(1992) 蝶類年鑑1989 蝶研出版・茨木市  
 (29) 花岡 正(1980) 赤西溪谷でオナガシジミを採集 てんとうむし(6):33  
 (30) 高田忠彦(1976) 兵庫県下のオナガシジミの産地 MDKニュース26(79):19  
 (31) 山本広一・吉坂道雄(1965) 兵庫県蝶類目録(4) 兵庫生物5(1):52  
 (32) 猪俣涼一・岡本 清(1960) 多可西脇地方の昆虫 兵庫生物4(1):24-28  
 (33) 岩村 巖・中谷貴寿(1960) 佐用郡北部に蝶を採集して 兵庫生物4(1):36-60  
 (34) 山本広一・吉坂道雄(1959) 兵庫県蝶類目録(2) 兵庫生物3(5):358-364  
 (35) 西 隆広(1984) 芦屋市の蝶 てんとうむし(9):28-38  
 (36) 小林賢三(1930) ダイセンシジミの新産地について ZEPHYRUS(2)184~185  
 (37) 白井一郎(1930) オナガシジミを神戸市内でとる 昆虫と自然4(11):34



- (38) 勝屋 潤(1984) 兵庫県ゼフィルス採卵紀行  
(1) きべりはむし12(1):15-19
- (40) 蝶研出版編集部(1990) 1990年蝶類採集情報  
蝶研サロン(42):25
- (41) 谷角素彦(1978) 日高町金山の蝶  
IRATSUME(2):11~21
- (42) 蝶研出版編集部(1996) 1996年蝶類採集情報  
蝶研サロン(115):13
- (43) 入江照夫(1984) 梅雨期杉ヶ沢の蝶  
ひろおび(7):48
- (44) 永幡嘉之(1993) ウラクロシジミの県南部に  
おける記録 きべりはむし21(1):22-23
- (45) 蝶研出版編集部(1997) 1997年蝶類採集情報  
蝶研サロン(124):14~22
- (46) 佐々木薫(1984) 兵庫県南西部に於けるウラ  
クロシジミの分布 ひろおび(7):43
- (47) 黒井和之(1988) 浜坂町城山の蝶類  
IRATSUME(12):11~13
- (48) 大阪昆虫同好会(1989) 北摂の蝶・宝塚市
- (49) 日浦 勇(1970) 日本列島の蝶 大阪市立自然  
博物館収蔵資料目録第2集
- (51) 川崎悟良(1984) ヒロオビミドリシジミを追  
って ひろおび(7):14
- (52) 広畑政巳(1989) 兵庫県の蝶雑記(2)  
ひろおび(8):14
- (53) 尾崎 勇(1982) 一宮町で採集したゼフィル  
ス数種の記録 ひろおび(6):38
- (55) 遠藤知二ほか(1975) 豊岡市周辺の蝶  
兵庫県自然保護協会但馬支部研究紀要1(1)
- (56) 蝶研出版編集部(1997) 1997年蝶類採集情報  
蝶研サロン(123):26-35
- (57) 尾崎 勇(1980) 兵庫県の蝶(1) 千種川水系  
の蝶相 ひろおび(5):24~30
- (58) 木村三郎(1984) 広峰、増位山系の昆虫  
てんとうむし(9):53-58
- (59) 岩村 巖(1979) 西播の蝶分布資料(6) 赤穂  
市の蝶類 ひろおび(4):1~9
- (60) 木村三郎(1982) 姫路市でウラミスジシジミ  
てんとうむし(8):45
- (61) 黒井和之(1993) 但馬の蝶分布資料 シジミチ  
ョウ科ミドリシジミ族(その1)  
IRATSUME(17):15~27
- (62) 高橋 匡(1979) 但馬地方昆虫目録(予報第一  
報)の蝶分布資料 IRATSUME(3):8~18
- (63) 足立義弘(1978) 豊岡市下鶴井付近の数種の  
チョウ IRATSUME(2):22~25
- (66) 小倉 滋・高橋久夫(1978) 三木市内の蝶につ  
いて きべりはむし6(1/2):8~19
- (67) 法西 浩(1993) 兵庫県西宮市甲山でウラキ  
ンシジミを採集 蝶研フィールド8(9):30
- (68) 三木 進(1979) 六甲山系(西部)の蝶  
きべりはむし7(1):2~7
- (69) 青木陽一(1997) 神戸市の蝶  
蝶研フィールド 12(5):4-12
- (70) 高橋邦明(1991) 北摂における1985年-1990年  
の採集記録 Crude(35):1-2
- (71) 蝶研出版編集部(1996) 1996年蝶類採集情報  
蝶研サロン(127):16-20
- (72) 蝶研出版編集部(1995) 蝶類年鑑1994年  
蝶研出版・茨木市
- (73) 蝶研出版編集部(1997) 蝶類年鑑1995年  
蝶研出版・茨木市
- (74) 蝶研出版編集部(1997) 1997年蝶類採集情報  
蝶研サロン(119):11
- (75) 辻 啓介ほか(1970) 多紀郡蝶類目録(追報そ  
の2) 兵庫生物6(2):158
- (76) 横山隆司(1997) URGO(6)
- (77) 横山隆司(1997) URGO(10)
- (78) 宝塚の昆虫1(1992) 宝塚市教育委員会
- (79) 蝶研出版編集部(1997) 1997年蝶類採集情報  
蝶研サロン(130) 付録
- (80) 京都大学蝶類研究会(1981) 1981年の採集記  
録(蝶類) SPINDA(7):1-43

## 兵庫県のククイムシ類

高橋 寿郎

### まえがき

ククイムシ類は森林害虫としてよく知られているが、小型であることとあまり見ばえのしないものが多いことから一般的な関心は少なく、兵庫県下にどのような種が分布しているのかといった調査・研究も大変少ない。これからの分野を多く残しているグループであろうと考えられる。

日本に産するククイムシ類はナガククイムシ科2亜科3属8種、ククイムシ科4亜科55属303種(日本産昆虫類目録, I, 1989による)が知られている。

兵庫県からは現在のところナガククイムシ科4種、ククイムシ科57種の産が知られているのみである。此処に兵庫県産ククイムシ類の分布を中心とした産出状況のとりまとめをして見た。

### 兵庫県産ククイムシ研究史

1. 1875. CHAPUIS, M. M. et EICHHOFF, W. Scolytides recueillis au Japan par. M. G. LEWIS. Ann. Soc. Ent. Belg. XVIII: 195-203.

G. LEWIS 採集になる日本産ククイムシ科19種の記録がある。CHAPUIS と EICHHOFF の共著である。CHAPUIS が6新種, EICHHOFF が11種を記載している。

兵庫県産として次の2新種が記載された。共にCHAPUIS の命名である。本論文が兵庫県のククイムシとしては初めての文献になる。

p. 197. *Hylastes obscurus* = *Hylastes plumbeus* BLANDFORD, 1894 マツノヒロズククイムシ Hiogo.

p. 198-199. *Phloeosinus perlatus* ヒバノククイムシ Hiogo.

2. 1887. SCHONFELDT, H. V. Catalog der Cole-

optern von Japan mit Angabe der bezüglichen Beschreibungen und der sicher bekannten Fundorte.

Jahrb. d. nass. Ver. f. Naturkunde 40: 31-204.

2種のククイムシ科がHiogo産で記録されているが、どちらも1875年記載された(前の報文)種である。

3. 1894. BLANDFORD, W. F. H. The Rhynchophorus Coleoptera of Japan. Part. II. Scolytidae.

Trans. ent. Soc. London, Part. 1: 53-141.

日本産ククイムシ科100種についての論文である。その中に3新属, 68新種, 1新亜種の記載がある。

兵庫県産は2新種5既知種の記録がある。

p. 56. *Hylastes attenuatus*, ER. マツノホソククイムシ One example, Hiogo (von SCHONFELDT)

P. 57. *Hylastes plumbeus* マツノヒロズククイムシと記載されているが *H. obscurus* CHAP. のことである。Common; taken with *H. parallelus*, also et Nikko, Kobe, etc.

p. 71. *Phloeosinus perlatus*, CHAP. マツノヒロズククイムシ。Hiogo産で記載された種であるとされている(1875)。

p. 73. *Phloeosinus lewisi* CHAP. ヒバノコククイムシ Numerous specimens, Kashiwagi, Chiu-zenji, Kobe and Nowata とある。

*Phloeosinus rudis* BLANDFORD ヒノキノククイムシ Kobe [新種記載]。

p. 98. *Coccotrypes graniceps*, EICHH. = *Poecilips graniceps* (EICHHOFF, 1877) ドングリククイムシ。One example, Nagasaki; also at Hiogo (von SCHONFELDT)。

p. 115. *Xyleborus sobrinus*, EICHH. のところで, A specimen from Hiogo in Colonel von SCHON-

\* 兵庫県甲虫相資料・340

FELDT's collection is not separable from *saxeseni* (サクセスキクイムシ) by any characters とある。

- p. 116. *Xyleborus badius* EICHL. ヌズリハノキクイムシ = *X. torquatus* EICHHOFF の異名と原色日本昆虫図鑑IV, pl. 71, f. 5, p. 305, 1984 になっている。日本産昆虫総目録 I, 1989 では *X. volvulus* (FABRICIUS, 1775) ヌズリハノキクイムシとなっている。Hiogo, one example (VON SCHÖNFELDT)

4. 1936. MURAYAMA, J. Notes sur les Scolytides (Coléoptères) de Honshu et Kiushū, Japan.

Tenthredo 1(2):121-149.

本州、九州産のキクイムシ科についての論文で寄主樹木についても言及されている。兵庫県下での記録も次のごとくある。

- p. 122. 3. *Hylastes attenuatus* ERICHSON マツノホソキクイムシ Hiogo [SCHONFELDT, PAR BLAND-FORD]
- p. 123. 5. *Hylurgops glabratus* ZETTERSTEDT マツノカバイロキクイムシ Kobe [J. E. A. LEWIS leg., 19. IV. 1917].
- p. 125. 11. *Phloeosinus perlatus* CHAPUIS ヒバノキクイムシ Kobe.
- p. 127. 16. *Crypturgus pusillus* GYLLENHAL トウヒノホソキクイムシ Kobe [J. E. A. LEWIS leg., 13. IV. 1930]
- p. 128. 20. *Ips proximus* EICHHOFF = *Orthotomicus* マツカワノキクイムシ Kobe [J. E. A. LEWIS leg., 5. X. 1923]

5. 1953. 村山醸造. 松類穿孔虫防除に関する研究. 松樹害虫防除研究報告.

文部省科学試験研究報告No. 6 (日本学術振興会刊)

兵庫県養父郡建屋村内の赤松林を実験林として、そこで被害林を構成する林相並びに植物相、動物相の調査、害虫の生理および生態の研究、被害林

での気象観測とか棲息害虫の種類数量分布調査などをされたものでまとめ、さらに実験林以外での研究調査、例えば中国近畿地方における松の害虫の種類および支配種の調査などもふくまれている。

兵庫県下(姫路, 山崎, 神戸, 香住, 口佐津, 竹野, 大屋, 建屋, 太田, 竜野, 斑鳩, 篠山, 勝間田)の各地で調査した赤松のキクイムシは11種が示されている。(マツノホソキクイムシ, マツノヒロスヂキクイムシ=マツノヒロスジキクイムシ, マツノカバイロキクイムシ, マツノスジキクイムシ, マツノコキクイムシ, マツノキクイムシ, キイロコキノコムシ, カラマツノコキクイムシ, アカマツノコキクイムシ *Cryphalus* = *Hypothenemus*, トドマツノコキクイムシ=トドマツコキクイムシ, タウヒノヒメキクイムシ=トウヒノヒメキクイムシ, タウヒノホソキクイムシ=トウヒノホソキクイムシ, マツノムツバキクイムシ, マツノツノキクイムシ *Ips angulatus* = *Orthotomicus*, カラマツノホソキクイムシ *Ips laricis* FAB. = *Orthotomicus laricis* (FABRICIUS, 1792) カラマツキクイムシ, マツカワノキクイムシ *Ips proximus* = *Orthotomicus*, マツノトゲキクイムシ *Ips* sp. = *Ips multidentatus* (MURAYAMA, 1953), ホンスンキクイムシ *Ips suturalis* (GYLL.) = *Orthotomicus suturalis* (GYLLENHAL, 1827), アカマツザイキクイムシ, サクセスキクイムシ。

実験林内で採集出来たキクイムシは、ツノスジキクイムシ=マツノスジキクイムシ, マツノキクイムシ *Hylophilus piniperda* (LINNEAUS) = *Tomicus*, ヒバノキクイムシ, トウヒノホソキクイムシ, キイロコキクイムシ, トドマツコキクイムシ, マツカワノキクイムシ *Ips proximus* = *Orthotomicus*, マツノツノキクイムシ, ホンスンキクイムシ, アカマツザイノキクイムシ, ハンノキクイムシ *Xyleborus germanus* = *Xylosandrus*, センダツキクイムシ=センダツキクイムシ, アカクビキクイムシ, タキノヤキクイムシ(新種記載)の14種が示されている。

6. 1955. 近畿甲虫同好会編. 原色日本甲虫図鑑. 甲虫篇. 増補改訂版(保育社・大阪)



pl. 68, f. 1584, p. 222.

ルイスナガキクイムシ 兵庫県扇ノ山(V.  
1954)産が図説されている(担当 伊賀正汎).

7. 1958. 山本義丸. 兵庫県氷上郡昆虫目録.

氷上の自然 第3集 Natura特別号. A5, 131p.

マツノキクイムシ *Myelophilus piniperda* = *Tomicus*, マツノコキクイムシ *Myelophilus minor* = *Tomicus*, ハンノキクイムシ *Hyleborus germanus* = *Xylosandrus*, キイロコキクイムシ, クスノオオキクイムシが記録されている.

8. 1960. 加辺正明. 日本産クイムシ類の加害樹種と分布. 前橋営林局刊, B5, 175p.

次の兵庫県産クイムシ類の記録がある(主として桑山 覚博士の記録されたもの, 1953).

クイムシ科 マツノホソクイムシ, マツノヒロズクイムシ, マツノカバイロクイムシ, マツノスジクイムシ, マツノコキクイムシ, マツノキクイムシ, ヒバノキクイムシ, ヒノキノクイムシ, キイロフキノコムシ, カラマツコキノコムシ, アカマツノコキクイムシ, トウヒノコキクイムシ(トドマツノコキクイムシ), トウヒノホソクイムシ, カシワノキクイムシ, トウヒノヒメクイムシ, マツノツノキクイムシ, マツノトゲクイムシ, マツカワクイムシ, ホンスンクイムシ, トサクイムシ, ツヤナシザイノキクイムシ, アカマツザイノキクイムシ, ハンノキクイムシ, アカクビクイムシ, ハンノスジクイムシ, タキノヤクイムシ, トドマツオオキクイムシの27種.

ナガキクイムシ科 チュウガタナガキクイムシ, シナノナガキクイムシ, カシノナガキクイムシの記録.

9. 1963. 辻 啓介. 但馬扇ノ山甲虫目録(1).

兵庫農科大学生物研究部部誌(3):24-47.

ナガキクイムシ科 ルイスナガキクイムシ.

クイムシ科 アカマツザイノキクイムシ, タイコンクイムシの記録あり.

10. 1963. 高橋 匡. 出石郡昆虫目録第1報

VITA 創刊号:3-34. (兵庫県立出石高等学校科学部生物班会誌)

シイノホソクイムシ, ヒバノコキクイムシの記録あり.

11. 1970. 仲田元亮. 能勢の昆虫(甲虫).

B5, 107p. (自刊)

アカマツネノキクイムシ=マツノネキクイムシ, マツノヒロスジクイムシ 2種記録.

12. 1972. 辻 啓介・岸田剛二. 但馬扇ノ山の甲虫目録. 扇ノ山周辺の動物(I).

兵庫県自然保護協会調査資料第1集:20-47.

クイムシ科 ルイスザイノキクイムシの記録.

13. 1974. 奥谷禎一. 中国山脈東端の昆虫相. 東中国山地自然環境調査報告:173-233.

(クイムシ, ナガキクイムシ担当. 高橋寿郎・辻 啓介)

クイムシ科 ニホンクイムシ, ニレカワノクイムシ, ハンノカバイロクイムシ, マツノクイムシ *Blastophagus piniperda* LINNE = *Tomicus piniperda* (LINNEAUSSI, 1758), カバイロホソクイムシ, カラマツヤツバクイムシ, アトマルクイムシ, アマツザイノキクイムシ, アカマツザイノキクイムシ, ルイスザイノクイムシ, タイコンクイムシの11種.

ナガキクイムシ科 ルイスナガキクイムシの1種記録.

14. 1974. 久松定成. 本四架橋ルート上の島々の昆虫相(その2).

本州四国連絡橋に伴う周辺地域の自然環境保全のための調査報告書(その2)

(国立公園協会刊)

P.92. ウスイロクイムシ 淡路島諭鶴羽山からの記録あり(担当 宮武睦夫).

15. 1975. 高橋 匡. 豊岡高等学校昆虫標本目録

- (第1・2報). 兵庫県立豊岡高校生物教室刊.  
トドマツオオキクイムシの記録がある(城崎郡日高町金山峠).
16. 1976. 奥谷楨一. 広域基幹林道地域自然環境調査報告書IV. 昆虫類調査 PP. 57-73.  
(兵庫県農林部治山課刊)  
播磨基幹林道主たる調査地, 峰山高原, 砥峯高原, 福知溪谷, 須留ヶ峰.  
主として遊磨正秀, 奥谷楨一両博士, 甲虫同定は高橋寿郎.  
播磨中部高原広域基幹林道 主たる調査地. 加美町三谷, 市原, 鳥羽, 笠形山. 甲虫は高橋寿郎担当.  
キクイムシ科 アカマツネノキクイムシ=アカマツザイノキクイムシ, キイロコキノコムシ, ネットカコキクイムシ, タブノコキクイムシ, マツノキクイムシ, トウヒノヒメキクイムシ, ハンノキキクイムシ, アカクビキクイムシ, トドマツオオキクイムシの記録.
17. 1978. 高橋寿郎. 兵庫県神崎郡大河内町川上~砥峯地区の甲虫相.  
大河内地点自然環境実態調査報告書: 56~61.  
(株)新日本技術コンサルタント刊.  
トウヒノヒメキクイムシの記録がある.
18. 1978. 仲田元亮. 能勢の昆虫 I.  
B5, 405p. (自刊・単行本)  
マツノヒロズキクイムシ, アカマツネノキクイムシ=マツノネノキクイムシ, カバイロホソキクイムシ, タブノコキクイムシ, クスノオオキクイムシ, シイノホソキクイムシ, トドマツオオキクイムシ, アカクビキクイムシ, ハンノキキクイムシの9種記録.
19. 1979. 仲田元亮. 「能勢の昆虫」その後(I).  
きべりはむし 7(1): 15-19.  
マツノコキクイムシの記録.
20. 1980. 都市緑地研究所 神戸高速道路2号線生態系調査(その1, その2)報告書.  
(妙法寺の昆虫). B5, 130p.  
ネットカコキクイムシ, トドマツアトマルキクイムシ, クワノキクイムシ, ハンノキキクイムシの記録がある.
21. 1981. 野淵 輝. イチゴのクラウンとクリの実を加害するクリノミキクイムシ.  
日本応用動物昆虫学会々誌 25(4): 294-296.  
日本から初めての記録であるクリノミキクイムシ *Poecilips cardamoni* (SCHAUFUSS) の採集記録のうち, 33♀♀, 1♂♂, Akashi, Hyogo, 1973, ex chestnut M. YAMASHITA leg. 8♀♀, Kazumicho, Shiroasaki (Kinosaki) Hyogo, 1973 ex chestnut, M. YAMASHITA leg. の兵庫県下からの記録がある.
22. 1982. 高橋寿郎. 神戸市須磨区妙法寺地域の甲虫相.  
兵庫生物 8(3): 153-155.  
ネットカコキクイムシ, トドマツアトマルキクイムシ, クワノキクイムシ, ハンノキキクイムシの記録あり.
23. 1982. 仲田元亮. 増補改訂 能勢の昆虫.  
甲虫の部・下巻. A5, 508p. (自刊).  
キクイムシ次の12種の記録あり.  
マツノヒロスジキクイムシ, マツノスジキクイムシ, マツノコキクイムシ, アカマツネノキクイムシ=マツノネノキクイムシ, カバイロホソキクイムシ, タブノキコキクイムシ, アトマルキクイムシ, クスノキオオキクイムシ, シイノホソキクイムシ, トドマツオオキクイムシ, アカクビキクイムシ, ハンノキキクイムシ.
24. 1993. 高橋寿郎. 東播磨の甲虫相(1).  
きべりはむし 21(2): 37-43.  
キクイムシ科11種の記録あり.  
マツノネノキクイムシ, キイロキクイムシ, ネットカコキクイムシ, タブノコキクイムシ, ハイマツアトマルキクイムシ, クワノキクイムシ, アカクビキクイムシ, トドマツオオキクイムシ, ハン

ノキクイムシ, トウヒノヒメクイムシ, マツノツノキクイムシ.

25. 1994. 高橋寿郎. 六甲山系を中心とした神戸並びにその近傍の甲虫相.

きべりはむし 22(2): 35-45.

クイムシ科21種の記録.

マツノホソクイムシ, マツノヒロスジクイムシ, マツノカバイロクイムシ, ヒバノコクイムシ, ヒバノクイムシ, ヒノキノクイムシ, トドマツノクイムシ, キイロコキノコムシ, ネットカコクイムシ, カシワノクイムシ, トウヒノホソクイムシ, ハイマツアトマルクイムシ, トドマツアトマルクイムシ, クワノキクイムシ, シイノホソクイムシ, サクセスクイムシ, トドマツオオクイムシ, ユズリハノクイムシ, ハンノキクイムシ, トウヒノヒメクイムシ, マツカワノクイムシ.

26. 1995. 藤倉正昭. 私版. 淡路の昆虫リスト(2).

PARNASSIUS (42): 1-5.

三原郡八木養宜からツツミクイムシの記録.

兵庫県産クイムシ類目録

Family Platypodidae ナガクイムシ科

Subfamily Diaporinae トゲナガクイムシ亜科

1. *Platypus lewisi* BLANDFORD, 1894

ルイスナガクイムシ

BLANDFORD により "Miyanoshita, Kiga and Yuyama" 産 5 標本に基づいて記載された (Trans. ent. Soc. London, 1894, part.1: 134-136, 1894).

種名にあるように LEWIS に献名されている。♂の腹部腹板第4節には後方にのびる2本の長刺をそなえている。わりと大きな種で(体長5.5-5.8 mm)よく知られている。

加害樹種としてクリ, コナラ, トチノキ, ミズナラ, モンゴリナラ, ブナノキ, ミズメ, ヨグソミネバリ, イチイガシ, アラカシ, ハリギリ, ス

ギが知られている(加辺, 1960)。

分布は北海道, 本州, 四国, 九州, 朝鮮半島, 台湾, 中国, インドと広く知られているが兵庫県下からは扇ノ山が知られているだけである。

産地. 美方郡扇ノ山[伊賀, 1955, 辻, 1963, 辻, 岸田, 1972].

2. *Platypus modestus* BLANDFORD, 1894

チュウガタナガクイムシ

Nikko, Shimidzu Toge産 Four specimens によって記載された種(採集者は G. Lewis) (I. C., P. 133-134). 加害樹種としてミズナラ, ブナノキ, トチノキ, オニグルミ, カツラが知られている(加辺, 1960).

兵庫県下では山崎の記録を知るのみである。

分布は本州, 九州, 台湾。

産地. 宍粟郡山崎[MURAYAMA, 9. VI. 1953, 加辺, 1963].

3. *Platypus querivorus* (MURAYAMA, 1925)

カシノナガクイムシ

村山醸造博士が *Crossotarsus* 属で記載された (Jour. Coll. Agr., Hokkaido Imp. Univ., Sapporo, Vol. XV, Pt. 4, pp. 197-228, 1925). イチイガシ, ウラジロガシ, アカガシ, アラカシ, ツクバネカシ, マテバシイ, スダジイ, ニタリジイを加害植物にあげ, 特にカシ類の伐倒木で未乾燥状態のものを好む, また立木の老衰せるものあるいは何等かの原因で衰弱せるものを選んで寄生するものであって, 普通は生長旺盛なものや幼齢木には被害が少ないとある(井上元則, 1953).

野淵 輝博士は加害植物: 各種広葉樹・スギとされている(1984).

産地. 城崎郡城崎[J. NAKAHARA, 15. XI. 1952, 加辺, 1960], 日高[M. KABE, 1. VI. 1956, 加辺, 1960].

4. *Platypus severini* BLANDFORD, 1894

シナノナガクイムシ

BLANDFORD により "Numerous examples of one sex only, taken from beech at Nikko, and Hakodate" 産で記載された (I. C., P. 136-137, 1894).

加害植物としてブナ、シナ、ハンノキ、シオジ、ヤブツバキ、クマシデ、トチ、カシ等が示されている(井上, 1953).

加辺正明博士は加害樹種としてブナノキ、トチノキ、サクラ類、シオノキ、ハンノキ、シオジ、イタヤカエデ、ヤブツバキ、クマシデをあげられている(1960).

産地. 宍粟郡山崎[MURAYAMA, 9. VI. 1953, 加辺, 1960]

Family Scolytidae キクイムシ科

Subfamily Scolytinae キクイムシ亜科

### 1. *Scolytus frontalis* BLANDFORD, 1894

ニレカワノキクイムシ

BLANDFORD により "Three examples taken at Fukushima" 産で記載されている (G. LEWIS の採集品) (1874).

加害植物はケヤキ、ハルニレとある(加辺, 1960). 野淵博士はケヤキ、カシワ、サクラを示しておられる(1984). 分布は本州、四国、九州、台湾とある.

産地: 養父郡水の山 (5exs., 25. VII. 1959)\* [高橋, 辻, 1974].

### 2. *Scolytus japonicus* CHAPUIS, 1875

ニホンキクイムシ

CHAPUIS により "Nipon et Kiushiu" 産 G. LEWIS 採集 1 個体によって記載された (1875).

加害樹種はケヤキ、ハルニレ、スモモ、リンゴ、サクラ、ウメが知られている(加辺, 1960).

分布は広く日本全土、朝鮮半島、シベリア、モンゴル、中国東北部.

産地. 宍粟郡音水 (1ex., 10. V. 1970) [高橋, 辻, 1974].

Subfamily Hylesininae カワノキクイムシ亜科

### 3. *Sphaerotrypes pila* BLANDFORD, 1894

ケブカマルキクイムシ

BLANDFORD により "Hitoyoshi, several examples; it has occurred in the thin bark of a

camellia" 標本により記載された (1894).

加害樹種としてアカシデ、シラカシ、イスノキ、クヌギ、ツバキが知られている(加辺, 1960).

この種は円い体形が特長.

産地. 相生市三濃山 (1ex., 3. V. 1974).

### 4. *Hylastes attenuatus* ERICHSON, 1836

マツノホソキクイムシ

加害樹種はハイマツ、アカマツとされている(加辺, 1960). 井上はサクラ、ウラジログシを示している (1953). 野淵博士は日本では稀な種とされている (1984).

産地. Hiogo [SCHONFELDT, PAR BLANDFORD, 1894]

[加辺, 1960]. 兵庫: 瀬戸内海斜面 [村山, 1953]\*\*.

### 5. *Hylastes plumbeus* BLANDFORD, 1894

マツノヒロズキクイムシ

G. LEWIS が Nagasaki と Hiogo で採集した標本に基づき *Hylastes obscurus* CHAPUIS と新種記載 (1875) された種を BLANDFORD は *Hylastes plumbeus* と新種記載してこの種のシノニムにした (1894). 同時に "Common; take with *H. parallelus*, also at Nikko, Kobe, & C." と記している.

加害樹種はアカマツ、ヒノキが知られている(加辺, 1960).

野淵博士は加害樹種にカラマツ、アカマツ、クロマツ、ハイマツ、ヒノキ、エゾマツを示されている (1984).

産地. 川西市大和 [仲田, 1970, 1978, 1982]. Hiogo

[CHAPUIS, 1875, BLANDFORD, 1894]. 神戸市 [G. LEWIS, 加辺, 1960]. 兵庫県瀬戸内海斜面 [村山, 1953].

\* ( ) の中のものは筆者の採集したものでその標本は原則として県立人と自然の博物館に保管されている.

\*\* 註 瀬戸内海斜面. 姫路. 山崎. 神戸. 太田. 竜野. 斑鳩 (太子町). 篠山. 勝間田. 柏原. 日本海斜面. 香住. 口佐津. 竹野. 養父郡建屋を意味する (以下同じ).



6. *Hylurgops glabratus* (ZETTERSTEDT, 1828)

## マツノカバイロキクイムシ

加害樹種はトウヒ、アカマツ、ヒメコマツ、チョウセンマツが知られている(加辺, 1960).

野淵博士はトドマツ、トウヒ属、アカマツ、チョウセンゴヨウ、ヒメコマツを加害樹種に示している(1994).

産地. Kobe [J. E. A. LEWIS, 19. IV. 1917, 村山, 1936, 加辺, 1953].

7. *Hylurgops interstitialis* (CHAPUIS, 1875)

## マツノスジキクイムシ

加害樹種としてアカマツを掲げている(加辺, 1960). 井上元則はマツノケバキクイとして本州(山形県)に産し加害樹種クロマツとしている(1953). 野淵博士は加害樹種、アカマツ、クロマツとして分布は本州、ヨーロッパ、北アメリカとされている(1984).

産地. 川西市大和[仲田, 1970, 1978, 1982]. 多可郡鳥羽(3exs., 6. IX. 1975).

8. *Hylurgus ligniperda* (FABRICIUS, 1792)

## マツノネノキクイムシ

加害樹種としてアカマツを掲げている(1960). 井上元則はマツノケバキクイとして本州(山形県)に産し加害樹種クロマツとしている(1953). 野淵博士は加害樹種アカマツ・クロマツとして分布は本州、ヨーロッパ、北アメリカとされている(1984).

産地. 川西市大和[仲田, 1970, 1978, 1982], 多可郡鳥羽(3exs., 6. IX. 1975).

9. *Tomicus minor* (HARTIG, 1834)

## マツノコキクイムシ

CHAPUIS は *Blastophagus minor* HARTM. として M. LEWIS が日本で採集していると記録されている(1875). BLANDFORD は *Myelophilus minor*, HART. として日本からの記録は間違つて(中国からもつて帰った標本で)記録されていたが G. LEWIS が長崎近くで得た標本があるとされている(1984).

属名は現在 *Tomicus* が用いられている。分布

が大変広い種で(日本以外、サハリン、シベリア、朝鮮半島、台湾、中国、ヨーロッパ、アフリカ).

加害樹種はドイツトウヒ、クロマツ、アカマツ、チョウセンゴヨウなど *Pinus* 属各種に寄生することのこと。

産地. 川西市笹部[仲田, 1979, 1982]. 氷上郡[山本, 1958]. 兵庫・口佐津[MURAYAMA, 28. VI. 1948, 加辺, 1960]. 兵庫日本海斜面[村山, 1953].

10. *Tomicus piniperda* (LINNAEUS, 1758)

## マツノキクイムシ

CHAPUIS は *Blastophagus piniperda*, FABR. として日本から記録(1875). BLANDFORD は *Myelophilus piniperda*, FABR. として "Nagasaki and Oyayama, both in Kiushiu" から記録している(1894).

ELLA ZIMSEN の "The Type Material of I. C. FABRICIUS" (1964) の中にはこの種は出てこない。

日本の学者が用いた(MURAYAMA, 1936, 1953, 井上, 1953, 加辺, 1960), 命名者は LINNAEUS に扱われている。

加害樹種はアカマツ、クロマツ、チョウセンマツ、ストロブマツが知られている(加辺, 1960).

野淵 輝博士はドイツトウヒ、クロマツ、アカマツ、チョウセンゴヨウを示されている(1984).

本種は分布が大変広い。

産地. 多可郡鳥羽[奥谷, 高橋, 1976]. 氷上郡[山本, 1958]. 兵庫. 瀬戸内海斜面, 日本海斜面[村山, 1953]. 養父郡建屋[竹内, 村山, 1953, MURAYAMA, 1. VII. 1951, 加辺, 1960], 氷の山[高橋, 辻, 1974].

11. *Almiphagus constatus* (BLANDFORD, 1894)

## ハンノカバイロキクイムシ

BLANDFORD が "Junsai; one specimen" でもつて *Hylesinus costatus* として記載された(1894)種である。

加害樹種としてアオダモ、ヤチダモがあげられており(加辺, 1960), 野淵 輝博士は加害樹種としてシラカンバ属、ハンノキ属、オガラバナを示されている(1984).

分布はやや北に分布しているようでサハリン、千島列島、シベリアに及んでいる。

産地。宍粟郡音水(lex., 10. V. 1970) [高橋, 辻, 1963].

## 12. *Phloeosinus lewisi* CHAPUIS, 1875

### ヒバノコキクイムシ

原記載には特に産地名が示されていない(1875).

BLANDFORD は "Numeros specimens, Kashiwagi, Chiuzenji, Kobe and Nowata. Varies in size from 1.8 to 2.3mm" と記している(1894). BLANDFORD が "One example, Ichiuchi" と記載した *Phloeosinus minutus* (1894) は本種の異名である(野淵, 1984).

本種の加害樹種はブナノキ、ミズキ、カエデ類が示されている(加辺, 1960). 野淵博士はスギ、ヒノキ、サワラ、アスナロなどを示している(1984).

産地。Kobe [BLANDFORD, 1894]. 神戸市鳥原(lex., 4. IV. 1974). 出石郡出石町小人 [高橋, 1963].

## 13. *Phloeosinus perlatus* CHAPUIS, 1875

### ヒバノキクイムシ

CHAPUIS により G. LEWIS が Hiogo で採集された標本で *Phloeosinus perlatus* として記載された種(1875). BLANDFORD は原記載は兵庫産であるが 1乃至2の新鮮な標本で産地がはっきりしないものが手許にあると記している(1894).

加害樹種はヒノキ、ヒバ、スギ、ビャクシン、ベニヒ、イチイが示されており(加辺, 1960), 野淵 輝博士はイチイ、スギ、ヒノキ、サワラ、ベニヒ、アスナロ、ビャクシンを加害樹種にあげている(1984).

産地。Kobe [G. LEWIS, CHAPUIS, 1875, BLANDFORD, 1894]. 出石郡出石町小人 [高橋, 1963]. 但馬 [村山, 1949]. 養父郡建屋 [竹内, 村山, 1953. MURAYAMA, 17. VIII. 1948, 加辺, 1960].

## 14. *Phloeosinus rudis* BLANDFORD, 1894

### ヒノキクイムシ

BLANDFORD が "Kashiwagi and Kobe" 産で新種記

載された。加害樹種としてヒノキ、ヒバ、ビャクシン、ベニヒ、イチイ、スギが知られている(加辺, 1960). 野淵博士はイチイ、スギ、ヒノキ、ベニヒ、ネズコ、アスナロ、ビャクシンを加害樹種に示されている。分布は日本以外、朝鮮半島、フランスが知られている(1984).

産地。Kobe [BLANDFORD, 1894]. 城崎郡香住 [MURAYAMA, 29. VIII. 1948, 加辺, 1960].

## 15. *Polygraphus nigriclytrix* NIJIMA, 1935

### ナナカマドノキクイムシ

加害樹種としてナナカマド(加辺, 1960., 井上, 1963)が示されている。中根猛彦博士は "サクラ, ナナカマド, 樹皮下性" としてカラーで図説している(原色日本昆虫大圖鑑, 第2巻, pl. 191, f. 23, p. 382, 1963).

産地。相生市三湊山(lex., 3. V. 1974).

## 16. *Polygraphus proximus* BLANDFORD, 1874

### トドマツクイムシ

BLANDFORD により "Two examples, Sapporo" 産で記載された。加害樹種としてアオモリトドマツ, トドマツ, エゾマツ, モミ, チョウセンハリモミ, トウシラベ, シキミが知られている(加辺, 1960).

分布は広く日本以外サハリン。朝鮮半島, シベリア, 中国と北方系の種のようなものである。モミ(属)ほか針葉樹を加害している種である。

産地。神戸市鳥原(lex., 4. IV. 1954).

### Subfamily Ipinae ザイノキクイムシ亜科

## 17. *Cryphalus fulvus* NIJIMA, 1907

### キイロコキクイムシ

本種は好んで衰弱木に寄生してこれを枯死させ、また新鮮な伐倒木にも寄生するとし、被害植物にアカマツ, クロマツ, チョウセンマツ, リキダマシ, マンシュウクロマツが知られており、本州の松喰虫中の重要種に数えられ、その被害甚大なものがあるとある。

産地。神戸市鳥原(lex., 9. III. 1975). 多可郡鳥羽 (5exs., 29. IV. 1972) [奥谷, 高橋, 1976]. 氷上郡 [山本, 1958]. 養父郡建屋 [竹内, 村山, 1953.,

MURAYAMA, 17. VIII. 1948, 加辺, 1960]. 兵庫・瀬戸内海斜面, 日本海斜面[村山, 1953].

18. *Cryphalus jeholensis* MURAYAMA, 1939

ネツカコキノコムシ

前記キイロコキクイムシと同じような所に発見されるため混同しやすいが, 体は黒褐色で目の前頭の竜骨状突起の上部は隆起する。

加害樹種としてはモミ, クロマツ, アカマツ, 欧州クロマツ, マンシュウクロマツが知られている(加辺, 1960)。

産地. 神戸市妙法寺(lex., 25. IV. 1979). 多可郡鳥羽(lex., 26. VII. 1975) [奥谷, 高橋, 1976].

19. *Cryphalus laricis* NIJIMA, 1909

カラマツノコキクイムシ

加害樹種はアカマツ, クロマツ, カラマツ, トドマツ, エゾマツ, アカトドマツ, チョウセンマツ, 米松, オウシュウアカマツが知られている(加辺, 1960)。

分布は北海道, 本州, 朝鮮半島とあまり広くない。

産地. 城崎郡香住[MURAYAMA, 29. VII. 1948, 加辺, 1960]. 兵庫・日本海斜面[村山, 1953].

20. *Cryphalus piceae* (RATBURG, 1837)

トドマツノコキクイムシ

野淵 輝博士によるとトドマツノコキクイムシはトウヒノコキクイムシの異名であるとされている(1984)。さらに *Cryphalus hattorii* Kōno は本種の異名であると。ここでは総目録(1989)に従ってトドマツノコキクイムシを用いた。

加害樹種はアオモリトドマツ, トウヒ, モミ, アカマツ, エゾマツ, アカトドマツ, アカエゾマツが知られている(加辺, 1960)。

産地. 養父郡建屋[竹内, 村山, 1953, 〇<sub>TA</sub>, 18. IX, 19. VIII. 1948, 加辺, 1960]. 兵庫: 瀬戸内海斜面, 日本海斜面[村山, 1953].

21. *Hypothenemus oblongus* (NIJIMA, 1910)

アカマツノコキクイムシ

新島善直博士が東京産で *Cryphalus oblongus* と記載された(Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. Vol. III, 1910)。

加害樹種はクロマツ, アカマツが知られている(加辺, 1960)。

産地. 兵庫・佐津[MURAYAMA, 28. VII. 1948, 加辺, 1960]. 兵庫・日本海斜面[村山, 1953].

22. *Scolytogenes badius* (NOBUCHI, 1975)

クリイロコキノコムシ

BLANDFORD が "Hiogo, one example (von SCHÖNFELDT)" の標本で *Xyleborus badius*, EICHM. として記録された(Trans. ent. Soc. London, Part. 1 : 116, 1874)種がこの種に当たるのではと思われるがよくわからない。

産地. Hiogo, one example (von SCHÖNFELDT) [BLANDFORD, 1894].

23. *Scolytogenus expers* (BLANDFORD, 1894)

タブノコキクイムシ

"Two examples, Kumamoto and Nagasaki" 産で *Hypothenemus expers* BLANDFORD として新種記載された種である(1894)。

中根猛彦博士により各種広葉樹, 枝梢性としてカラーで解説されている(1963)。

産地. 川西市笹部[仲田, 1978, 1982]. 多可郡鳥羽(lex., 29. IV. 1972) [奥谷, 高橋, 1976].

24. *Trypodendron signatum* (FABRICIUS, 1782)

カシワノキクイムシ

本種はヨーロッパ産で記載された種であると思われる。E. ZIMSEN の "The Type of Material of I. C. FABRICIUS" (Copenhagen, 1964) を見るとその p. 187 に 3189. *Apate signatus* Ent. Syst. I, 2, p. 362, 12 "in Germania Dom. Smidt." (Syst. El. II, 383-22) - Kiel 1 specimen (*Trypodendron signatum* F. ♂ Egger det. 1928) とある。

井上元則によると加害樹種はカシワ, ナラ, ニレ, ブナとしていて学名は *Xyloterus signatus* FABRICIUS VAR. *japonicus* BLANDFORD となっている

(1953). 北海道南部地方では年2回繁殖するのが普通であるとも記している(p. 191).

産地. 神戸市鳥原(1ex., 27. III. 1969). 兵庫. 栗粟郡山崎[MURAYAMA, 9. VI. 1953, 加辺, 1960].

25. *Crypturgus pusillus* (GYLLENHAL, 1813)

トウヒノホソクイムシ

加害樹種はアカマツ, トウヒ, エゾマツ, トウシラベ, トドマツ, チョウセンアカマツが示されている(加辺, 1960).

分布は大変広い. 日本(北海道, 本州)以外朝鮮半島, サハリン, 千島列島, シベリア, 台湾, ヒマラヤ, ヨーロッパ, アフリカとなっている.

産地. Kobe[J. E. A. LEWIS, 13. IV. 1930, 村山, 1936, 加辺, 1960]. 養父郡建屋[竹内, 村山, 1953. MURAYAMA, 17. VIII. 1948, 加辺, 1960]. 兵庫・瀬戸内海斜面, 日本海斜面[村山, 1953].

26. *Crypturgus tuberosus* NIJIMA, 1909

カバイロホソクイムシ

加害樹種はエゾマツ, アカマツ(加辺, 1960). 井上元則はエゾマツ, アカエゾマツ, ハイマツ, トドマツとしている(1953). 井上はなぜか分布は北海道, 樺太だけとなっている. 野淵博士は加害樹種をトドマツ, アカエゾマツ, エゾマツ, ドイツトウヒ, アカマツ, ハイマツとして分布は北海道, 本州, サハリン, シベリアとされている(1984).

産地. 川西市笹部[仲田, 1978, 1982]. 養父郡氷の山(2exs., 25. VII. 1959)[高橋, 辻, 1974].

27. *Drypocoetes pini* NIJIMA, 1909

ハイマツアトマルクイムシ

加害樹種としてモミ, ツガ, トウヒ属(*Picea*), カラマツ, ハイマツ, チョウセンゴヨウが示されている(野淵, 1984).

分布は北海道, 本州, 四国, 朝鮮半島, サハリン.

産地. 川辺郡猪名川町槻並(1ex., 2. VIII. 1978). 神戸市北区藍那(1ex., 17. III. 1993). 多可郡鳥羽(1ex., 6. IX. 1975)[奥谷, 高橋, 1976].

28. *Drypocoetes rugicollis* EGGERS, 1926

アトマルクイムシ

加害樹種としてモミ属(*Abies*), トウヒ属(*Picea*), コメツガ, カラマツ, マツ属(*Pinus*)が示されている(野淵, 1984).

産地. 川西市大和[仲田, 1982]. 栗粟郡音水(1ex., 20. VII. 1959)[高橋, 辻, 1974].

29. *Drypocoetes striatus* EGGERS, 1933

トドマツアトマルクイムシ

加害樹種はトドマツ, シラベが知られており, 分布は北海道, 本州, サハリン, シベリア, 中国東北部である(野淵, 1984).

産地. 神戸市妙法寺(1ex., 23. V. 1979).

30. *Poecilips cardamomi* (SCHAUFLUSS, 1905)

クリノミクイムシ

加害樹種アカマツ, クリの実, イチゴのクラウンが示されている(野淵, 1984).

この種が日本から初めて発見された経緯その他は野淵 輝博士が詳しく説明しておられる(1981).

産地. 33♀♀, 1♂♂, Akashi, Hyogo, 1873, ex. chestnut M. YAMASHITA leg., 8♀♀, Kazumicho, Shiroasaki (Kinosaki), Hyogo, 1973, ex. chestnut, M. YAMASHITA leg. [NOBUCHI, 1981].

31. *Poecilips graniceps* (EICHHOFF, 1877)

ドングリクイムシ

BLANDFORD が "One example, Nagasaki; also at Hiogo (VON SCHONFELDT)" として *Coccotrypes graniceps*, EICHH. で記録している(1894).

前記クリノミクイムシとよく似ているが, 前頭に前顔から複眼を結んだ線の上方までのびる高い竜骨状隆起をそなえるとある(野淵, 1984).

産地. Hiogo[VON SCHONFELDT, BLANDFORD, 1894]

32. *Cnestus murayamai* SCHEDL, 1962

ウスキイロクイムシ

加害樹種はスギ, クスノキ, タブノキ, クリ, ネムノキ, アブラギリ, モミジ, トチノキ, ミカ



ンが知られている。

*Tosaxyleborus pallidipennis* MURAYAMA は本種の異名である(野淵, 1984)。

産地. 三原郡諭鶴羽山[宮武, 1974].

### 33. *Xyleborus adumbratus* BLANDFORD, 1894

#### ツヤナシザイノキクイムシ

"Eight examples taken at Nagasaki, Hitoyoshi, Oyama and Subashiri"標本で BLANDFORD が記載した(1894)。

加害樹種はブナノキ, ツブラジイ, シイ, サカキ, イスノキ, ソヨゴ, アカガシ, ウラジロガシ, ヤマザクラ, シラカシ, ネムノキ, ホオノキ, タブ, シュロ, モミ, ヒノキ, アカマツと多い(加辺, 1960)。

分布も日本以外朝鮮半島, アンダマン諸島, ドイツと広い。

産地. 兵庫. 下里[MURAYAMA, 23. XI. 1950]. 養父郡建屋[TAKEUCHI, VI. 1950, 加辺, 1960].

### 34. *Xyleborus amputatus* BLANDFORD, 1894

#### ツツミキクイムシ

加害樹種としてヤマウルシ, アカメガシワ, ツブラシイ, タブ, ブナノキ, カゴノキ, ヒメシヤラ, イチジクが知られている(加辺, 1960)。

野淵博士は加害樹種として各種広葉樹, スギを示されている(1984)。

産地. 三原郡八木養宜[藤富, 1995].

### 35. *Xyleborus aquilus* BLANDFORD, 1894

#### アカマツザイノキクイムシ

BLANDFORD により"Six examples taken at O-yayama and Hitoyoshi in Kiushiu, one near Kashiwagi"産で記載された(1894)。

加害樹種はスギ, アカマツ, ヒノキ, モミ, ミズナラ, ヤマザクラ, ソヨゴ, カツラ, ウリハダカエデ, ホオノキ, ケヤキ, エゴノキ, アカメガシワ, サカキ, ヨグソミネバリなど多く示されている(加辺, 1960)。

分布は本州, 四国, 九州, 朝鮮半島, 台湾, 中国. 兵庫県にも中央部から北の地域に産するよう

である。

産地. 多可郡鳥羽[奥谷, 高橋, 1961]. 兵庫・日本海斜面[村山, 1953]. 養父郡建屋[竹内, 村山, 1953, MURAYAMA, 30. VII. 1948, 加辺, 1960]. 美方郡扇ノ山[辻, 1963, 辻, 岸田, 1972, 高橋, 辻, 1974].

### 36. *Xyleborus atratus* EICHHOFF, 1875

#### クワノキクイムシ

BLANDFORD は"A few more specimens taken at Kiga and Nagasaki"として日本から初めて記録した(1894)。

加害樹種はクスノキ, サカキ, シイ, モンゴリナラ, クワ, ハルニレ, ハンノキ, オノオレカンパ, アカガシ, ヤマザクラ, オキナワマツが示されている(加辺, 1960)。

分布も広い. 兵庫県下にも広く分布しているように思われる。

産地. 川辺郡猪名川町槻並(2exs., 4. V. 1979). 神戸市藍那(1ex., 10. V. 1979, 1ex., 4. X. 1979), 妙法寺(1ex., 25. IV. 1979). 多可郡鳥羽(1ex., 29. IV. 1972)[奥谷, 高橋, 1976].

### 37. *Xyleborus defensus* BLANDFORD, 1894

#### シイノホソクイムシ

BLANDFORD により"One specimen, Sapporo"産で新種記載された(1894)。

加害樹種はミズナラ, シイが示されている(加辺, 1960). 分布は北海道, 本州, 四国, 九州と日本からのみ知られている. 県下には広くいるようである。

産地. 川西市一庫[仲田, 1978, 1982]. 神戸市烏原(1ex., 26. VIII. 1970), 下谷上(1ex., 23. VIII. 1978). 出石郡但東町中藤[高橋, 1963].

### 38. *Xyleborus lewisi* BLANDFORD, 1894

#### ルイスザイノキクイムシ

BLANDFORD により"Nikkon, Hakone, Miyano-shita, nine specimens"標本で新種記載された(1894). 種名は採集者 G. LEWIS に献名されている。

加害樹種はミズナラ、コナラ、ブナノキ、シイ、シラカシ、アラカシ、ウラジロガシ、アワブキ、ヒナウチワカエデ、ソヨゴ、ソメイヨシノ、コブシ、ヨグソミネバリ、ケヤキ、タブ、ヤマザクラ、アオハダ、アカガシ、アカシデ、エゴノキ、ヤブツバキ、ヒメシヤラ、モミ、カラマツと大変多く示されている(加辺, 1960).

分布も日本以外朝鮮半島、台湾、東南アジア、インドと広い。兵庫県下の記録はあまりない。

産地。宍粟郡福知溪谷(lex., 3. VI. 1975, M. YUMA leg.) [奥谷, 1976]。美方郡扇ノ山 [辻, 岸田, 1972, 高橋, 辻, 1974]。

#### 39. *Xyleborus multilatus* BLANDFORD, 1894

##### クスノキオオキクイムシ

BLANDFORD により "One example, without locality" でもって新種記載された(1894)。

加害樹種としてツブラジイ、ヤマウルシ、ノグルミ、クリ、ネムノキ、クスノキ、アカシデ、エゴノキ、カナクギノキ、ブナノキ、カエデが示されている(加辺, 1960)。

分布は日本全土以外朝鮮半島、台湾、東南アジアが知られている。

産地。川辺郡猪名川町木間生 [仲田, 1978, 1982]。

川西市笹部 [仲田, 1978, 1982]。氷上郡 [山本, 1958]。

#### 40. *Xyleborus praeivius* BLANDFORD, 1894

##### センダツキクイムシ

BLANDFORD により "One example, without locality" として新種記載された(1894)。

加害樹種はソメイヨシノ、ヤマモミジ、ユズリハ、タカオカエデが示されている(加辺, 1960)。

産地。養父郡建屋 [竹内, 村山, 1953]。

#### 41. *Xyleborus rubicollis* EICHHOFF, 1875

##### アカクビキクイムシ

BLANDFORD はその論文の中で(1894) "No further examples taken" として種名と原記載を示された。

加害樹種としてはトチ、アカガシ、コジイ、ヤ

マウルシ、シラカシ、アカメガシワ、カラスザンショウ、クリ、ソヨゴ、ヤマモモ、モチノキ、ヤマグワ、ケンボナシ、タブ、センダン、イボタ、ヤマハンノキが示されている(加辺, 1960)。

産地。川西市大和 [仲田, 1978, 1982]。多可郡鳥羽(lex., 19. VII. 1975) [奥谷, 高橋, 1976]。養父郡建屋 [竹内, 村山, 1953, MURAYAMA, 11. VII. 1951, 加辺, 1960]。

#### 42. *Xyleborus saxeseni* (RATZBURG, 1937)

##### サクセスクイムシ

加害樹種、エゴノキ、ケヤキ、シイ、ヤマザクラ、クロバイ、アカメガシワ、ヒサカキ、サカキ、クスノキ、アカシデ、シラカシ、アオガシ、カナクギノキ、シオジ、タブ、ネムノキ、カツラ、ブナノキ、ホオノキ、アコウ、ヤマナラシ、イタヤカエデ、イチイガシ、ヒノキ、ヒバ、トウヒ、モミ、スギ、チョウセンマツ、ツガと多く示されている(加辺, 1960)。

産地。兵庫・瀬戸内斜面 [村山, 1953]。

#### 43. *Xyleborus seriatus* BLANDFORD, 1894

##### ハンノスジクイムシ

BLANDFORD により "Two examples taken at Nikko and Miyanoshita" 標本に基づいて新種記載されたものである(1894)。

加害樹種はハンノキ、ブナノキ、ハゼノキ、ダケカンバ、ウラジロガシ、ミズナラ、ヤマザクラ、ミズメ、アカメガシワ、トチノキ、ハリギリ、ウワミズザクラ、シナノキ、ホオノキ、イヌシデ、サカキ、ヨグソミネバリ、ウリハダカエデ、モミ、コメツガ、ゴヨウマツ、ヒメコマツ、クロマツ、スギ、ヒノキ、サクラ、ネズコ、ツガと大変多く示されている(加辺, 1960)。

産地。兵庫・宍粟郡山崎 [MURAYAMA, 8. VII. 1953, 田辺, 1960]。

#### 44. *Xyleborus takinoyensis* MURAYAMA, 1953

##### タキノヤキクイムシ

この種は村山醸造博士が兵庫県養父郡建屋で得られたもので新種記載されたものである(1953)。

加害樹種は原記載にもあるようにクリである。

産地。養父郡建屋[村山, 1953, MURAYAMA, 11. VIII. 1951, 加辺, 1960].

45. *Xyleborus validus* EICHHOFF, 1875

トドマツオオキクイムシ

BLANDFORD が北海道の札幌から九州の Nagasaki, Oyayama 迄 Nikko とか Miyanoshta などふくんだ産地で大変多くの標本を得たとして上記学名で記録された(1894).

加害樹種としてブナノキ, トチノキ, ミズナラ, クリ, ハクウンボク, リョウブ, コシアブラ, ウリハダカエデ, カエデ, アカメガシワ, キハダ, ウワミズザクラ, アオハダ, ケヤキ, オニグルミ, イヌシデ, ミズメ, シナノキ, トキワカエデ, アブラチャン, ホオノキ, ユクノキ, ヨグソミネバリ, サカキ, アカマツ, クロマツ, ヒメコマツ, ゴヨウマツ, モミ, イヌガヤ, スギ, ヒノキ, ヒバ, ネズコ, ツガと大変多く示されている(加辺, 1960). 兵庫県下にも広く産する。

産地。川西市大和[仲田, 1982]. 神戸市烏原(1ex., 5. VI. 1976), 藍那(13exs., 17. III. 1993). 多可郡鳥羽(1ex., 29. IV. 1972)[奥谷, 高橋, 1976]. 宍粟郡山崎[MURAYAMA, 9. VI. 1953, 加辺, 1960], 原(1ex., 11. V. 1978), 赤西(4exs., 21. V. 1979, 2exs., 3. V. 1979, 1ex., 23. VI. 1979), 音水(1ex., 13. VII. 1968, 2exs., 11. VI. 1970, 1ex., 11. VI. 1972, 2exs., 13. V. 1973). 城崎郡日高町金山[高橋, 1975]. 養父郡氷の山[TAKEUCHI, 27. V. 1953, 加辺, 1960].

46. *Xylosandrus crasiussculus* (MOTSCHULSKY, 1866)

サクキクイムシ

野淵 輝博士によると *Xyleborus semiopacus* EICHHOFF, サカクレノキクイムシ *Xyleborus ebriosus* NIJIMA は共に本種の異名であると。

加害樹種は各種広葉樹, モミ, ツガ, アカマツ, ヒノキと示されている(1984). 分布も広く日本全国, 東南アジア, オーストラリアを除く大洋州, インド, アフリカとある。

産地。相生市三湊山(1ex., 7. V. 1972).

47. *Xylosandrus germanus* (BLANDFORD, 1894)

ハンノキクイムシ

"Oyayama, Nikko, Subashiri, Kiga, Miyanoshta"産で BLANDFORD が普通に見られるとして *Xyleborus germanus* BLANDFORD として新種記載をした。

加害樹種はヤマウルシ, エゴノキ, クリ, ブナノキ, センダン, ハンノキ, ヤマザクラ, ツバキ, リョウブ, シラカシ, ウラジロガシ, アラカシ, ツクバネガシ, アブラチャン, ミズナラ, キハダ, アワブキ, ヤマガキ, ウワミズザクラ, ケヤキ, イヌシデ, アカメガシワ, イタヤカエデ, オニグルミ, シキミ, ヤマナラシ, サカキ, ヤマモモ, トチノキ, シイ, ホオノキ, ネムノキ, ハゼノキ, チャ, コブシ, ヤシヤブシ, アメリカブドウ, タブ, カナクギノキ, バリバリノキ, ユクノキ, ネズミモチ, ハリギリ, スギ, ヒノキ, サクラ, ネズコ, アカマツ, ゴヨウマツ, モミ, ツガと大変多く示されている(加辺, 1960). 県下に広く産する。

産地。川西市笹部[仲田, 1978, 1982]. 神戸市妙法寺(1ex., 29. V. 1979). 多可郡鳥羽(2exs., 29. IV. 1973)[奥谷, 高橋, 1976]. 宍粟郡音水(1ex., 13. VII. 1968). 氷上郡[山本, 1958], 柏原[YAMAMOTO, 20. VI; 22. VII. 1950, 加辺, 1960]. 養父郡建屋[竹内, 村山, 1953, MURAYAMA, 11. VIII. 1950, 加辺, 1960]. 氷の山(2exs., 25. VII. 1959)[TAKEUCHI, 27. V. 1953, 加辺, 1960].

48. *Pitophtharus jucundus* BLANDFORD, 1894

トウヒノヒメクイムシ

BLANDFORD により "Four specimens, near Nagasaki"産標本で新種記載された(1894).

加害樹種はクロマツ, アカマツ, モミ, トウヒ, エゾマツ, チョウセンハリモミが知られている(加辺, 1960). この属の種は日本ではこの1種が知られているだけである。兵庫県にも広く産する。産地。神戸市烏原(2exs., 29. IV. 1969). 多可郡鳥羽(10exs., 29. IV. 1972)[奥谷, 高橋, 1976]. 神

崎郡大河内町川上(2exs., 9. VI. 1977) [奥谷, 1976]. 宍粟郡福知溪谷(1ex., 16. VI. 1975, M. YUMA leg.). 城崎郡口佐津[MURAYAMA, 28. VII. 1948, 加辺, 1960], 竹野[MURAYAMA, 29. VII. 1948, 加辺, 1960], 香住[MURAYAMA, 29. VII. 1948, 加辺, 1960]. Hintani[MURAYAMA, 29. VII. 1948, 加辺, 1960].

49. *Ips acuminatus* (GYLLENHAL, 1827)

マツノムツバキクイムシ

加害樹種としてはアカマツ, カラマツ, チョウセンマツ, チョウセンカラマツが示されている(加辺, 1960).

産地. 兵庫・瀬戸内海斜面[村山, 1953].

50. *Ips cembrae* (HEER, 1836)

カラマツヤツバキクイムシ

加害樹種はカラマツ, アカマツ, グイマツ, チョウセンマツが知られている(加辺, 1960). 分布は結構広い.

産地. 養父郡氷の山(1ex., 25. VII. 1955) [高橋, 辻, 1974].

51. *Ips multidentatus* MURAYAMA, 1953

マツノトゲキクイムシ

加害樹種としてはアカマツが示されている(加辺, 1960). 野淵 輝博士は加害樹種はクロマツとしている(1984).

産地. 兵庫・下里[MURAYAMA, 23. X. 1950, 加辺, 1960]. 兵庫・瀬戸内海斜面[村山, 1953].

52. *Orthotomicus angulatus* (EICHHOFF, 1875)

マツノツノキクイムシ

加害樹種としてツガ, マツ属(*Pinus*), スギ, ヒノキ, イチイガシ(?)が示されている(野淵, 1984).

産地. 多可郡鳥羽(8exs., 6. IX. 1975). 城崎郡竹野[MURAYAMA, 29. VI. 1948, 加辺, 1960]. 養父郡建屋[竹内, 村山, 1953]. 兵庫・瀬戸内海斜面, 日本海斜面[村山, 1953].

53. *Orthotomicus laricis* (FABRICIUS, 1792)

カラマツホソクイムシ

加害樹種としてエゾマツ, アカマツ, チョウセンゴヨウが知られている(野淵, 1984). 分布は広く日本(北海道, 本州), サハリン, シベリア, カムチャツカ, 朝鮮半島, 中国, ヨーロッパが知られている.

産地. 兵庫・日本海斜面[村山, 1953].

54. *Orthotomicus proximus* (EICHHOFF, 1867)

マツカワノキクイムシ

加害樹種としてはアカマツ, クロマツ, ゴヨウマツが示されている(加辺, 1960). 日本では稀な種とされている(野淵, 1984). 兵庫県下には次の記録がある.

産地. Kobe[J. E. A. LEWIS, 村山, 1936, J. E. A. LEWIS, 5. X. 1923, 加辺, 1960]. 兵庫・日本海斜面[村山, 1953]. 宍粟郡山崎[MURAYAMA, 1. VIII. 1948, 加辺, 1960]. 養父郡建屋[竹内, 村山, 1953, MURAYAMA, 17. VIII. 1948, 加辺, 1960].

55. *Orthotomicus suturalis* (GYLLENHAL, 1827)

ホンスンキクイムシ

加害樹種, トウヒ, カラマツ, アカマツ, チョウセンゴヨウ, ハイマツが示されている(野淵, 1984).

県下の記録は次のとおりある.

産地. 兵庫・日本海斜面[村山, 1953]. 養父郡建屋[竹内, 村山, 1953. MURAYAMA, 30. VII. 1948, 加辺, 1960].

56. *Orthotomicus tosaensis* (MURAYAMA, 1950)

トサキクイムシ

加害樹種はアカマツ, クロマツが示されている(野淵, 1984).

分布も本州, 四国, 九州と日本特産種のようなものである. 県下には次の記録がある.

産地. 城崎郡竹野[MURAYAMA, 29. VII. 1948, 加辺, 1960].



## Subfamily Scolytophatypinae

## キザハシキクイムシ亜科

57. *Scolytophatypus tycon* BLANDFORD, 1893

## タイコンキクイムシ

加害樹種としてブナノキ, ヤマハンノキ, ヤマザクラ, タブ, カナクギノキ, キハダ, ヤマモミジが示されている(加辺, 1960).

分布は日本全国, 朝鮮半島, シベリア, 千島列島, サハリン, 台湾が知られている.

県下では扇ノ山の記録のみである.

産地. 美方郡扇ノ山[辻, 1963, 辻, 岸田, 1972, 高橋, 辻, 1974].

## 兵庫県のキクイムシ類一覧リスト

## Family Platypodidae ナガキクイムシ科

## Subfamily Diaporinae トゲナガキクイムシ亜科

1. *Platypus lewisi* BLANDFORD, 1894

ルイスナガキクイムシ

2. *P. modetus* BLANDFORD, 1894

チュウガタナガキクイムシ

3. *P. quercivorus* (MURAYAMA, 1925)

カシノナガキクイムシ

4. *P. severini* BLANDFORD, 1894

シナノナガキクイムシ

## Family Scolytidae キクイムシ科

## Subfamily Scolytinae キクイムシ亜科

1. *Scolytus frontalis* BLANDFORD, 1894

ニレカワノキクイムシ

2. *S. japonicus* CHAPUIS, 1875

ニホンキクイムシ

## Subfamily Hylesininae

## カワノキクイムシ亜科

3. *Sphaerotrypes pila* BLANDFORD, 1894

ケブカマルキクイムシ

4. *Hylastes attenuatus* ERICHSON, 1836

マツノホソキクイムシ

5. *H. plumbeus* BLANDFORD, 1894

マツノヒロスジキクイムシ

6. *Hylurgops glabratus* (ZETTERSTEDT, 1828)

## マツカバイロキクイムシ

7. *H. interstitialis* (CHAPUIS, 1875)

マツノスジキクイムシ

8. *Hylurgus lingniperda* (FABRICIUS, 1792)

マツノネノキクイムシ

9. *Tomicus minor* (HARTIG, 1834)

マツノコキクイムシ

10. *T. piniperda* (LINNAEUS, 1758)

マツノキクイムシ

11. *Alniphagus constatus* (BLANDFORD, 1894)

ハンノカバイロキクイムシ

12. *Phloeosinus lewisi* CHAPUIS, 1875

ヒバノコキクイムシ

13. *P. perlatus* CHAPUIS, 1875

ヒバノキクイムシ

14. *P. rudis* BLANDFORD, 1894

ヒノキクイムシ

15. *Polygraphus nigrielytris* NIJIMA, 1935

ナナカマドノキクイムシ

16. *P. proximus* BLANDFORD, 1894

トドマツノキクイムシ

## Subfamily Ipinae ザイノキクイムシ亜科

17. *Cryphalus fulvus* NIJIMA, 1907

キイロコキクイムシ

18. *C. jcholensis* MURAYAMA, 1939

ネツカコキクイムシ

19. *C. laricis* NIJIMA, 1909

カラマツノコキクイムシ

20. *C. piceae* (RATZBURG, 1837)

トドマツコキクイムシ

21. *Hypothenemus oblongus* (NIJIMA, 1910)

アカマツノコキクイムシ

22. *Scolytogenes badius* (NOBUCHI, 1975)

クリイロコキクイムシ

23. *S. expers* (BLANDFORD, 1894)

タブノコキクイムシ

24. *Trypodendron signatum* (FABRICIUS, 1782)

カシワノキクイムシ

25. *Crypturgus pusillus* (GYLLENHAL, 1813)

トウヒノホソキクイムシ

26. *C. tuberosus* NIJIMA, 1909

- カバイロホソキクイムシ
27. *Drypocetes pini* NIIJIMA, 1909  
ハイマツアトマルキクイムシ
28. *D. rugicollis* EGGERS, 1926  
アトマルキクイムシ
29. *D. striatus* EGGERS, 1933  
トドマツアトマルコキクイムシ
30. *Poecilips cardamomi* (SCHAUFUS, 1905)  
クリノミキクイムシ
31. *P. graniceps* (EICHHOFF, 1877)  
ドングリキクイムシ
32. *Cnestus murayamai* SCHEDL, 1962  
ウスキイロキクイムシ
33. *Xyleborus adumbratus* BLANDFORD, 1894  
ツヤナシザイノキクイムシ
34. *X. amputatus* BLANDFORD, 1894  
ツヅミキクイムシ
35. *X. aquilus* BLANDFORD, 1894  
アカマツザイノキクイムシ
36. *X. atratus* EICHHOFF, 1875  
クワノキクイムシ
37. *X. defensus* BLANDFORD, 1894  
シイノホソキクイムシ
38. *X. lewisi* BLANDFORD, 1894  
ルイスザイノキクイムシ
39. *X. mutilatus* BLANDFORD, 1894  
クスノオオキクイムシ
40. *X. praevius* BLANDFORD, 1894  
センダツキクイムシ
41. *X. rubricollis* EICHHOFF, 1875  
アカクビキクイムシ
42. *X. saxeseni* (RATZBURG, 1937)  
サクセスキクイムシ
43. *X. seriatus* BLANDFORD, 1894  
ハンノスジキクイムシ
44. *X. takinoyensis* MURAYAMA, 1953  
タキノヤキクイムシ
45. *X. volvulus* (FABRICIUS, 1775)  
ユズリハノキクイムシ
46. *Xylosandrus crasiussculus* (MOTSCHULSKY, 1866) サクキクイムシ

47. *X. germanus* (BLANDFORD, 1894)  
ハンノキクイムシ
48. *Pityophytharus jucundus* BLANDFORD, 1894  
トウヒノヒメキクイムシ
49. *Ips acuminatus* (GYLLENHAL, 1827)  
マツノムツバキクイムシ
50. *I. cembre* (HEER, 1836)  
カラマツヤツバキクイムシ
51. *I. multidentatus* MURAYAMA, 1953  
マツノトゲキクイムシ
52. *Orthotomicus angulatus* (EICHHOFF, 1875)  
マツノツノキクイムシ
53. *O. laricis* (FABRICIUS, 1792)  
カラマツキクイムシ
54. *O. proximus* (EICHHOFF, 1867)  
マツカワノキクイムシ
55. *O. suturalis* (GYLLENHAL, 1827)  
ホンスンキクイムシ
56. *O. tosaensis* (MURAYAMA, 1960)  
トサキクイムシ

## Subfamily Scolytophatypinae

## キザハシキクイムシ亜科

57. *Scolytoplatypus tycon* BLANDFORD, 1893  
タイコンキクイムシ

## &lt;参考文献&gt;

- 研究史に示した文献は省いてある。  
井上元則(1953)「林業害虫防除論・中巻」  
(地球出版株式会社・東京)  
三輪勇四郎(1938)「日本甲虫分類学」(西ヶ原刊行  
会・東京)  
村山醸造・新島善直(1950)「日本昆虫図鑑・改訂  
版」(北隆館・東京)  
中根猛彦(1963)「原色昆虫大図鑑・第2巻, 甲  
虫」(北隆館・東京)  
野淵 輝(1984)「原色日本甲虫図鑑(IV)」(保育社  
・大阪)  
竹中英雄(1975)「学研 中高生図鑑 昆虫II・甲  
虫」(学習研究社・東京)

(VII・1997)

黒田庄町で採集した蛾(1)

岡本 清

はじめに

前号で高砂市で採集した蛾について報告したが、今回は筆者が昭和33年から38年にかけて勤務していた黒田庄町喜多の西脇高等学校黒田庄分校校舎で採集した蛾について報告する。何分古いデータではあるが、北播地域からの蛾の報告がほとんどないということであり、分布資料として参考になれば幸いである。採集地はすべて上記の分校校舎内でデータからは省略する。

なお、全部を一度に掲載してはかなりの紙面を割くことになるので、今回はヤガ上科のみの報告とする。

<凡 例>

5. VI. 1960(2) [羽化]

(2)は採集数を示し(1)の場合は省略する。[羽化]は食草から幼虫を採集して成虫を羽化させたものを示す。

ドクガ科 LYMANTRIIDAE

1. *Calliteara argentata* (Butler) スギドクガ  
24. V. 1960, 30. IX. 1960.
2. *Calliteara pseudabietis* Butler リンゴドクガ  
25. IV. 1962.
3. *Cifuna locuples* Walker マメドクガ  
3. VI. 1959.
4. *Laelia coenosa* (Hübner) スゲドクガ  
29. VI. 1961.
5. *Arctornis l-nigrum* (Müller) エルモンドクガ  
29. VI. 1960.
6. *Lymantria dispar* (Linnaeus) マイマイガ  
1. VII. 1959.
7. *Parocneria furva* (Leech) ウチジロマイマイ  
12. IX. 1960.
8. *Topomesoides jonasii* (Butler) ニワトコドクガ  
13. IX. 1961.
9. *Sphrageidus similis* (Fuessly) モンシロドクガ  
26. VI. 1959, 2. VI. 1960, 11. VIII. 1960,

27. IX. 1960.

10. *Euproctis subflava* (Bremer) ドクガ  
3. VII. 1959, 30. VI. 1960, 7. IX. 1960.
11. *Euproctis pseudoconspersa* (Strand) チャドクガ  
14. VII. 1960, 28. X. 1960, 16. X. 1961.
12. *Euproctis curvata* Wileman マガリキドクガ  
5. VII. 1961, 5. IX. 1961(2), 13. IX. 1961.

ヒトリガ科 ARCTIIDAE

<コケガ亜科 LITHOSIINAE>

1. *Pelosia muscerda* (Hufnagel) ホシホソバ  
18. VII. 1962.
2. *Pelosia noctis* (Butler) クロスジホソバ  
29. VI. 1961.
3. *Elimea aegrota* (Butler) キシタホソバ  
11. VI. 1959, 24. V. 1960, 1. X. 1960.
4. *Elimea japonica* (Leech) キマエホソバ  
6. V. 1960, 14. VI. 1960, 24. VI. 1960,  
10. IX. 1960, 12. IX. 1960, 17. IX. 1960.
5. *Elimea degenerella* (Walker) シロホソバ  
5. VII. 1962, 24. VIII. 1962.
6. *Lithosia quadra* (Linnaeus) ヨツボシホソバ  
24. VI. 1960(2), 8. IX. 1960, 13. IX. 1960,  
28. IX. 1962.
7. *Bizone hamata* Walker アカスジシロコケガ  
21. VI. 1959(2), 13. VI. 1960, 14. VI. 1960.
8. *Parasiccia altaica* (Lederer) ホシオビコケガ  
24. V. 1960.
9. *Melanaema venata* Butler オオベニヘリコケガ  
1. VII. 1959(2), 27. VI. 1960, 5. VII. 1961.
10. *Asura dharmia* (Moore) ヒメホシキコケガ  
18. VII. 1960, 17. IX. 1960.
11. *Eugoa grisea* Butler クロテンハイイロコケガ  
5. X. 1961.
12. *Mittochrista aberrans* Butler ハガタベニコケガ  
2. VIII. 1959, 23. VIII. 1959, 1. VI. 1960,  
9. VI. 1960, 15. VI. 1960, 17. X. 1960.
13. *Mittochrista miniata* (Forster) ベニヘリコ



ケガ 18. VII. 1960, 30. IX. 1960, 2. VI. 1961.

14. *Miltochrista calamia* Butler ハガタキコケガ  
1. VII. 1960.
15. *Miltochrista striata* (Bremer & Grey) スジベ  
ニコケガ 16. V. 1960(2), 17. V. 1960.
16. *Miltochrista pulchra* Butler ゴマダラベニコ  
ケガ 4. IX. 1959(2), 13. VI. 1960(2),  
17. VI. 1961.
17. *Stigmatophora leacrita* (Swinhoe) ゴマダラキ  
コケガ 2. VII. 1959, 11. VIII. 1959,  
13. VI. 1960(2), 24. VI. 1960, 11. VII. 1960.

<ヒトリガ亜科 ARCTIINAE>

18. *Spilarctia seriatopunctata* Motschulsky スジ  
モンヒトリ 29. V. 1960(2).
19. *Spilarctia subcarnea* Walker オビヒトリ  
27. IV. 1959, 1. V. 1959, 18. V. 1960.
20. *Lemyra inaequalis* (Butler) カクモンヒトリ  
14. VII. 1960.
21. *Spilosoma punctaria* (Gramer) アカハラゴマ  
ダラヒトリ 13. IV. 1960, 9. V. 1960.
22. *Spilosoma lubricipeda* (Linnaeus) キハラゴ  
マダラヒトリ 13. IV. 1960, 13. V. 1960.
23. *Chionarctia nivea* (Ménétrières) シロヒトリ  
31. VII. 1959.
24. *Rhyparioides amurensis* (Bremer) ホシベニ  
シタヒトリ 29. VI. 1960.

カノコガ科 CTENUCHIDAE

1. *Amata germana* (Felder & Felder) キハダ  
カノコ 18. VII. 1959.

ヤガ科 NOCTILIDAE

<ウスベリケンモン亜科 PANTHEINAE>

1. *Anzcronicta nitida* (Butler) ウスベリケンモ  
ン 4. V. 1959, 21. V. 1959, 24. V. 1960,  
9. VI. 1960.
2. *Anacronicta caliginea* (Butler) コウスベリ  
ケンモン 1. V. 1959, 12. VI. 1961.
3. *Anacronicta plumbea* (Butler) ナマリケンモ  
ン 17. V. 1960, 13. IX. 1960.
4. *Trichosea champa* (Moore) キバラケンモン  
12. IX. 1960.

<ケンモン亜科 ACRONICTINAE>

5. *Moma alpium* (Osbeck) ゴマケンモン  
16. VI. 1960.
6. *Nacna sugitanii* (Nagano) スギタニアオケン  
モン 24. IX. 1964.
7. *Hyboma adaucta* (Warren) サクラケンモン  
17. V. 1960, 24. VI. 1960(2), 13. IX. 1960(2),  
14. IX. 1960, 10. V. 1961(2), 7. VII. 1961,  
21. IX. 1961, 23. VIII. 1962, 23. IX. 1962.
8. *Platyclepta pulverosa* (Hampson) シロハラケ  
ンモン 16. V. 1960, 21. V. 1960,  
24. V. 1960, 11. VII. 1960, 12. VIII. 1960,  
9. IX. 1960, 8. V. 1961, 30. VI. 1961.
9. *Triaena intermedia* Hampson リンゴケンモン  
18. V. 1960.
10. *Triaena leucocuspis* Butler キハダケンモン  
15. VI. 1960, 17. VI. 1960, 1. VII. 1960,  
12. VI. 1961, 12. VII. 1962.
11. *Viminia rumicis* (Linnaeus) ナシケンモン  
27. III. 1959, 9. IV. 1959, 4. V. 1959,  
15. VI. 1959, 25. VI. 1959, 28. IX. 1959,  
13. IV. 1960, 19. IV. 1960.
12. *Lophonycta confusa* (Leech) アミメケンモン  
27. V. 1959(2), 11. VI. 1959, 2. VI. 1960.

<キノコヨトウ亜科 BRYOPHILINAE>

13. *Byromoia granitalis* (Butler) イチモジキノ  
コヨトウ 4. IX. 1959(2), 12. VIII. 1960,  
21. VII. 1960, 9. IX. 1960.
14. *Cryphia mitsuhashi* (Marumo) キノコヨトウ  
26. VII. 1960, 13. IX. 1960, 26. VII. 1961,  
30. VII. 1961.
15. *Stenoloba clara* (Leech) ウスアオキノコヨ  
トウ 18. VII. 1960(3), 6. VII. 1960, 10. VII.  
1961, 12. VII. 1961, 20. VII. 1961.
16. *Stenoloba jankowskii* (Oberthür) シロスジキ  
ノコヨトウ 14. VI. 1960, 16. VI. 1961,  
16. VII. 1961.

<タバコガ亜科 HELIOTHINAE>

17. *Helocoverpa armigera* (Hübner) オオタバコ  
ガ 12. VIII. 1960.
18. *Adisura atkinsoni* Moore アカヘリヤガ  
24. VIII. 1962.

## &lt;モンヤガ亜科 NOCTUINAE&gt;

19. *Eaxoa sibirica* (Boisduval) ウスグロヤガ  
15. X. 1959.
20. *Agrotis ipsilon* (Hufnagel) タマナヤガ  
15. XI. 1960.
21. *Agrotis tokionis* Butler オオカブラヤガ  
- X. 1958, 17. X. 1960(2).
22. *Agrotis segetum* (Denis & Schiffermüller)  
カブラヤガ 1. IV. 1959, 15. IV. 1959,  
27. IV. 1959, 15. VII. 1959, 19. IV. 1960,  
27. IV. 1960, 6. V. 1960, 26. V. 1960,  
18. VII. 1960.
23. *Actebia praecurrens* (Staudinger) オオホソ  
アオバヤガ 29. IX. 1959.
24. *Ochropleura plecta* (Linnaeus) マエジロヤガ  
3. IV. 1959, 15. IV. 1959, 30. IV. 1959,  
14. VI. 1960, 14. VII. 1960, 12. IV. 1961.
25. *Hermonassa cecilia* Butler クロクモヤガ  
- X. 1958, 20. X. 1959, 18. V. 1960,  
24. V. 1960.
26. *Spaelotis valida* Walker アカマエヤガ  
9. VI. 1960, 12. VI. 1961.
27. *Sineugraphe exusta* (Butler) カバスジヤガ  
1. VII. 1960.
28. *Sineugraphe bipartita* (Graeser) ウスイロカ  
バスジヤガ 11. VII. 1960(2).
29. *Sineugraphe longipennis* (Boursin) オオカバ  
スジヤガ 11. VII. 1960(2).
30. *Diarsia canescens* (Butler) オオバコヤガ  
2. V. 1959, 4. V. 1959, 9. V. 1959,  
28. IX. 1959, 12. VII. 1960, 3. X. 1960(2).
31. *Diarsia pacifica* Boursin アカフヤガ  
19. IV. 1960(2), 13. IX. 1960, 21. VI. 1962.
32. *Diarsia ruficauda* (Warren) ウスイロアカフ  
ヤガ 21. IV. 1959, 9. IV. 1960, 1. VII. 1960.
33. *Xestia stupenda* (Butler) マエキヤガ  
25. IX. 1959, 1. X. 1959, 4. X. 1962.
34. *Xestia dilatata* (Butler) ウスチャヤガ  
- X. 1958, 5. X. 1959, 17. X. 1960.
35. *Xestia efflorescens* (Butler) キシタミドリヤ  
ガ 13. VII. 1960.
36. *Xestia semiherbida* (Walker) ハイイロキシ

タヤガ 12. VI. 1961.

37. *Naenia contaminata* (Walker) クロギシギシ  
ヤガ 26. V. 1960, 2. VI. 1960, 9. VI. 1960,  
14. VI. 1960.

## &lt;ヨトウガ亜科 HADENINAE&gt;

38. *Mamestra brassicae* (Linnaeus)  
ヨトウガ  
21. IV. 1959, 28. IV. 1959, 6. IX. 1960.
39. *Sarcopolia illoba* (Butler) シロシタヨトウ  
- X. 1958, 9. IV. 1959, 13. IV. 1959,  
20. IV. 1959(2), 30. IV. 1959(3), 2. V. 1959,  
3. IX. 1959, 10. X. 1959, 14. IV. 1960(2),  
19. IV. 1960, 27. IV. 1960, 16. V. 1960,  
6. IX. 1970, 17. X. 1960.
40. *Hadena rivularis* (Fabricius) フサクビヨト  
ウ 20. IV. 1962, 11. V. 1962.
41. *Protomiselia bilinea* (Hampson) フタスジヨト  
ウ 5. V. 1961, 12. VI. 1961, 1. IX. 1961,  
5. IX. 1962.
42. *Panolis japonica* Draudt マツキリガ  
3. IV. 1959, 15. III. 1960, 19. IV. 1960.
43. *Orthosia cedermarki* (Bryk) ウスベニキリガ  
- V. 1959, 1. V. 1960.
44. *Orthosia carnipennis* (Butler) アカバキリガ  
3. IV. 1959, 9. IV. 1962, 11. IV. 1962.
45. *Mythimna turca* (Linnaeus) フタオビキヨト  
ウ 16. V. 1960, 21. V. 1960, 29. VI. 1960.
46. *Aletia placida* (Butler) クロシタキヨトウ  
4. V. 1959, 26. V. 1959(2), 2. VII. 1959,  
16. V. 1960, 17. VIII. 1960, 9. V. 1962.
47. *Aletia flavostigma* (Butler) マダラキヨトウ  
27. IV. 1959, 30. IV. 1959, 13. IV. 1960,  
11. VIII. 1960, 9. V. 1962.
48. *Aletia perstriata* Sugi カバイロキヨトウ  
3. VIII. 1961.
49. *Aletia pryeri* (Leech) ウラギンキヨトウ  
11. IX. 1962, 1. X. 1962.
50. *Aletia salebrosa* (Butler) カバフクロテンキ  
ヨトウ 19. V. 1959.
51. *Aletia consanguis* (Geunée) マメチャイロキ  
ヨトウ 11. VIII. 1960, 29. IX. 1960,  
14. VII. 1961, 13. IX. 1962.

52. *Pseudoaetia separata* (Walker) アフヨトウ  
19. XII. 1958, 28. IV. 1959, 15. XI. 1960,  
29. XI. 1960.
53. *Leucania striata* Leech スジシロキヨトウ  
9. X. 1959, 17. V. 1960, 30. IX. 1960,  
10. X. 1961, 1. X. 1962.
54. *Leucania compta* Moore アトジロキヨトウ  
12. X. 1960, 17. X. 1960.
55. *Acantholeucania loreyi* (Duponchel) クサシロ  
キヨトウ 14. IX. 1960.
56. *Senta flammea* (Curtis) ナカスジキヨトウ  
1. IX. 1961, 13. IX. 1961.  
<セダカモクメ亜科 CUCULLIINAE>
57. *Cucullia maculosa* Staudinger ハイイロセダ  
カモクメ 13. IX. 1960, 23. IX. 1960,  
20. IX. 1962.
58. *Cucullia elongata* (Butler) キクセダカモク  
メ 4. V. 1959, 18. V. 1959, 3. VII. 1959,  
29. IX. 1959, 25. IV. 1960, 5. V. 1960(2).
59. *Daseochaeta viridis* (Leech) ケンモンミドリ  
キリガ 10. XI. 1960, 9. XI. 1962.
60. *Dryobotodes intermissa* (Butler) ナカオビキ  
リガ 10. XI. 1960.
61. *Dryobotodes angusta* Sugi ホソバオビキリガ  
15. XI. 1960.
62. *Xylena fumosa* (Butler) アヤモクメキリガ  
20. III. 1959.
63. *Xylena formosa* (Butler) キバラモクメキリ  
ガ 3. IV. 1959, 3. II. 1962, 7. II. 1962.
64. *Rhynchaglaea scitula* (Butler) チャマダラキ  
リガ 12. IV. 1961.
65. *Telorta acuminata* (Butler) ウスキトガリキ  
リガ 1. XI. 1962, 10. XII. 1962.
66. *Telorta edentata* (Leech) キトガリキリガ  
14. XI. 1962.
67. *Telorta divergens* (Butler) ノコメトガリキ  
リガ 24. XI. 1962.
68. *Antivaleria viridimacula* (Graeser) アオバハ  
ガタヨトウ 14. XII. 1962.
69. *Nycticia hoenei* (Boursin) ヘーネアオハガタ  
ヨトウ 14. XII. 1962.
70. *Mniotype melanodonta* (Hampson) オオハガタ  
ヨトウ 27. X. 1961, 31. X. 1961.
71. *Meganephria funesta* Leech ホソバハガタヨ  
トウ 27. X. 1961.  
<カラスヨトウ亜科 AMPHIPYRINAE>
72. *Apamea hampsoni* Sugi ネスジシラクモヨト  
ウ 29. V. 1959, 24. VI. 1960, 5. VI. 1961,  
9. VI. 1962.
73. *Apamea commixta* (Butler) ヒメハガタヨト  
ウ 14. VI. 1960.
74. *Oligia ophiogramma* (Esper) クサビヨトウ  
14. VI. 1960, 9. VI. 1961, 30. VI. 1961.
75. *Sapporia repetita* (Butler) サッポロチャイ  
ロヨトウ 16. VI. 1960.
76. *Bambusiphila vulgaris* (Butler) ハジマヨト  
ウ 26. VII. 1960(2).
77. *Atrachea nitens* (Butler) ギシギシヨトウ  
31. V. 1960, 1. VI. 1960(2), 14. VI. 1960,  
24. VI. 1960.
78. *Sesamia turpis* (Butler) テンオビヨトウ  
24. V. 1960, 17. VIII. 1960.
79. *Sesamia inferens* (Walker) イネヨトウ  
19. V. 1959, 16. V. 1960, 27. IX. 1960,  
20. V. 1961.
80. *Triphaenopsis lucilla* Butler シロホシキシタ  
ヨトウ 20. VII. 1960.
81. *Polyphaenis subviridis* (Butler) ウスアオヨ  
トウ 2. VII. 1959, 14. VI. 1960, 15. VI. 1960,  
12. VI. 1961(2).
82. *Actinotia intermediata* (Bremer) コモクメヨ  
トウ 3. X. 1960.
83. *Axylia putris* (Linnaeus) モクメヨトウ  
4. IX. 1959, 13. V. 1960, 12. IX. 1960,  
23. IX. 1962.
84. *Trachea atriplicis* (Linnaeus) シロスジアオ  
ヨトウ 16. V. 1960, 27. V. 1961,  
16. VI. 1961.
85. *Spodoptera litura* (Fabricius) ハスモンヨト  
ウ 10. XI. 1960, 14. IX. 1961, 21. IX. 1961,  
3. X. 1961, 21. X. 1961, 26. X. 1961.
86. *Spodoptera depravata* (Butler) スジキリヨト  
ウ 15. IX. 1959, 1. X. 1959, 21. V. 1960,  
24. V. 1960, 15. VII. 1960, 6. IX. 1960.

87. *Athetis cinerascens* (Motschulsky) クロテン  
ヨトウ 3. IV. 1959, 18. V. 1961,  
30. V. 1961.
88. *Athetis subargentea* (Caradja) エゾウスイロ  
ヨトウ 2. V. 1959, 19. IV. 1960(2),  
30. IV. 1960, 9. V. 1960(2), 7. VII. 1960.
89. *Athetis dissimilis* (Hampson) テンウスイロヨ  
トウ 2. VI. 1959, 12. IX. 1960, 7. IX. 1962.
90. *Athetis albisignata* (Oberthür) シロテンウス  
グロヨトウ 26. V. 1960, 16. VIII. 1960,  
17. VIII. 1960.
91. *Athetis stellata* (Moore) ヒメサビスジヨトウ  
1. X. 1959, 26. IV. 1960, 26. V. 1960,  
27. IX. 1960, 29. IX. 1960, 1. X. 1960(2),  
10. V. 1961, 18. V. 1961.
92. *Athetis lineosa* (Moore) シロモンオビヨトウ  
18. VIII. 1964.
93. *Amphipyra livida* (Denis & Schiffermüller)  
カラスヨトウ 3. XII. 1958, 19. XII. 1958,  
26. X. 1959, 24. VII. 1960.
94. *Amphipyra tripartita* Butler シロスジカラス  
ヨトウ 1. X. 1960.
95. *Amphipyra erebina* (Butler) オオウスズマ  
カラスヨトウ 13. VII. 1961.
96. *Mormo muscivirens* Butler アオバセダカヨ  
トウ 10. X. 1961.
97. *Orthogonia sera* Felder ノコメセダカヨトウ  
25. VI. 1959, 7. VII. 1961, 10. VII. 1962.
98. *Cosmia achatina* Butler シマキリガ  
25. VI. 1959, 7. VII. 1960, 1. VII. 1961,  
6. VII. 1961, 11. VII. 1962.
99. *Chasminodes cilia* (Staudinger) ウススジギ  
ンガ 12. VII. 1962.
100. *Niphonyx segregata* (Butler) チャオビヨト  
ウ 18. VIII. 1960(3), 13. IX. 1960.
101. *Oligonyx vulnerata* (Butler) ベニモンヨトウ  
4. V. 1959, 27. V. 1959, 1. V. 1960(2),  
6. V. 1960, 13. V. 1960.
102. *Pyrrhidivalva sordina* (Butler) マエホシヨ  
トウ 13. IX. 1960, 2. IX. 1962.
103. *Eucarta fasciata* (Butler) シマヨトウ  
18. VIII. 1964(2).
104. *Dysmilichia gemella* (Leech) モンオビヒメヨ  
トウ 17. IX. 1960(3).
105. *Hadjima biguttula* (Motschulsky) フタテン  
ヒメヨトウ 2. VI. 1959, 1. X. 1959,  
16. V. 1960, 26. V. 1960(2), 31. V. 1960.
106. *Iambia japonica* Sugi シロマダラヒメヨトウ  
2. VII. 1960, 5. VII. 1962.
107. *Virgo datanidia* (Butler) トガリヨトウ  
27. IX. 1960, 3. X. 1960, 21. IX. 1961.
108. *Plusilla rosalia* Staudinger ギンモンアカヨ  
トウ 22. V. 1962, 9. VI. 1962, 20. VI. 1962.
109. *Callopietria juvenina* (Stoll) ムラサキツマ  
キリヨトウ 26. V. 1960, 27. VI. 1960,  
1. VII. 1960, 13. VII. 1960, 26. VI. 1962.
110. *Callopietria duplicans* Walker ヒメツマキリ  
ヨトウ 7. VII. 1961.
111. *Callopietria aethiops* Butler アミメツマキリ  
ヨトウ 26. VII. 1960.
112. *Callopietria placodoides* (Guenée) アヤナミツ  
マキリヨトウ 8. IX. 1960.
113. *Sphragifera biplaga* (Walker) コマルモンシ  
ロガ 7. VII. 1960, 12. VIII. 1960, 12. VI. 1961.
- <フサヤガ亜科 EUTELIINAE>
114. *Eutelia geyeri* (Felder & Rogenhofer) フサ  
ヤガ 29. IX. 1959, 6. IX. 1960, 3. X. 1960,  
13. X. 1960.
- <キノカワガ亜科 SARROTHRIPINAE>
115. *Negritothrips hamptoni* (Wileman) ネジロキ  
ノカワガ 15. VI. 1962, 7. VII. 1962.
116. *Isucadia uniformis* (Inoue & Sugi) ナンキ  
ンキノカワガ 12. IV. 1961.
117. *Risoba prominens* Moore リュウキュウキノ  
カワガ 27. IX. 1960.
118. *Blenina senex* (Butler) キノカワガ  
—. X. 1958, —. III. 1959, 3. IV. 1959,  
—. X. 1959.
119. *Characoma ruficirra* (Hampson) ネスジキノ  
カワガ 29. XI. 1961.
120. *Nycteola asiatica* (Krulikowski) クロスジキ  
ノカワガ 12. IV. 1960, 14. IV. 1960,  
12. IV. 1961.
121. *Nycteola costalis* Sugi マエシロモンキノカワ

- ガ 9. IV. 1959, 12. IV. 1961, 10. X. 1961.  
 <コブガ亜科 NOLINAE>
123. *Nola cristatula* (Hübner) ツマグロコブガ  
 12. IX. 1960, 11. VII. 1962.
124. *Nola taeniata* Snellen クロスジシロコブガ  
 26. VI. 1961.
125. *Nola emi* (Inoue) ツマカバコブガ  
 17. IX. 1960, 5. X. 1960.
126. *Nola trilinea* Marumo ミスジコブガ  
 5. IX. 1962.
127. *Rhynchopalpus albula* (Denis & Schiffermüller) トビモンシロコブガ  
 17. VI. 1960(3), 13. IX. 1960.
128. *Rhynchopalpus fumosa* (Butler) クロスジコブガ 16. VI. 1960(3), 17. IX. 1960(2),  
 12. VI. 1961(2), 30. VII. 1961.
129. *Evonima mandschuriana* (Oberthür) リンゴコブガ 12. VI. 1961, 14. VI. 1961,  
 9. VI. 1962.  
 <リング亜科 CHLOEPHORINAE>
130. *Earias pudicana* Staudinger アカマエアオリンガ 7. VII. 1960.
131. *Earias roseifera* Butler ベニモンアオリンガ  
 19. IV. 1960, 30. IV. 1960, 1. V. 1960(2),  
 11. V. 1960, 12. V. 1960.
132. *Gelastocera exustra* Butler クロオピリンガ  
 30. IV. 1959, 21. IX. 1959, 20. IV. 1960,  
 24. V. 1960, 29. VI. 1961.
133. *Pseudoips sylpha* (Butler) アカスジアオリンガ 13. IV. 1960, 21. V. 1960, 1. VII. 1960,  
 2. VII. 1960.
134. *Ariolica argentea* (Butler) ギンボシリンガ  
 11. V. 1960.
135. *Gobala argentata* Butler ハイイロリンガ  
 16. V. 1960, 6. IX. 1960, 17. XI. 1960.  
 <コヤガ亜科 ACONTIINAE>
136. *Enispa leucosticta* Hampson シラホシコヤガ  
 14. VII. 1960, 11. VI. 1961, 12. VI. 1961.
137. *Aventiola pusilla* (Butler) クロハナコヤガ  
 10. VII. 1961, 24. VII. 1961.
138. *Corgatha nitens* (Butler) シマフコヤガ  
 1. VII. 1960(2).
139. *Corgatha argillacea* (Butler) カバイロシマコヤガ 2. VII. 1960, 12. VII. 1960,  
 16. VIII. 1960, 20. VI. 1961.
140. *Eublemma dimidialis* (Fabricius) ベニスジコヤガ 21. VII. 1960.
141. *Sophia subrosea* (Butler) ウスベニコヤガ  
 20. IX. 1960, 5. IX. 1961.
142. *Sohia ruficeps* (Walker) テンモンシマコヤガ 8. IX. 1960, 30. V. 1961.
143. *Oruza divisa* (Walker) ヒメクルマコヤガ  
 23. IX. 1959, 18. VIII. 1960, 8. IX. 1960,  
 20. IX. 1960, 12. IX. 1961(2).
144. *Oruza glaucotorna* Hampson モンシロクルマコヤガ 27. IX. 1960.
145. *Maliattha signifera* (Walker) ヒメネジロコヤガ 14. VI. 1960, 16. VI. 1960, 18. VII. 1960,  
 12. VIII. 1960, 17. IX. 1960, 30. IX. 1960,  
 14. VI. 1961.
146. *Micardia argentata* Butler シロヒシモンコヤガ 26. V. 1960, 22. V. 1962.
147. *Micardia pulchra* Butler フタホシコヤガ  
 13. V. 1960.
148. *Pseudodeltote brunnea* (Leech) トビモンコヤガ 13. IX. 1960, 7. IX. 1961(2).
149. *Protodeltote pygarga* (Hufnagel) シロフコヤガ 13. V. 1960, 30. V. 1961.
150. *Protodeltote distinguenda* (Staudinger) シロマダラコヤガ 13. VI. 1960(2), 14. VI. 1960,  
 16. VI. 1960(5), 2. VII. 1960, 30. V. 1961(2).
151. *Sugia stygia* (Butler) ウスシロフコヤガ  
 14. VII. 1960.
152. *Lithacosia erastroides* (Draudt) ニセシロフコヤガ 24. V. 1960(2), 26. V. 1960,  
 13. VI. 1960, 16. VI. 1960(4), 12. VI. 1961(2).
153. *Sugia idiostygia* (Sugi) ネモンシロフコヤガ  
 26. VI. 1960.
154. *Phyllophila oblitterata* Rambur ヨモギコヤガ  
 24. V. 1960, 18. VII. 1960, 18. V. 1961.
155. *Ozarka punctigera* Walker ホシコヤガ  
 25. VII. 1961.
156. *Naranga aenescens* Moore フタオビコヤガ  
 13. IX. 1960, 1. VII. 1961.



157. *Amyna stellata* Butler サビイロコヤガ  
18. V. 1961.

<ウワバ亜科 PLUSIINAE>

158. *Abrostola abrostorina* (Butler) ユミガタマ  
ダラウワバ 2. VII. 1959.

159. *Macdunnoughia purissima* (Butler) ギンモン  
シロウワバ 17. XI. 1960, 4. X. 1962.

160. *Antoculeora locuples* (Oberthür) ギンボシキン  
ウワバ 22. X. 1962.

161. *Erythroplusia rutilifrons* (Walker) ギンスジ  
キンウワバ 21. IV. 1959, 30. V. 1959,  
24. VI. 1960.

162. *Erythroplusia pyropia* (Butler) セアカキン  
ウワバ 4. X. 1961, 18. X. 1961.

163. *Autographa nigrisigna* (Walker) タマナギン  
ウワバ 7. VII. 1960.

164. *Plusia festucae* (Linnaeus) イネキンウワバ  
14. VII. 1960.

165. *Diachrysia coreae* (Inoue & Sugi) リョクモン  
オオキンウワバ 1. X. 1959.

166. *Thyanoplusia intermixta* (Warren) キクキン  
ウワバ 20. IV. 1959(2), 9. X. 1959,  
4. X. 1961.

167. *Trichoplusia daubei* (Boisduval) アミメギン  
ウワバ 18. X. 1961.

168. *Ctenoplusia albostrata* (Bremer & Grey)  
エゾギクキンウワバ  
12. IX. 1961, 14. IX. 1961, 1. VIII. 1962.

169. *Ctenoplusia agnata* (Staudinger) ミツモン  
キンウワバ 26. VII. 1960, 6. IX. 1960,  
14. IX. 1961, 12. X. 1961(2).

170. *Chrysodeixis eriosoma* (Doubleday) イチジク  
キンウワバ 26. VII. 1960.

171. *Anadevidia peponis* (Fabricius) ウリキンウ  
ワバ 3. IX. 1959.

<シタバガ亜科 CATOCALINAE>

172. *Catocala fulminea* Butler ワモンキシタバ  
24. VI. 1960, 5. VII. 1961, 26. VI. 1962.

173. *Catocala patala* C. & R. Felder キシタバ  
12. VII. 1960.

174. *Catocala paraegnax* Walker コガタキシタバ  
29. VII. 1959, 11. VII. 1960, 12. VII. 1960(2).

175. *Ophiusa olista* (Swinhoe) コヘリグロクチバ  
2. VI. 1959, 20. VII. 1960.

176. *Dysgonia arctotaenia* (Guenée) ホソオビアシ  
プトクチバ 24. V. 1960, 20. V. 1961.

177. *Dysgonia dulcis* (Butler) ヒメアシプトクチ  
バ 1. VII. 1959, 17. VI. 1960, 25. VII. 1960,  
8. IX. 1960, 25. VI. 1962.

178. *Mocis undata* (Fabricius) オオウンモンク  
チバ 15. VI. 1960, 18. X. 1961.

179. *Mocis annetta* (Butler) ウンモンクチバ  
21. V. 1959, 1. VI. 1960.

180. *Mocis ancilla* (Warren) ニセウンモンクチバ  
26. V. 1959, 28. XII. 1959, 17. V. 1960(2),  
20. V. 1961.

181. *Ercheia umbrossa* Butler モンムラサキクチ  
バ 13. VII. 1961, 18. VIII. 1961.

182. *Arcte coerulea* (Guenée) フクラスズメ  
8. I. 1960, 29. XI. 1961.

183. *Hypopyra vespertilio* (Fabricius) カギバトモ  
エ 1. X. 1959.

<クチバ亜科 OPHIDERINAE>

184. *Perinaenia accipiter* (Felder & Rogenhofer)  
モクメクチバ 27. IV. 1960.

185. *Lygephila maxima* (Bremer) クビグロクチバ  
6. IX. 1960, 12. IX. 1962.

186. *Lygephila recta* (Bremer) ヒメクビグロクチ  
バ 11. VII. 1960, 8. V. 1961.

187. *Chrysorithrum amatum* (Bremer & Grey) カ  
クモンキシタバ 26. V. 1959, 4. IX. 1959,  
12. V. 1960.

188. *Anomis mesogona* (Walker) アカキリバ  
24. VI. 1960, 21. VII. 1960, 10. XI. 1960,  
22. XI. 1960, 16. VIII. 1961, 4. X. 1961.

189. *Calyptra thalictri* (Borkhausen) ウスエグリ  
バ 14. VI. 1960.

190. *Plusiodonta casta* (Butler) マダラエグリバ  
24. V. 1960(2), 14. VII. 1960, 26. VII. 1960,  
20. V. 1961.

191. *Calyptra gruesa* (Draudt) オオエグリバ  
20. IV. 1962, 20. VII. 1962.

192. *Oraesia emarginata* (Fabricius) ヒメエグリ  
バ 20. VII. 1960, 4. X. 1961, 12. X. 1961,

27. X. 1961.
193. *Oraesia excavata* (Butler) アカエグリバ  
11. VIII. 1959, 11. VIII. 1960.
194. *Lacera procellosa* Cramer ルリモンクチバ  
17. XI. 1960.
195. *Erygia apicalis* Guenée アカテンクチバ  
17. V. 1960, 8. V. 1961, 19. VIII. 1961.
196. *Sypnoides picta* (Butler) シラフクチバ  
24. VI. 1960(2), 3. IX. 1960, 12. VI. 1961.
197. *Hypersypnoides submarginata* (Walker) オオ  
シロテンクチバ 11. IV. 1961, 9. IV. 1962(2).
198. *Blasticorhinus ussuriensis* (Bremer) コウン  
モンクチバ 5. VIII. 1960, 1. VIII. 1962.
199. *Aedia leucomelas* (Linnaeus) ナカジロシタ  
バ 5. IX. 1961.
200. *Mecodina cineracea* (Butler) カバフヒメク  
チバ 17. VI. 1960.
201. *Mecodina nubistigma* (Leech) シャクドウク  
チバ 18. V. 1961, 10. VIII. 1961.
202. *Arytrura musculus* (Ménétrières) ソトジロツ  
マキリアツバ 1. VII. 1959, 24. VI. 1960,  
28. VI. 1962, 7. IX. 1962.
203. *Pangrapta umbrosa* (Leech) シロモンツマキ  
リアツバ 20. V. 1961.
204. *Pangrapta indentalis* (Leech) ムラサキツマ  
キリアツバ 11. VIII. 1959, 4. IX. 1959,  
30. V. 1960, 1. VI. 1960, 29. VI. 1960.
205. *Pangrapta flavomacula* Staudinger キモンツ  
マキリアツバ 14. VI. 1960, 26. VII. 1960,  
12. VI. 1961(4).
206. *Pangrapta obscurata* (Butler) リンゴツマキ  
リアツバ 8. IX. 1960, 12. VI. 1961.
207. *Polysciera manleyi* (Leech) マンレイツマキ  
リアツバ 20. VII. 1960.
208. *Lophomilia polybapta* (Butler) キマダラアツ  
バ 16. VI. 1960, 5. VI. 1962.
209. *Stenbergmania albomaculalis* (Bremer) シロ  
テンアツバ 14. VI. 1960, 1. VII. 1960,  
14. VIII. 1960, 12. VI. 1961.
210. *Gonepatica opalina* (Butler) フタスジエグ  
リアツバ 7. VII. 1960.
211. *Anatatha misae* Sugi ヒメナミグルマアツバ  
20. VI. 1961, 26. VI. 1961.
212. *Hypostrongylus cinerea* (Butler) マエジロアツ  
バ 30. V. 1961, 15. VI. 1962.
213. *Phytometra amata* (Butler) ベニスジアツバ  
14. VI. 1961, 24. VII. 1961.
214. *Colobochyla salicalis* (Denis & Schiffermüller) キンスジアツバ  
12. VI. 1961, 1. VII. 1961, 6. VII. 1961.
215. *Rhesala imparata* (Walker) マエテンアツバ  
27. IX. 1960, 10. XI. 1960(2), 17. XI. 1960.
216. *Paragobara ochreipennis* Sugi チャバネキボ  
シアツバ 26. V. 1960, 20. V. 1961,  
12. VI. 1961.
217. *Rivula sericealis* (Scopoli) テンクロアツバ  
26. IV. 1960, 15. VI. 1961, 26. VI. 1961.
218. *Rivula inconspicua* (Butler) フタテンアツ  
バ 19. IV. 1960, 26. IV. 1960, 5. X. 1960,  
12. VI. 1961, 14. VI. 1961, 3. X. 1961.
219. *Hypenomorpha calamina* (Butler) ヒロバチ  
ビトガリアツバ 20. IX. 1962.
220. *Rhynchodontodes plusioides* (Butler) アヤナ  
ミアツバ 21. VI. 1959, 1. VI. 1960,  
9. VI. 1960, 24. VI. 1960, 14. VII. 1960,  
8. V. 1961.
221. *Gynaephila maculifera* Staudinger フタキボ  
シアツバ 12. IX. 1961.
222. *Schranksia costaestrigalis* (Stephens) クロス  
ジヒメアツバ 10. X. 1961.
- <アツバ亜科 HYPENINAE>
223. *Harita belinda* Butler ナカジロアツバ  
3. IV. 1959(3), 15. IV. 1959, 26. VI. 1959,  
13. IV. 1960, 14. VII. 1960.
224. *Hypena claripennis* Butler キシタアツバ  
13. V. 1960.
225. *Hypena amica* Butler クロキシタアツバ  
29. IX. 1960.
226. *Hypena strigatus* Fabricius ナミテンアツバ  
1. X. 1962.
227. *Hypena indicatalis* Walker トビモンアツバ  
12. IX. 1960(2), 17. X. 1960, 29. XI. 1961(2),  
28. IV. 1962.
228. *Hypena abducalis* Walker サザナミアツバ

19. IV. 1960, 17. XI. 1960, 26. VII. 1961(2),  
14. IX. 1960.
229. *Hypena similalis* Leech ナミガタアツバ  
1. V. 1960.
230. *Bomolocha squalida* Butler ハングロアツバ  
12. VI. 1961, 12. IX. 1961.  
<クルマアツバ亜科 HERMININAE>
231. *Adrapsa simplex* Butler シラナミクロアツバ  
13. IX. 1960.
232. *Hydrillodes lentalis* Guenée ソトウスグロアツバ  
—. X. 1958, 1. X. 1959, 24. V. 1960,  
8. IX. 1960, 13. IX. 1960, 17. IX. 1960(3),  
27. IX. 1960(2), 11. X. 1961.
233. *Hydrillodes pacifica* Owada マルバネウスグロアツバ  
11. V. 1960, 12. V. 1960,  
12. IV. 1961.
234. *Edessena gentiusalis* Walker マルシラホシアツバ  
5. VII. 1962.
235. *Edessena hamada* C & R. Felder オオシラホシアツバ  
10. VI. 1959, 12. VI. 1959,  
5. VII. 1961.
236. *Mosopia sordida* Butler フサキバアツバ  
26. VII. 1960.
237. *Cidaripalura signata* Butler カギモンハナオイアツバ  
21. VI. 1961, 28. VI. 1961(2),  
19. VI. 1962.
238. *Paracolax trilinealis* Bremer ミスジアツバ  
26. V. 1960, 14. VI. 1960, 13. IX. 1960,  
5. IX. 1961, 13. IX. 1961, 14. IX. 1961.
239. *Paracolax preyri* Butler シロテンムラサキアツバ  
1. VII. 1959.
240. *Nodaria tristis* Butler ヒゲブトクロアツバ  
20. IV. 1959, 21. V. 1959, 9. V. 1959,  
28. IX. 1959, 27. IV. 1960, 1. V. 1960(2),  
6. V. 1960(2), 13. V. 1960, 17. V. 1960,  
7. VII. 1960, 12. VII. 1960, 6. IX. 1960,  
17. IX. 1960, 29. X. 1960.
241. *Simplicia nippona* Butler オオアカマエアツバ  
—. X. 1958, 1. X. 1959(3), 13. VI. 1960,  
3. X. 1960, 10. X. 1961(2), 27. X. 1961.
242. *Zanclognatha helva* Butler キイロアツバ  
12. VI. 1962.
243. *Zanclosnatha subgriselda* Sugi ヒメツマオビアツバ  
14. VII. 1960, 13. X. 1960,  
16. VI. 1961.
244. *Zanclognatha violacealis* Staudinger ウラジロアツバ  
23. IX. 1959, 1. VII. 1960,  
26. VII. 1960, 10. IX. 1960, 12. VI. 1961,  
5. VII. 1961.
245. *Zanclognatha umbrosalis* Staudinger チョウセンコウスグロアツバ  
1. VII. 1959,  
1. VII. 1960, 7. VII. 1960, 12. VII. 1960(2),  
5. VII. 1961(2).
246. *Herminia innocens* Butler シラナミアツバ  
16. V. 1960, 13. V. 1960, 8. V. 1961.
247. *Herminia arenosa* Butler ウスキミスジアツバ  
20. V. 1959, 13. V. 1960, 10. IX. 1960,  
13. IX. 1960, 10. V. 1961, 19. IX. 1961.
248. *Herminia tarsicrinalis* Knoch トビスジアツバ  
26. V. 1960.
249. *Hipoena fractalis* Guenée オオシラナミアツバ  
20. IV. 1959, 21. IX. 1959, —. X. 1959,  
24. V. 1960, 1. VI. 1960, 14. VII. 1960,  
17. IX. 1960, 27. IX. 1960, 1. X. 1960,  
5. X. 1960, 17. X. 1960, 18. VII. 1961,  
19. IX. 1961.
250. *Stenhypena nigripuncta* Wileman ムモンキイロアツバ  
27. IV. 1962, 4. IX. 1962.

## トラガ科 AGARISTIDAE

1. *Sarbanissa subflava* Moore トビイロトラガ  
27. V. 1959, 28. V. 1962.

## 謝 辞

本稿を草するにあたり、井上 寛博士、杉 繁郎氏、山中 浩氏には種の同定にあたりいろいろとお世話になりました。厚く御礼申し上げます。また、元県立西脇高校の同僚猪股凉一博士をはじめ多くの方々から御援助をいただき感謝申しあげます。

## &lt;参考文献&gt;

日本蛾類学会会報 TINEA, 蛾類通信 各号  
日本鱗翅学会 蝶と蛾, やどりぎ 各号

## 台湾のコオロギ相撲

相坂 耕作

### はじめに

コオロギ相撲は中国の唐代に始まり、宋代に広まり、明・清の時代に盛んになったコオロギを格闘させる賭博で、宮廷遊戯の一つです。いわば闘牛、闘犬、闘鶏などと同じギャンブル性の強い遊びであり、闘蟋(とうしつ)と中国では造語でよばれています。上海の古老によると「冒険家の楽園とよばれていた時代、多くの外国人はジャズやダンスを楽しんでいたが、我々中国人はコオロギの遊びしかなかった」ともいっています。映画「ラストエンペラー」で皇帝溥儀が丸い壺に虫を入れて可愛がるシーンを覚えておられる方もいるでしょう。映画ではキリギリスの1種が見られましたが実際にはコオロギを飼育する壺なのです。さて、中国の闘蟋についてはインセクトarium誌の1992年9月号に三橋淳・方向両氏により詳しく報告されていますのでご覧いただくとして、ここでは中華民国台湾省での闘蟋について紹介したいと思います。台湾にもコオロギ相撲があるのは、すでに故松浦一郎著(1989)による「鳴く虫の博物誌」により、松浦氏自身が台湾出身者からの見聞を発表された報文が載っており、おおまかには知っていました。しかし、これは子供による闘蟋であり、台湾へよく訪れている筆者は、機会があれば是非本

式の闘蟋を見てみたいものと常々思っていました。ところが筆者が4年前に訪台したおり、中華民国台湾省の蝶研究の権威である陳維寿氏にお会いした際、台南地方にはいまもコオロギ相撲がのこっているはずと聞いており、訪台の機会をまっていた。ようやく平成7年7月8日より4日間訪台する機会に恵まれ、早速友人の周英勇氏に連絡、台南市へ連れて行ってもらうことになりました。

### 台南市へ

初めて台湾へ行きだしてからもうパスポートは4冊目となっており、もちろん訪台は2ヶタを越してしまっています。今回訪問する台南市は2度目ですが、過去に台北、基隆、淡水、宜蘭、新竹、花蓮、台中、嘉義、台南、高雄など主要な都市を回ってきました。しかし今まで闘蟋はどの都市でも見ることも聞くことも出来ませんでした。陳維寿氏にお聞きしてから今回、筆者の下調べで、いまも嘉義市か台南市でコオロギ相撲が見られるのではないかとの期待感を持ち、古都台南へ出発したのは台北到着日の翌日(1995.VII.9)深夜の1時30分(日本時間2時30分)でした。夜行バスは早朝6時ころ台南駅(写真:1)に到着。同行は愚息と周英勇(台北動物園胡蝶館職員)氏でした。



写真: 1 早朝の台南駅



写真: 2 サン글ラスを掛けた犬

バスの到着が早いので朝一番の屋台で朝食をとることになりました。台湾粥と共に肉料理ができましたが、脂ぎったものは朝から筆者は口にあわず、多く残しました。しかし息子と周氏は口にあつらしく全部食べていました。屋台のそばの光景ですが、台湾の人は陽気な人が多く、屋台のそばに駐車していたオートバイに腰を掛けさせた犬にサングラスをつけさせているのには一笑了しました(写真：2)。朝食後、顔を洗っていないので有名な観光地である赤嵌樓にて洗顔し休憩していると、その付近に多くの人たちが集まり太極拳をやっていました。時間もたち、古都の街を歩いても一向に鬮蟋などしている気配はないし、人に聞いても知らないといひます。案内の周氏も困りはて、タクシーにて観光地の安平古堡(ゼーランジャ城)へ行くことになりました。ゼーランジャ城というのは、オランダ人が台湾を占領統治していた時代の要塞の跡で、台南市を訪れた観光客が必ずといっていいほど足を伸ばす場所です。安平古堡の通りの前には、日本でお馴染み邱永漢氏の収集した台湾独特の民芸品や生活道具が数多く陳列された台南市永漢民藝館があり、一度も見ていないので開館までの暫くの間、観覧するため時間待ちすることになりました。しかし、あまりにも開館までの時間が長いので先に安平古堡を観光し、観光者にコオロギ相撲を聞いたことがないか聞くことにしました。すると一人の人がこの付近でやっていると教えてくれました。

### コオロギ相撲を見るまで

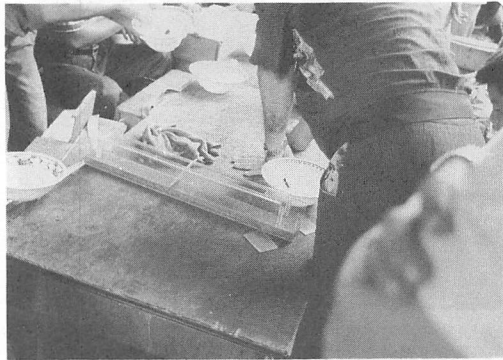
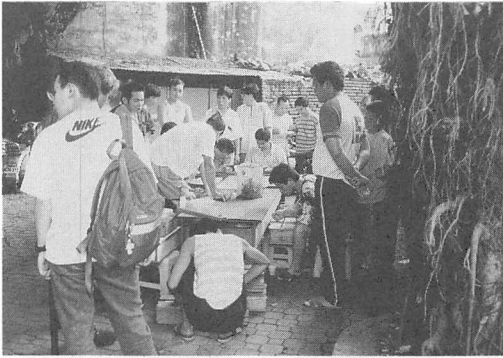
周氏が観光者から聞いた説明によると、この付近の旧街での日曜日にやっているとの事でした。永漢民藝館見学を後まわしにして、早速その現地へいって見ましたが全くコオロギ相撲をするような気配はないのです。いろんな人に鬮蟋について聞いてみると、ほとんどが没有(メーヨー=ない)なのです。ただ不思議なことに、やたらと物陰からコオロギが鳴いているではありませんか。そのうちある人がやっとなんて教えてくれました。午前11時ごろになるとこの近くにあるガジュマルの大木付

近に集まってきてコオロギ相撲(鬮蟋)をするというのです。冷静に考えると賭博なので、特定の人しか分からないようにする必要があり、もちろん公認されたものでもありません。警察(公安)に知られるとまずいでしょう。鬮蟋開始までの時間に台南市永漢民藝館にて時間をつぶすことになりました。展示品は結構筆者の好きな民俗資料が多数あり、充分楽しめました。この永漢民藝館について少々触れてみると、邱永漢氏が6年間にわたり民芸品を蒐集したものが3,000点以上にもなり、公開したほうが意義があるとのことで台南市長に相談。もし、市政府がしかるべき場所を提供してくれたら全部寄付してもよいと申し入れ、市長がゼーランジャ城の真ん前にある、もともとオランダ屋敷の跡で最近まで使っていた安平区公所の跡を提供し、昭和54年(1979)1月1日のオープンで民芸館としたものです。邱永漢氏は、折角寄付したものが万一、粗末に扱われると困るから、管理委員会をつくって文句がいえるように条件をつけていると聞きます。日本の戦後と同じく、台湾でもちょうどその時期にさしかかり、古いものはガラクタにされ新しいものが称赞される時代となっていたからです。残念ながら筆者のみたい昆虫に関係する民俗資料はすみずみまで物色しましたがありませんでした。

### コオロギ相撲の開始

さて、いよいよ午前11時ころになってきました。会場となる場所に戻ると、各方面から単車がやってきてたちまち人だかりとなりました。その手には男たちが大きな木箱を持っています。会場は旧い街並みの一角で少し広い空き地となっており、かたわらには大きなガジュマルの木があり気根にはおまじないのお札が多く差し込まれています(写真：3)。おそらく鬮蟋でお金持ちになれるよう願ったお札もあると思われます。そのそばにある古い床机(しょうぎ)を会場の真ん中に据え、鬮蟋場が設営されました。おまけに中華の昼食や飲物が取れる屋台も準備されており、試合の前に食事をする人もおれば、合間に口を動かす人などさ

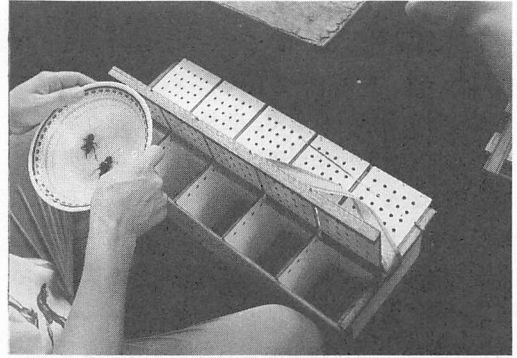




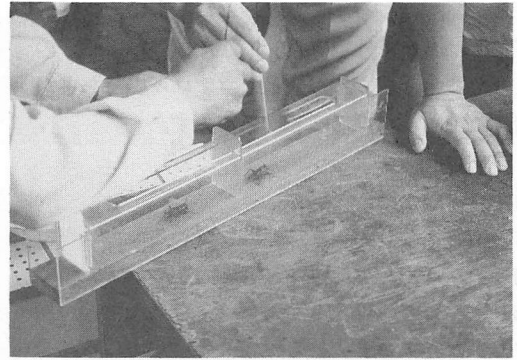
左上 写真：3 闘蟋会場 かたわらには大きなガジュマルの気根が

左下 写真：5 斗格(土俵)

まざまです。そしていよいよ闘蟋が始まりました。闘蟋に使うコオロギはフタホシコオロギ(クロコオロギ)で、中国のように壺には入れず、板でできた仕切つきの飼育器(写真：4)から取り出しています。そして、コオロギ(選手)2頭をラーメン鉢のようなものに入れ、事前に選手を興奮させるのです。その方法は鉢を前後させつつ上下させ、選手を宙に放り上げ、これを数回繰り返す(写真：4)のです。その内にどちらのコオロギが対戦させるのにふさわしいかどうか見くらべているのです(これは松浦一郎著の「鳴く虫の博物誌」による「左の手のひらにのせ、すかさず右手で左手の手首の辺りを打つと、コオロギは反動で宙に放り上げられ、落ちてくるところを再び左の手のひらで受け、また手首を叩いて放り上げる。これを3～4回繰り返すと興奮し、向かい合わずと闘い始める」とは少々違う点です)。すると選手はやる



右上 写真：4 飼育器と鉢



右下 写真：6 “くすぐり棒”で選手を興奮させる

気を出し、そして持ち主二人で同時にこれをやる。興奮の度合いのいい方を品定めをして格闘させています。選手のフタホシコオロギは中国の闘蟋で使うツヅレサセコオロギのように体重を計るような面倒なことはせず、すべて全級制です。斗格(土俵)は(写真：5)のようなアクリル製のもので手造りでした。細長くできており、上部には蓋がありません。

土俵の両端から選手を入れ、釣竿の先端に猫の髭をつけた、特有のくすぐり棒(写真：6)で選手の触角や体に触れ興奮させていくのです。お互いに興奮したところに土俵の真ん中にある仕切り板を上へ外し格闘させるのです。選手は土俵の中で顔が合うと威嚇しあい、キリキリと鳴き声を発する。そこを土俵の上部の間からくすぐり棒で再び触角や体に触れるとますます興奮し、お互いに体を前後にゆすりながら口を大きくあけて噛みつこうと

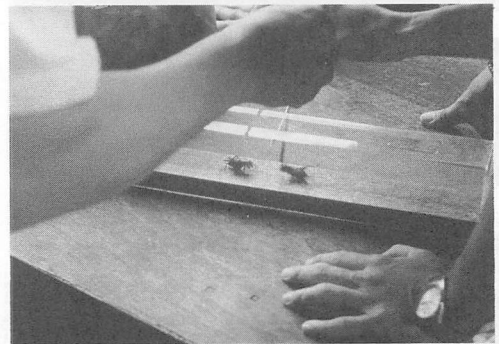
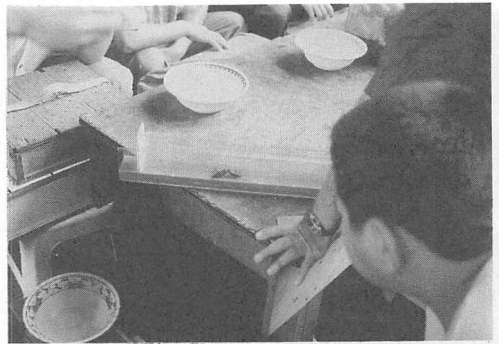
します(写真：7)。約20秒くらいの格闘でしょうか(写真：8)、やがて一方がくると回って逃げ出したら勝負が決まります。当然逃げたほうが負けになります。勝った選手は勝ちどきをあげ興奮しています。その持ち主もニコニコ顔で周囲を見わたします。負けた選手の持ち主はその選手を、たちまち海苔の空き瓶のような容器に入れます。つまり廃棄処分とするわけです。そこで筆者は負けた選手を標本用に10頭ほどもらって帰りました。彼らに聞くとところによると、これら選手のクオロギたちは全部野外で採集してきたものであるとのことでした。もちろん勝ったクオロギの持ち主が賭けた金を手にすることは当然です。

#### クオロギの種類

台南のクオロギ相撲に使われているクオロギは、前述のフタホシクオロギ *Gryllus bimaculatus* であり、クロクオロギともよばれる種類です。東南アジアからアフリカにかけての暑い地方に広く分布している種で、日本では南西諸島に生息しています。最近日本でも多く飼育され、熱帯魚の餌として使われている種類です。筆者もクチキクオロギと共にこのフタホシクオロギを飼育していますが、簡単に飼えます。どちらかというに見馴れているエンマクオロギと比べやや大きく、またクチキクオロギほど立派な後肢ではなく、ずんぐりした体です。全体は艶のある黒色ですが翅の基部に黄色の斑紋があります。個体によっては黄色がかったものもありますが、こんな個体はクオロギ相撲は弱いそうです。

#### 写真撮影の許可

筆者は是非ともこの闘蟋の現場を写真撮影したいと願ったところ、取り締まりの関係もないし、いわゆる外国人であるがゆえ好意的に撮影の許可をさせてもらいました。残念ながらお金のやりとりだけは自主的に撮影はしませんでした。トラブルに巻き込まれては大変だからです(写真：9)。



上 写真：7 仕切り板を上へ外し格闘する瞬間

中 写真：8 格闘しているところ

下 写真：9 闘蟋正面写真

#### 闘蟋の道具を譲ってもらう

筆者の私設資料館「播磨昆虫民俗資料館」には、中国の闘蟋で使う道具類や飼育に使う諸道具、またクオロギに関する研究書・文献などを保存しており、さらに、これらに加えて台湾の実際に使っている道具類を保存しておきたいので是非譲ってほしい旨を周氏にお願いしました。すると、闘蟋をしている人から、これらに使っている諸道具類は、台南氏永華路の某氏が製造しているとのこと

を教えてくださいました。

電話番号も聞きだし、お家へ電話をしましたが通じません。しかし、いま暫くすると本人がこの場所へやってくるということがわかりました。やがて少々時間が経ち某氏がやってきました。お金での譲渡をお願いするが、残念ながらいまは道具類は没有とのこと。季節的に作成するものらしいです。どうしても必要な資料なので再度周氏に伝えると、周氏は個々に交渉にあたってくれました。まず周氏は飼育箱のある人から手に入れてきてくれました。木製で外側は穴あきベニア合板を加工したもの、また内側はアルミニウムのやや厚い板が張られてあります。内部は10個の部屋に分かれており、選手を1頭ずつ隔離し搬入する道具となっています。斗格(土俵)はあと1時間位すると闘蟋が終わるので分けてもよいとの事。すこし時間待ちすることになりました。闘蟋終了後たしか日本円の1,000円くらいで譲ってもらったように記憶しています。この土俵は透明のアクリル板を加工したもので、長さ60cm幅8cmのもので中央で引き上げることのできる黒っぽいアクリル板がはめ込んであります。中国で使用している卵形の土俵とは全く違うものです。それから周氏がどこからか、くすぐり棒を手に入れてきました。これは猫の髭を使っているので各自手造りだと聞いたものです。また猫の髭が手に入りにくいと譲れないとも聞いた代物でもありました。筆者のあまりにも道具の入手に力を入れている熱心さに感動したのか、現地の会場で闘蟋をしているパンチパーマをかけた若い遊び人風のお兄さんがやってきて、こわい顔のわりには協力的で、自分が持っていたと思われる猫の髭を、全く言葉の通じない筆者に猫の真似をして「ニャオー」と鳴き、これは猫の髭であることを示して筆者に恵与してくれました。そしてこの髭を釣竿の先端部分を切り取り、そこへ猫の髭を数本取付け細工し、テグス糸で縛ってくすぐり棒を作成するのだということを身振り手振りをまじえて台湾語で教示してもらい、何とか理解できました。帰国後、早速作成してみました。

おわりに

今回、訪台の主目的の夜間採集ができなかった代わりに闘蟋の本番がみられるというラッキーな旅行となりました。たまたま日曜日に現地へ行ったのと、安平古堡の観光地で闘蟋を知っていた観光客がいたことなどが重なり運がよかったのだと思います。そのうえ、忘れてならないのは周英勇氏の案内があつてこそ見聞できた旅でありました。旅行終了の当日、超ベテラン現地(台湾)案内人に闘蟋の質問をしましたが、タイにはあるが台湾ではないとの返事でした。現地案内人にも知られていないコオロギ相撲を見られたのかと思うとあつい思いになりました。今度台南市へ行く機会があれば再度同地へ出向き、今回の訪問で聞けなかった採集したフタホシコオロギの飼育法や餌の種類、現地での採集法を見てみたいものです。

<主な参考資料>

- 邱永漢(1981) お金の使い方, 中央公論社, 191-195.  
 松浦一郎(1989) 鳴く虫の博物誌, 文一総合出版, 70-82.  
 三橋淳・方向(1992) 中国の闘蟋蟀, インセクタリウム, 29(9):12-17.  
 芳野未央・立川周二(1996) バリ島の「コオロギ相撲」見聞記, インセクタリウム, 33(9):12-15.

## 兵庫県の蝶／観察と知見

### —ヒロオビミドリシジミ—

大東 康人

#### はじめに

兵庫県に生息する蝶の中で、国内の分布が特異となる種は幾つか挙げられるが、今回取り上げるヒロオビミドリシジミ *Favonius latifasciatus* もその一つと言える。

本種は兵庫県において1934年、始めてその存在が明らかとなり、爾来、各地のゼフィルス愛好家による詳細な分布調査の結果、京都・大阪・兵庫の三府県境界域を東端に、西は中国4県のごく限られた地域に生息する「日本特産種」として世の注目を集めることになった。その後、44年を経た1978年には沿海州から朝鮮半島にかけて、国外にも生息することが確認され、種の分布域は「朝鮮・ウスリー系」に属することが判明している。このような経緯をもつ本種について先ず最初に参考資料<sup>1)</sup>の記述を要約し、種の概要を紹介することにしたい。これは、後に述べる筆者の見解と対比できるよう意図したものである。

#### 種の概要

本種の発生は年1化で、6月上旬に発生し始めた成虫は中旬に最盛期を迎え、雄の生存は7月下旬までとなる。一方、雌は唯一の食樹ナラガシワに6月下旬ころ産卵を終えるが、時に、9月上旬まで生き残るものもある。

生息地は平地～低山地の比較的林床の乾く南～西斜面の薪炭用二次林(クヌギ・コナラ・クリなどが混交する)で、通常ウラジロミドリシジミと混生し、単独では生息しない。また地域変異については、成虫の斑紋に顕著な差はみられないが、分布の西域ではやや不安定となる。

晴天時の雄の活動はAM9:30に始まり、10時から11:30頃に第1ピークを迎える。この時は食樹の梢上及び周辺を小刻みに活発に飛翔して占有を行い、域内に侵入した他個体や昆虫等を追うが、必

ずしも元の位置に戻るわけではない。また正午～PM3時には一部の雄による散発的な占有行動のあと、3:00～5:30には再び積極的な活動が始まる。この時の活動域は午前よりも広く、また翔び方は緩やかである。

一方、曇天時は不活発で晴天時のような活動サイクルはみられず、また雨天では行動せず葉裏や葉の間に静止する。これに対し雌は終日、不活発で、強い日差しを避けて食樹の下枝あるいは低木の葉上や下草などに止まることが多い。

#### 食樹ナラガシワについて

ヒロオビミドリシジミの分布が極限する理由は、これまで多くの人により論議されてきたが、本種が国内を含め、食樹をブナ科のナラガシワ一種に限ることも、要因の一つに数えられよう。そこで、この樹木について少し書いておきたい。

本種はブナ科の夏緑広葉樹として、その分布域は一般の認識より遙に広く、北は岩手・秋田など東北地方の北部から、南は鹿児島に至る広範な地域に生育するが、自然状態では近縁のブナ・ウラジロカシ・シラカシなどのように「純林」を形成することはなく、コナラ・クヌギ・クリ・アベマキ等、他の高木類と共に「雑木林」を形成するタイプとされる。事実、県内の各地を訪れても単独で樹林を形成する例は無かった。

なお西播地方の雑木林は古来よりタタラ製鉄に欠かせぬ薪炭用資材として大量に使われ(鋼2tを得るのに約1haの雑木林が必要)、旧くは奈良時代から約10～30年周期の伐採が続いた。やがて製鉄が下火になると、次には赤穂の製塩用薪炭林、更には家庭用や工業用燃料として用いられてきたが、化石燃料への切替えと共に造林熱が盛んとなり、この影響で次第に自然林が消え失せつつあるのが現状である。

## 県下の記録

県下でこれまでに記録のある産地を参考資料<sup>2)</sup>で調べた結果は以下の如くである。なお今回は地名が不確か(佐用町の三原と渋谷、上月町大益)或いは生息が疑問視されている産地(淡路島)は対象から除いている。

## \*摂津

猪名川町：上阿古谷・仁部・雨森山・三草山

川西市：笹部

## \*西播

姫路市：林田町六九谷・林田町松山

安富町：塩野

一宮町：福中・井ノ内

山崎町：青木・蟹ヶ沢

新宮町：牧・相坂

相生市：矢野町瓜生・矢野町小河・三濃山・

三濃山山麓

上郡町：大富・野桑・野桑寺・富増・三濃山

・大杉野・大杉野寺・三濃山西南山麓

佐用町：上石井・下石井・海内・青木・若洲

・吉福・山田・福次・大島・中の原・水根・奥海・桑村

南光町：船越・船越寺千種川上流・下三河・東徳久

三日月町：春哉・弦谷・弦谷川流域・三日月・法谷寺

上月町：才金・大益・中山・下秋里・上秋里

・秋里寺・秋里川沿い・早瀬・早瀬寺・下上月・金屋・福吉・福中・佐用川流域・久崎・(佐用郡久崎村)

## \*但馬

日高町：栃本・鶴岡・大岡山

出石町：榎見

温泉町：桐岡

朝来町：土肥 和田山町：野村

八鹿町：小佐

## 観察事項

1) 観察地域、時期、天候、時間帯

ヒロオビミドリシジミ成虫の生息環境と生態を観察するため'97年の6月初旬～7月初旬にかけて計5回、県下で比較的ナラガシワ林の残る西播地方(佐用及び上月町)を単独調査した結果が、下のデータである。

年月日	天候	採集・観察	地名
1997-06-07	晴	未発見	佐用町日野
" "	"	"	上月町中山
" "	"	"	" 上土井
" "	"	"	" 尾崎
1997-06-14	晴	1♂	# 佐用町大塚
" "	"	1♂他	# " 日野
" "	晴～驟雨	3♂他	* 上月町中山
" "	晴	1♂他	# " 上土井
" "	"	未発見	" 尾崎
1997-06-21	晴	1♂他	佐用町日野
" "	"	2♂ 1♀他	* 上月町中山
" "	"	♂追飛目撃	" 上土井
1997-06-29	晴～小雨	2♂ 1♀他	* 上月町中山
" "	晴	未発見	* " 尾崎
1997-07-05	晴	未発見	佐用町大塚
" "	"	目撃(2♀)	上月町中山
" "	"	目撃(1♀)	" 上土井
" "	"	未発見	" 尾崎

注 #印：今回の調査で発見した新産地

\*印：ウラジロミドリシジミの生息が確認された産地

観察に訪れた時期は本種の発生初期から最盛期を経て発生が終わるまでの約1ヶ月であったが、何れの地でも食樹となるナラガシワは少なく、また幹の細い若木が多数を占めていた。このためか本種の観察頭数は極めて少なく、調査は容易ならざるものとなった。

なお、今回の主たる観察地は比較的発生数の多い上月町中山に置き、ここでは成虫の活動時間帯とみられるAM8:30～PM6:00までを観察にあてた。

この時の天候は概ね晴れであったが、時には夕

方の降雨にも見舞われ、その内の一回は曇り～小雨～驟雨と目まぐるしく天候が急変し、雨を避けようとして、必死で隠れ場所を探す本種の姿を観察することも出来た。

さて、上月町で観た本種の午前の活動はAM9:30前後に始まったあと 11:30頃までは比較的敏捷な動きが見られた。しかしながら、その後は時おり他の蝶や昆虫の刺激を受けて追飛する程度にまで弱まり、再び活発化したのはPM2:30頃から5:30までの時間であった。

なお、本種を確認したのは5箇所、そのうち西と南の斜面でそれぞれ2箇所、更に東斜面でも1箇所、生息地を確認している。

2) 翅の輝きと色調

佐用及び上月の各地で得られた本種の雄、それぞれの翅表の輝きと色調を見比べてみると、採集地の違いに係わりなく、個体毎の翅の輝きと色合いは種々に異なっており、中にはアイノミドリシジミに近い金緑色の明るい輝きを持つタイプから、オオミドリシジミの様に鈍くくすんだ青緑色の弱い輝きを放つものまで、変異の幅はすこぶる大きいものであった。

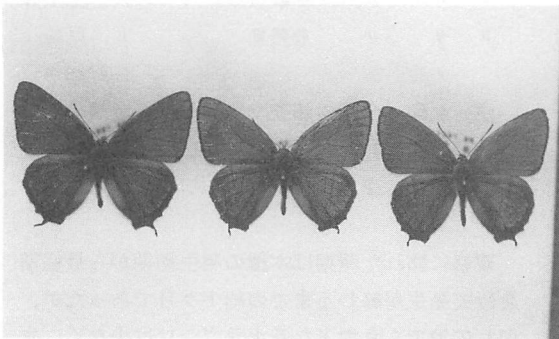


写真1 ヒロヘミドリシジミ雄の翅表  
翅の色調は左からオオミドリ型(中山産)・アイノ型(中山産)・ヒロヘ型(大塚産)

観察結果より

1) 生息環境と活動の性向

参考資料<sup>9)</sup>によれば、「本種の生息地は西～南

斜面のナラガシワ林」とあるが、なぜそれほどまで斜面の向きに拘わるのか、まずはその理由を探ってみることにした。

今回、本種を確認した場所は4地域5箇所(上土居では2箇所)で、そのうち西と南の斜面がそれぞれ2箇所であったが、このほか意外にも東斜面で1箇所、生息が確認された。そこで、次に県内の幾つかの記録地を選び同好諸氏に産地の状況を問い合わせたところ、筆者のデータを含む西播地方で17箇所、但馬地方では4箇所の状況を掴むことが出来た。これらを「斜面の向き」を切り口に整理し直したのが下の表である。

	西播地方	但馬地方
西	三日月町/春哉 佐用町/内海・青木・日野 上月町/上土井(1)	—
南 西	上月町/中山	—
南	姫路市/林田町六九谷 上郡町/大富・野桑 上月町/上秋里・下秋里 佐用町/大塚	日高町/栃本 鶴岡 大岡山 八鹿町/小佐
東	佐用町/下石井・若洲 上月町/上土井(2)	—
北 西	一宮町/福中 新宮町/牧	—

表1. ヒロヘミドリシジミが生息する斜面の向き

この表を見ると、本種の活動エリアは明らかに「西～南斜面」を中心としたものであるが、僅かに「東斜面」付近でも行動している事がわかる。尤も、筆者はこれまで「本種の日周活動と太陽との関係、



あるいは移動性」に関する報文を目にしたことがなく、今回は止むを得ず筆者独自の検討を進めることにした。

まず最初に、筆者が観察した本種雄の活動パターンを思い出していただきたい。これによると、午前の行動はAM9:30頃から昼近くまで続いたあと午後には一時活動が弱まり、その後はまたPM2:30～5:30に再び活発化する「日中行動型」で、また活動サイクルは「二山型」を示している。

一方、西播地方の一日の日照時間は、成虫の発生時期となる6月の日の出が凡そAM4:50、また日没はPM7:10頃で、その間の14時間余りが日照時間帯である。そこで、上に述べた本種の活動時間と太陽の動きから、「ヒロオビが好む斜面の傾向」を見るため、図1を作成してみた。

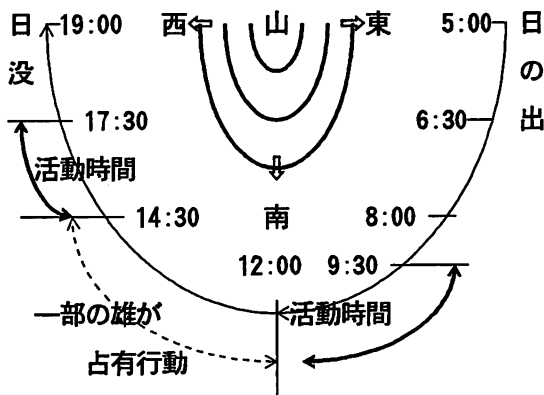


図1. 生息地の日照変化とヒロオビの活動傾向

この図で判るように、本種の活動は日の出から凡そ4時間半後によく始まるが、そのときの太陽は南南東あたりまで来ており、また本種が活動を終える頃の太陽は西南西よりも西の位置に移動している。これらの事から、本種は太陽の位置が「南南東から西南西」までのあいだ活動する種と言うことになる。言い換えれば、この間の活動に欠かせない日照を常に確保できる斜面は「南南東から西南西」の範囲にあると推定できよう。

一方、このほか東の斜面でも少数が観察されて

おり、この事実は、先に述べた推論では凡そ説明がつかない。そこで、新たにヒントとなる文献を求めたところ、資料<sup>9)</sup>の中に参考となる報文の要約をみつけた。それによると「日照」に伴う「照度や温度などの変化」が蝶の行動を決める主要な条件としており、これを衝にすれば、朝の太陽が一面に降り注ぐ「東斜面」は当然ながら有力な活動場所になろうし、またこれとは逆に、午後になればなる程「東斜面」は条件の悪い場所となるだろう。そういえば今回、西播の各地で観察した際に、陽の当たらぬ「朝の西斜面」で本種を観察した事はなく、また山の陰となる「午後の東斜面」でも同様に、全く本種の姿を見ずに終わった。これを単なる偶然とみる向きもあるが、あまりにも理に叶った行動であり、筆者はこれを必然的な行動と考えておきたい。

従って、この考えを基にするなら、東斜面に留まる限り午後の日照確保は困難とみた本種は、本能的に「移動」を決意し、その先を「南から西の斜面」に定めたのではないか。こうしてみると東斜面で観察したケースは「朝の最適な日照と環境を求めて、東斜面に出現」した例であり、その後は「刻々と変化する太陽の向きや角度を敏感に読み取り、次第に南から西の斜面に移動」した例と見て差し支えなからう。

即ち、蝶にとって「太陽」はその日の行動を左右する最も重要なファクターであり、山の斜面に生息する場合、本種は「太陽の動きにつれて東寄りから南面を経て、更に西斜面へと移動」する種である可能性が強い。

また平地のナラガシワ混交林に生息する場合も同様に、「樹林帯の東面から南面・西面へと、活動の場を順に変えていく」のではないか。

最後に、今回は「日照時間」と共に重要な環境因子である「一日の気温や照度の変化」も、可能な限り図1.に取り込もうと努めた。しかしながらこの種のデータは何処の气象台にも記録がなく、これらを加えた多面的な検討は結局、諦めざるを得なかった。

## 2) 翅の輝きと変異

一般に *Favonius* 系のゼフィルスは成虫の斑紋による近似種との識別が困難で、クロミドリシジミの雄とウラジロミドリシジミを例外にして、雄の緑色に輝く翅の構造色だけで分類するのは殆ど不可能とされるが、その中であって、本種やオオミドリシジミの色合いはそれぞれ独特の色調を帯びており、この2種に限っては、近似種から比較的容易に識別できると言われてきた。

しかしながら、今回得られた本種雄の個体ごとの輝きと色調の変異は、写真1に示すように、思いのほか大きいものであった。そこで、本種の翅を特徴付ける「構造色」の発色メカニズムと個体変異に係わる文献の調査に着手したが、あいにく業務の多忙で作業が進まぬまま時間切れに終わり、本件は今後の課題に残すことになった。

従って、今言えることは唯一、「雄の翅表に関する限り、種としての色調の安定度は、決して高くはない」ということである。

## 終わりに

近頃つくづく思うのだが、明石市の郊外に育ったせいかな自然への愛着は人一倍強いものがあり、中年となった今でも、フィールドで蝶や豊かな自然に出会うたび、毎回新鮮な驚きを味わう気がしている。

そこで感じ、また興味を持つテーマに考えを巡らし、文献や諸先輩の体験を交えて、自分なりに纏めることを始めた。この取り組みから3年を経たが、いつもながら苦労させられるのが、「文献調査と必要な情報の確保」である。近年、情報への認識が高まるにつれ、誰でもが自由に目指す情報にアクセス出来る新タイプのメディアが整いつつあり、インターネットなど、居ながらにして世界各地の情報が得られる時代に入った。

しかしながら、こと蝶に関する限り、「まだまだ先の夢物語」という他なさそうである。

そうした中、今回は岡山の難波通孝氏をはじめ兵庫県の広畑政己・木下賢司・近藤伸一・相坂耕作の各氏、更には伊那市の永幡嘉之氏に県下各地

の状況やご意見を伺い、本稿を纏める上で大いなる励ましとなった。また植樹のナラガシワについては、神戸在住の古池末之氏のお宅で有益なお話を伺うことも出来た。ここに深謝の気持ちと共に記しておきたい。

## &lt;参考文献&gt;

- A) 山本広一(1953) 佐用郡久崎の蝶(2) 兵庫生物 2(3): 155~156.
- B) 福田晴夫ほか(1984) 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅲ) 保育社
- C) 藤岡知夫(1972) 図鑑日本の蝶 ニュースイェンス社 : 241~253
- D) 広畑政己・近藤伸一(1996) 兵庫県産蝶類分布資料(7) きべりはむし24(2): 45~49.
- E) 蝶研出版編集局(1989) スーパー採卵術 蝶研出版: 152~153
- F) 福田晴夫・高橋真弓(1988) 蝶の生態と観察 築地書館: 19~25.
- G) 兵庫県生物学会(1976) 新・兵庫の自然 神戸新聞出版センター: 162~165
- H) 大東康人(1996) 但馬の蝶に関する若干の知見と推論—ヒマツミドリシジミ— IRATSUME(20): 37~40.
- I) 大東康人(1997) 九州の蝶/観察と知見—オカシジミとオウチキソビヨウモン— てんとうむし(11): 47~54.
- J) 大東康人(1997) 兵庫県の蝶/観察と知見① オシヤハセセリ、ミヤマチャハセセリ IRATSUME(21): 34~38.
- K) 大東康人(1997) 兵庫県の蝶/観察と知見② —カハチチョウ、ツマクモビヨウモン— きべりはむし25(2): 48~53.

# 兵庫県のギフチョウ覚書

唐土 洋一

## はじめに

ギフチョウについては、愛好者が多いにもかかわらずいまだ説明されていない事が多々あるようです。カンアオイ類とギフチョウとのからみがいまだに解決されていないこともその一つです。

### 1. 最近の状況

市町単位で収集している人は結構いるけれど、その生活史等まで踏み込んで調べている人は数少ない。熱心なチョウ屋さんは食草であるヒメカンアオイまたはミヤコアオイの自生地を前もって調べておき、チョウが発生する頃に訪れかなりの新産地を見つけていると聞く。生息地を公表すれば乱獲の憂き目に会うとの懸念も強く新産地の公表は差し控えられる傾向にある。反面、開発等により産地の消失が見受けられるとともに、放チョウ等による遺伝子汚染も見られるようになり、分布調査がより困難になっている。

### 2. カンアオイ類の分布概要

兵庫県下のカンアオイ類の分布調査に関していえば、地域により偏っている。特に、丹波地方と県南西部の状況が不透明である。県下にはヒメカンアオイ・ミヤコアオイ・サンインカンアオイ・ナンカイアオイ・ウスバサイシン・フタバアオイといった6種類のカンアオイ類が記録されている。播磨地方のギフチョウはヒメカンアオイ、但馬地方のギフチョウはサンインカンアオイとウスバサイシン、丹波地方のギフチョウはヒメカンアオイとミヤコアオイを食しているという。

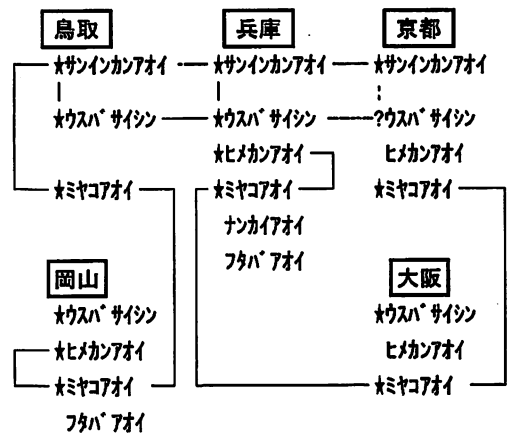
### 3. 兵庫県および近隣におけるギフチョウの食草

	ミヤコアオイ	サンインカンアオイ	ヒメカンアオイ	ウスバサイシン
鳥取県	◎	◎	—	△
岡山県	◎	—	○	△
兵庫県	○	◎	◎	△
京都府	◎	◎	—	?
大阪府	◎	—	—	△

### 4. 兵庫県からみたギフチョウ分布拡大の経路

ギフチョウはどこからきたか、西からにしる東にしる県下を通って行ったことは間違いなからう。ギフチョウが食しているカンアオイの仲間を隣県とのからみでみれば、鳥取県とはサンインカンアオイとウスバサイシン、岡山県とは特になし、京都府とはミヤコアオイとサンインカンアオイ、大阪府とはミヤコアオイといったところに接点がある。

これらを図式化してみると(★印はギフチョウの食草)



5. ヒメカンアオイは本来の食草か？

県下におけるヒメカンアオイの自生地は第4期更新世の地質域に多く、ギフチョウの生息域ともほぼ一致している。丹波地方にヒメカンアオイ喰いのギフチョウがいたということは余り知られていなかったようだ。かつては、ギフチョウの豊富な地域であったものと想像出来るがスギ・ヒノキ等の植林化に加え、開発等による環境の改変によって衰退、絶滅への道をたどっていった。岡山県北東部にも、ヒメカンアオイ喰いのギフチョウがいたようであるが、食草であるヒメカンアオイは今でも多く自生しているが、なぜかチョウは生息していないと聞く。

各地のギフチョウによる食性実験の結果、ヒメカンアオイが最も好まれる食草であることは否めない事実である。しかし、単に好まれるからという理由だけでギフチョウ本来の食草がヒメカンアオイだと決めてつけてよいものだろうか。サンインカンアオイ、ナンカイアオイ共にカントウカンアオイ節に分類されているが、ヒメカンアオイ同様によく食べる。ナンカイアオイは四国・淡路島に自生しているが、ギフチョウはいない。こういったことからしても、嗜好面からのみ攻めるというのにも一抹の疑問が残る。単純に地史がらみでみると、ウスバサイシンよりサンインカンアオイ、ミヤコアオイのいずれかを経てより好適な食草であるヒメカンアオイ節にたどり着き、西へ東へと勢力範囲を拡大しその地域のカンアオイ類に適応していったともいえる。県内産カンアオイ類の接点のみをみるとウスバサイシンとサンインカンアオイの分布は但馬地区では重なっている。そして、サンインカンアオイとミヤコアオイが最も近い距離にあり、丹波地区では一部繋がっている。ついで、ミヤコアオイとヒメカンアオイが近い距離にあり、丹波地区ではヒメカンアオイ・ミヤコアオイ・サンインカンアオイの3種が自生しているのに注目したい。

6. カンアオイ属3種、(現在の)生育地の比較

ミヤコアオイ・サンインカンアオイはスギ・ヒ

ノキ等の植林地の林縁にパラバラと見られ、大きな群落を形成しているケースは少ない。それに比し、ヒメカンアオイは大きな群落を形成し、あたり一面がヒメカンアオイで満ちているというところもあり、総じて明るい平坦地に多い。食草としての比較をすれば、当然ヒメカンアオイの方が有利で死亡率も当然少ないものと想定される。

丹波地区の食草調査をして感じたことは、いずれもスギ・ヒノキ等の植林化によって衰退していったことは間違いない。ある時点に比し、今日の状況での調査は当然無理が生じてき、かなりの推論に頼らざるをえない。従って、チョウの個体数が今多いからとか少ないとって食草の適否を判定するのは間違っているのかもしれない。

7. 丹波地方におけるカンアオイ属の分布

《多紀郡》	ミヤコアオイ	ヒメカンアオイ	サンインカンアオイ
今田町	—	◎	—
篠山町	◎絶滅?	—	—
丹南町	◎絶滅?	◎	—
西紀町	◎絶滅?	—	○

《氷上郡》	ミヤコアオイ	ヒメカンアオイ	サンインカンアオイ
青垣町	○	—	△情報
市島町	○	—	?
柏原町	◎絶滅?	◎絶滅?	—
春日町	◎絶滅?	◎絶滅?	?
山南町	—	?(文6, 35)	—
氷上町	◎絶滅?	△(文31)	—

- ◎印 : ギフチョウの記録あり
- 印 : 記録のみ
- △印 : 過去の記録
- ? : 不明

上記産地の標本等の行方も探してみたが、氷上郡下第1号の標本が県立柏原高等学校に、西紀町産ギフチョウの標本が一宮神社の団野薫官司が保管されていたぐらいで、殆どわからなかった事を付記しておく。

## 8. サンインカンアオイ喰いギフチョウの飼育例 (城崎郡日高町三川山産)

## ① 食草: 洲本市先山産 ナンカイアオイ

産卵	孵化: 3頭	1眠起	2眠起	3眠起	4眠起	蛹化: 3頭
* 1993年5月7日	5月19日	5月23日	5月27日	5月30日	6月4日	6月15日
卵期	1齢期	2齢期	3齢期	4齢期	5齢期	計
12日	4日	4日	3日	5日	11日	27日

\* ヒメカンアオイに産卵させ、孵化時に幼虫を移動させる。

<参考> 食草: 洲本市先山産 ナンカイアオイ <-?産 ヒメカンアオイ喰いギフチョウ>  
.....1980 尾崎 勇

1 齢	2 齢	3 齢	4 齢	5 齢	蛹化	計
5月13日	5月17日	5月21日	5月25日	5月28日	6月8日	26日

## ② 食草: 朝来郡生野町柘原産 サンインカンアオイ

産卵	孵化: 8頭	1眠起	2眠起	3眠起	4眠起	蛹化: 8頭
1993年5月5日	5月17日	5月21日	5月25日	5月29日	6月2日	6月13日
卵期	1齢期	2齢期	3齢期	4齢期	5齢期	計
12日	4日	4日	4日	4日	11日	27日

## ③ 食草: 揖保郡揖保川町袋尻産 ヒメカンアオイ

産卵	孵化: 6頭	1眠起	2眠起	3眠起	4眠起	蛹化: 6頭
1993年5月5日	5月17日	5月21日	5月25日	5月29日	6月2日	6月13日
卵期	1齢期	2齢期	3齢期	4齢期	5齢期	計
12日	4日	4日	4日	4日	11日	27日

<参考> 食草: 西脇市産 ヒメカンアオイ<朝来郡生野町産サンインカンアオイ喰いギフチョウ>  
.....1980 尾崎 勇

1 齢	2 齢	3 齢	4 齢	5 齢	蛹化	計
5月12日	5月18日	5月25日	5月30日	6月5日	6月14日	33日
5月12日	5月18日	5月26日	5月31日	6月7日	6月17日	36日

## ④ 食草: 氷上郡柏原町上小倉(鐘ヶ坂)産 ミヤコアオイ

ヒメカンアオイに産卵させ、孵化時に幼虫をミヤコアオイに移動させる。食いつかず、シヤレ内をはい廻り餓死した。

(補足) ヒメカンアオイ喰いギフチョウの飼育をミヤコアオイでやっている西田英之氏によれば、孵化時のエサの与え方にコツがあるとのこと。

<参考> 食草：龍野市産 ミヤコアオイ<朝来郡生野町産サンインカンアオイ喰いギフチョウ>  
 ……1980 尾崎 勇

1 齢	2 齢	3 齢	4 齢	5 齢	蛹化	計
5月14日	5月20日	5月28日	6月4日	6月15日	6月25日	42日
5月15日	5月21日	5月28日	6月5日	6月17日	6月28日	44日

サンインカンアオイ喰いギフチョウにミヤコアオイを与えた場合、食いつき状態が思わしくなかった。山陰地方の食草分布からみれば、サンインカンアオイとミヤコアオイの結びつきは強いものと思っていたが、期待外れに終わった。いずれ、機会をみてこの疑問点をつぶしてみたい。

注) 食性実験の結果は、飼育する人によりバラツキもみられ、地域を同じくする産地のチョウであっても食草の好、不適が出ているので、多くのデータを集める必要がある。

さいごに

県下のギフチョウが何を食べ、どういった経路で分布を広げていったかはいまだ明確でない。今世紀中にこの問題が解明出来ないものかと思ひ、あえてこの拙文を綴った。

末筆ながら本稿を草するにあたり、開田齊・田野薫・仲井啓郎・西田英之・細見末雄・故松山雅郎・山下剛史・山本義丸の各氏よりご支援、ご教示等を頂いた。また故尾崎勇氏の文献よりは飼育データを一部引用させて頂いた。厚くお礼申し上げます。

<参考文献>

- 1) 山本広一(1967) 兵庫県下のギフチョウについて 兵庫生物 5 (3/4)241-247, 232.
- 2) 高橋 昭(1968) ギフチョウとその食草の分布 昆虫と自然 3 (4)4-12.
- 3) 白水 隆(1969) ギフチョウ属をめぐる諸問題 昆虫と自然 4 (4)2-3.
- 4) 山本広一(1969) 全国ギフチョウ属の分布(2) 兵庫県 昆虫と自然 4 (6)34.

- 5) 建部恵潤(1975) 兵庫県産カンアオイ属の検討 兵庫生物 7 (1)5-8.
- 6) 尾崎 勇(1979) 兵庫県のギフチョウ ひろおび(4)26-34.
- 7) 渡辺康之(1979) 兵庫県・武田尾周辺のギフチョウ 昆虫と自然14(2)9-15.
- 8) 多田 豊(1980) 本州西部におけるギフチョウとその食草の分布 昆虫と自然15(5)52-56.
- 9) 兵庫県自然保護協会(1980) 座談会・丹波の自然と蝶を語る 兵庫県の自然 9 (2)10-15.
- 10) 尾崎 勇(1980) ギフチョウの食草カンアオイ属 *Heterotropa* の違いによる成長差 てんとうむし 6, 34-35.
- 11) 多田 豊(1981) ミヤコアオイを中心としたギフチョウ属の食性 昆虫と自然16(12)20-24.
- 12) 藤澤正平(1982) ヒメカンアオイとギフチョウ(I) 昆虫と自然17(13)16-20.
- 13) 藤澤正平(1983) ヒメカンアオイとギフチョウ(II) 昆虫と自然18(1)6-9.
- 14) 尾崎 勇・高嶋 明(1984) 兵庫県明石地方のギフチョウ 昆虫と自然19(2)10-15.
- 15) 藤澤正平(1987) ギフチョウ属は西から日本に飛来した 昆虫と自然22(4)27-31.
- 16) 広畑政巳・近藤伸一(1989) 兵庫県産蝶類分布資料(5) ひろおび(8)1-8.
- 17) 近藤伸一(1991) 兵庫県北部のギフチョウの生活 昆虫と自然26(4)30-36.
- 18) 木下賢司(1991) ギフチョウの新産地づくりの試み 昆虫と自然26(11)25-30.
- 19) 近藤伸一(1992) 兵庫県におけるギフチョウの分布とミヤコアオイ 昆虫と自然27(5)11-15.
- 20) 三上秀彦(1994) 日本で最初にギフチョウが消えた街 蝶研フィールド 9 (3)4-7.
- 21) 新川 勉(1996) ギフチョウはどこからきたか 昆虫と自然31(4)18-21.



- 22) 山本義丸(1958) 兵庫県氷上郡昆虫目録 県立柏原高等学校生物教室・柏原。
- 23) 神戸新聞社学芸部(1974) 兵庫探検・自然編 神戸新聞社・神戸。
- 24) 日浦 勇(1978) 蝶のきた道 蒼樹書房・東京。
- 25) 藤澤正平(1983) ギフチョウとカンアオイ ギフチョウ研究会・飯山。
- 26) 日高敏隆他(1984) 日浦勇著作集 大阪市立自然史博物館友の会・大阪
- 27) 渡辺康之(1985) ギフチョウ 文一総合出版・東京。
- 28) 浅沼昌平他(1986) 岡山県のチョウ 倉敷市自然史博物館・倉敷。
- 29) 遠山 豊他(1989) 北摂の蝶 大阪昆虫同好会・宝塚
- 30) 兵庫県生物学会但馬支部(1990) 但馬の自然 神戸新聞総合出版センター・神戸。
- 31) 細見末雄(1992) 丹波草木誌 丹波自然友の会・福知山。
- 32) 山陰むしの会(1994) 山陰のチョウたち 山陰中央新報社・松江。
- 33) 丹波自然友の会(1995) 丹波の自然 神戸新聞総合出版センター・神戸。
- 34) 難波通孝(1996) 岡山の蝶 山陽新聞社・岡山
- 35) 渡辺康之(1996) ギフチョウ 北海道大学図書刊行会・札幌。

## チュンペリーの見た日本の昆虫

大貝 秀雄

昆虫愛好家の間で植物学者チュンペリー(Carl Peter Thunberg, 1743-1823)の知名度は必ずしも高くはないと思われる。リンネの直弟子であった彼はアフリカ希望峰での3年間にわたる学術探検により新属新種の多数の植物を発見したのち、ジャワを経て1775年、当時鎖国の最中であった日本にオランダ商館医の資格で入国した。目的は日本に産する生物、特に植物相の解明であった。

長崎ではほとんどの時間を狭い出島に幽閉されて不自由な思いをしながらも、あらゆる手段を講じて植物標本の収集に努めた。その様子は彼の書いた旅行記(日本語版は山田珠樹による抄訳「ツンベルグ日本紀行」)に詳しく述べられている。そして翌年3月4日から6月25日までオランダ商館長の江戸参府の旅に随行する機会を得た。この旅もほとんどは船か駕籠の中での移動を強いられたが、それでも彼にとって日本の植生に関する理解を深める上で絶好の機会であった。特に箱根の山越えではかなりの行程を駕籠から降りて歩くことができ道中で多くの植物を採集したという。また途中

で宿泊した宿屋の庭や江戸における逗留先での採集機会も少なくなかったに違いないし、江戸からの帰路は往路に比べてずっと自由を許されたと彼は書いている。同年12月3日に日本を出港した彼は、故国スウェーデンに戻った後、精力的に採集品の研究を進め、その集大成としての“Flora Japonica(日本植物誌)”ほか多くの論文を残した。

このようにしてなされた研究成果によって彼は日本の植物学の基礎を築いた学者と評価され、日本のリンネとも呼ばれている。しかし一方で、彼は動物学にも深い造詣を示して多数の収集品を日本から持ち帰り自ら研究論文を発表している。例えばハンミョウ *Cicindela chinensis japonica* Thunberg(以下T.と略す)1781, リンゴカミキリ *Oberea japonica* (T.1787), ヒメカメノコテントウ *Propylea japonica* (T.1781)., ヤマトシリアゲ *Panorpa japonica* T.1784, ヘビトンボ *Protohermes grandis* (T.1781)などは日本で採集された標本に基づいて彼自身が記載した昆虫として代表的なものである。また彼の旅行記には彼が日本で確認したとい

う昆虫97種のリストが他の動物名とともに記されている。さらに晩年になって“Fauna Japonica(日本動物誌)”の名で2冊の冊子が刊行され、そこでは先のリストに加え、あらたに16種の昆虫の名が挙げられた。

これら種名リストに出てくる昆虫は分類群では鞘翅・鱗翅・半翅・双翅の4目が大多数を占めている。しかし他にもチャバネゴキブリ・ヒトノミ・ヒトジラミ・シミなどの名も認められ、彼が確認することのできたありとあらゆる昆虫または昆虫的なもの(ヤスデやカニも昆虫の項目に入れられている)が網羅されているように見受けられる。しかしひとつ困った問題があった。それは彼が記録した学名が、現在我々の知っている虫のどの種に対応するのか判断のつかないケースが余りにも多い点である。なぜ判断できないかということ、例として2種のみがリストアップされているトンボの場合で説明してみよう。

2種のトンボの名は *Agrion puella* と *Agrion virgo* である。まず *Agrion* というのはもともと均翅類全体を指す属名としてリンネが設定したものであったのだが混乱の歴史があって現在は廃止されている。当時の *Agrion* は今では多くの科属に分割され、*Agrion puella* はイトトンボ科の *Coenagrion puella* (L.) に *Agrion virgo* はカワトンボ科の *Calopteryx virgo* (L.) に変わっている。そしてこれら両種はどちらもヨーロッパの普通種ではあるが日本には全く産しないものなのである。つまりチュンペリーは彼が立ち寄った日本のどこかで或る種のトンボを見て、それを故国で彼が見知っていた別のトンボと同一種であると信じてしまったのに違いない。ただ幸いなことにはトンボの場合には比較的情報が豊富であるためヨーロッパ産の種の名前から日本でチュンペリーが見て誤同定したトンボの種名をほぼ確実に特定することができる。

答えを述べると *Coenagrion puella* に相当するのはセスジイトンボ *Cercion hieroglyphicum* (Brauer) であり、*Calopteryx virgo* の方はハグロトンボ *Calopteryx atrata* Selys に違いなかったと思われる。彼の日本での行程が北は江戸までであったという条件を考慮すれば、セスジイトンボ

の他にオオイトトンボ・ムスジイトンボの可能性もあるし、*Calopteryx* の種としてアオハダトンボも有力候補であり得る。実際、かつては日本のアオハダトンボの学名に *Calopteryx virgo* (L.) が用いられていた時代もある。けれども彼の行動範囲が極端に限定されていたことを重視すれば、先に示した二つの種が、それらが類似種群の中でも特に普通に分布するものであるが故に、極めて妥当性の高いものだと考えるべきであろう。

彼の昆虫の記録は大体そのようなものであって解説には骨が折れる。彼が新種と認めて命名した昆虫の場合はまだましである。それでも彼が日本からの帰路に立ち寄ったジャワ島・セイロン島などでの採集品を日本産と誤認して *japonica*・*japonicus* の小種名をつけてしまったと思われるケースも少なからず認められるので注意が必要である。

しかしながら筆者にはチュンペリーの昆虫に関する業績をけなす意図は毛頭ない。現在の学名との対応が困難であるという点は、彼の記録に限った問題ではないし、ましてや彼になんら責任があるわけではない。むしろ彼は当時のレベルとしてできる限りのことを極めて誠実に実行したのだったに違いない。また長距離の航海それ自体がまだ生命を脅かす危険に満ちていた時代にあって7年に及ぶ大探検旅行をなし終えた彼の荷物の中にくつつかの置き間違いか勘違いがあったとしてもやむを得なかったのではあるまいか。更につけくわえるならばチュンペリーの日本滞在中、特に出島の外にあつては彼は常に多数のお供の日本人の役人達につきまとわれていたのであって、捕虫網など携行できるはずもなく、素早く飛翔するトンボやチョウを容易に捕らえることが可能であったとは信じられない。おそらく止まっている姿を見ただけで同定・記録せざるを得なかった種が大部分だったのではなかろうか。

次にチュンペリーの Fauna Japonica 正統二篇中に記されている昆虫のうち比較的“同定”の進んでいるチョウの一覧表を挙げ (Table 1、トンボも併記)、そこに含まれている種について簡単に解説して本稿を閉じることにしたい。

蝶とみなされるものは全体で11種あり、すべて

が *Papilio* の属名で記されていた。2種のトンボがともに *Agrion* とされていたのと同様、リンネの時代にあらゆる蝶は *Papilio* の1属に含められていたらしい。したがってチュンベリーが見た種を推理するに当たっては当時から既知種であったことと原記載の属名に *Papilio* が使用されていたことを重視した。

まず *Papilio argiolus* をルリシジミ、*P. rapae* をモンシロチョウ、*P. Hecate* をキチョウ、*P. Phlaeas* をベニシジミ、*P. Cardui* をヒメアカタテハとそれぞれ現在の学名通りに判断することに特に問題はないと思われる。その主な理由は、これらの種がどれも現在、少なくとも西日本の低地では普遍的に見られる点にある。たとえばルリシジミについて考えると、本種と同様に普通種であるヤマトシジミやツバメシジミもチュンベリーが観察した可能性は極めて高い。そしてヤマトシジミを見てルリシジミと誤同定してしまったということも十分に考え得ることではある。しかしたとえそれが事実であったとしても本物のルリシジミを彼は必ず見ていたはずであり、それをも彼はルリシジミと認識していたに違いない。したがってチュンベリーの記録した *P. argiolus* はルリシジミを指していると結論づけられる。

*Papilio C. album* をシータテハ *Polygonia c-album* (L.) ではなくキタテハ *Polygonia c-aureum* (L.) とみなしたのは *Agrion virgo* をハグロトンボとしたのと同様の考え方による。即ち、より普遍的に分布しチュンベリーの目につきやすかったに違いないキタテハ、それも秋型をシータテハと誤同定したものと思われる。春先の長崎近郊の丘陵地で漸く外出を許可されたチュンベリーが腰を屈めている。その目の前に越冬から醒めた一匹のチョウが羽を拡げて体を暖めている。手を延ばせばたやすく捕らえられそうに見えるのに、それは一瞬早くビュッと飛び去るのだ。そして溜息をつきながらも喜びに輝いた顔の彼の姿が目に見えようである。その時に彼の前にいた蝶は西日本の低地には分布しないシータテハであったはずがない。外見はそれとよく似たキタテハの秋型だったはずだ。

次の *Erionata thrax* (L.) はフィリピンなどに分布する大型のセセリチョウだが、それに比べれ

ばかなり小型で九州以南に産するクロセセリとよく似た斑紋をもつ。長崎近郊であれば彼がクロセセリを目撃した可能性は十分に想定できるので、当時リンネにより既に命名されていた東南アジアの蝶とクロセセリが同一種であると信じて彼がその名を記録に書き留めた可能性は高い。

*P. Proteus* を *Papilio protenor* のミススペルとみなすのは少々無理があるようにも思えるけれども、実はそれには裏付けがある。*P. Protenor* の記載は中国産の標本に基づいて1775年になされているが、その7年後には日本産亜種 *P. protenor demetrius* Stoll も記載されているのである。後者について江崎博士は「Thunbergの採集品でオランダの学者によって研究されたと推定される」と述べている。ところが事実はそのようではなかったらしい。チュンベリーの来日より更に80年以上前に彼と同様に医者として長崎出島に滞在し日本の動植物を採集したケンペル(E. Kaempfer, 1651-1716)の持ち帰った標本が後に *demetrius* と命名されたものであったようだ(猪俣1986)。チュンベリーは先人としてのケンペルには特に深い関心を持っていたようで、筆者は未見であるが、「ケンペル注解」という日本産の植物に関する著作も残している。このケンペルが採集した日本産クローアゲハの標本は Leiden に現存すると言われており、一方ケンペルの他の多くの収集品は大英博物館に収められている。日本から帰国したチュンベリーは1778年末から翌年1月にかけて大英博物館にあったケンペルの標本を調べる機会をもったことが知られているし、彼はまた Leiden にも訪れているので、どちらかの場所でケンペルのクローアゲハを実見した可能性もある。そうして自身が日本で目撃した種が、その標本と同一であることを確認したのだったかも知れない。少なくともその時点では日本産亜種 *demetrius* はまだ命名されてはいなかったのだ。

*P. Niphe* は後に *Argynnis niphe* (L. 1767) と改められ、更にその後 *Argyreus hyperbius* (L. 1763) ツマグロヒョウモンと同物異名であることが判明したものである。

*P. brassicae* は *Pieris brassicae* (L.) オオモンシロチョウである。この蝶は最近になって北海道と東北部に侵入・定着したと推定されるもので、

もちろんチュンベリーが日本でこれを見た可能性はない。ひとつの解釈としてスジグロシロチョウ夏型の誤同定ということも考えられなくはない。しかしながら今は詳述を避けるけれども別の問題点があり、ここでは本種が日本での実際の記録に基づいたものではなかった可能性が高いと言うにとどめておく。

順不同になったが最後に *P. Ascanius* についてコメントしておきたい。この名 (*P. ascanius* Sparrman, 1768) は現在用いられておらず、*Pachliopta aristolochiae* (Fabricius) ベニモンアゲハの忘れられた名 (nom. *oblitum*) である。しかしもちろん、当時の長崎近郊においてもベニモンアゲハが目撃されたとは信じられない。誤同定された可能性がある種はモンキアゲハとナガサキアゲハ位のものであろうが、翅斑や翅型の特徴からまずモンキアゲハ *Papilio helenus nicconicolens* Butler の春型であったと判断して間違いのないと思われる。しかし何と皮肉なことか。もしそれが仮にナガサキアゲハだったとすればそれこそ当時未記載であり、後輩に当たるシーボルトにより後年 *Papilio memnon thunbergii* von Siebold とチュンベリーの名をとって命名されることになった種であったのだ。結局チュンベリーは日本産の蝶を一種も命名することはなかった。

#### (付記)

Table 1 に示した種と同程度もしくはそれ以上に西日本の低地で普通に見られ、当然チュンベリーもまじかに接するチャンスがあったと思われるにもかかわらず記録されていない多くの種がある。例えばイチモンジセセリ・ナミアゲハ・ヒメウラナミジャノメ・コムシジなどである。またトンボならシオカラトンボやアカトンボ類 (*Sympetrum*)。これらの種を何故チュンベリーは記録に残さなかったのか、二通りの理由が考えられる。ひとつは目撃したものと非常に類似した複数の種が当時すでに既知であって、それらのうちどの種に相当するのか判断できなかったために記録しなかったケース。もうひとつは当時の既知種のいずれとも一致しない特徴を持つことに彼が気づき、未記載種であることを知ったけれども、標本を得ることが

できなかったがために敢えて記録に残さなかったケースである。どちらのケースであっても、これら記録の欠如という事実そのことがチュンベリーの博物学者としての誠実さを証明しているように思われる。

#### <参考文献>

- d'Aguilar, J. et al. (1986) A field guide to the dragonflies of Britain, Europe and North Africa. Collins, London.
- Leech, J. H. (1892-1894) Butterflies from China, Japan and Corea (復刻版)
- Smart, P.: 白水隆訳(1978) 世界蝶の百科. 秀閣社.
- Thunberg, C. P.: 山田珠樹訳注(1928) ツンベルグ日本紀行. 東京駿南社.
- Thunberg, C. P. (1822) Fauna Japonica. (ツンベリー研究資料, 1953中の複製).
- Thunberg, C. P. (1823) Fauna Japonica, Continuata. (ibid.).
- 猪俣敏男(1986) 大図録日本の蝶. 竹書房.
- 江崎梯三(1953) "ツンベリーと動物学" ツンベリー研究資料. pp9-16. 日本学術学会・日本植物学会.
- 環境庁(1995) 日本産野生生物目録. 自然環境センター.
- 白水隆(1997) "1996年の昆虫界をふりかえって, 蝶界" 月刊むし(315)3-7.
- 西村三郎(1989) リンネとその使徒たち. 人文書院.
- 日本蜻蛉学会編(1984) 波江: 日本蜻蛉圖譜. 日本蜻蛉学会.
- 浜田康・井上清(1985) 日本産トンボ大図鑑, 第2巻解説編. 講談社.

表 1. Fauna Japonica に記録された昆虫名と現在の学名の対照 (蜻蛉目および鱗翅目のうちチョウ類)

Fauna Japonica に記された名	左の名に相当する現在の学名	チュンベリーが実際に見たと推定される日本産の種 <sup>1)</sup>
Agrion puella Agrion vigo <sup>2)</sup>	<i>Coenagrion puella</i> (L. 1758) <i>Calopteryx virgo</i> (L. 1758) ヨーロッパアオハダトンボ	<i>Cercion hieroglyphicum</i> (Brauer, 1865) セスジイトトンボ <i>Calopteryx atrata</i> Selys, 1853 ハグロトンボ
Papilio argiolus	<i>Celastrina argiolus</i> (L. 1758) ルリシジミ	同左の日本産亜種 <i>C. argiolus ladonides</i> (de l'Orza, 1869)
Papilio rapae	<i>Pieris rapae</i> (L. 1758) モンシロチョウ	同左の日本産亜種 <i>P. rapae crucivora</i> (Boisduval, 1836)
Papilio C. album	<i>Polygonia c-album</i> (L. 1758) シータテハ	<i>Polygonia c-aureum c-aureum</i> (L. 1758) キタテハ (秋型)
Papilio Thrax	<i>Erionata thrax</i> (L. 1767) バナナセセリ属の種	<i>Notocrypta curvifascia curvifascia</i> (C. et R. Felder, 1862) クロセセリ (?)
Papilio Hecate <sup>3)</sup>	<i>Eurema hecabe</i> (L. 1758) キチョウ	同左 <i>E. hecabe</i> (L. 1758)
Papilio Proteus	<i>Papilio protenor</i> Cramer, 1775 クロアゲハ	同左の日本本土亜種 <i>P. protenor demetrius</i> Stoll 1782
Papilio Ascanius	<i>Pachliopta aristolochiae</i> (Fabricius, 1775) ベニモンアゲハ	<i>Papilio helenus nicconicolens</i> Butler, 1881 モンキアゲハ (春型)
Papilio Phlaeas	<i>Lycaena phlaeas</i> (L. 1761) ベニシジミ	同左の日本産亜種 <i>L. phlaeas daimio</i> (Matsumura, 1919)
Papilio Cardui	<i>Cynthia cardui</i> (L. 1758) ヒメアカタテハ	同左 <i>C. cardui</i> (L. 1758)
Papilio Niphe	<i>Argyreus hyperbius</i> (L. 1763) ツマグロヒョウモン	同左の日本産亜種 <i>A. hyperbius hyperbius</i> (L. 1763)
Papilio brassicae	<i>Pieris brassicae</i> (L. 1758) オオモンシロチョウ	??

1): 日本産種の学名は『日本産野生生物目録』によった

2): 『ツンベルグ日本紀行』では *virgo*

3): 『ツンベルグ日本紀行』では *hecabe*

## 北京へ毛猴を求めて

相坂 耕作

筆者は子供の頃から昆虫に興味を持ち、趣味として長年虫と付き合っている。昆虫そのものはもちろんだが、それと共に昆虫に関する民俗資料等にも興味を持ち収集保存、研究テーマの一つとしている。筆者が若いころ愛読していた本の中に安松京三著「昆虫物語」という本があり、その中のグラビアに昔、中国(中華民国の時代)に「蟬殻人形」という民間玩具があったことを知った。それから後、中国の書物や文献等によると現在も中国の民間工芸として細々と作成されていることが分かった。平成元年(1989)、初めて中国大陸を訪問する機会があり、「蟬殻人形」に出会えるかもしれないと心弾み、香港と広州・桂林の多くの土産物屋を物色したが、残念ながら探し出すことはできなかった。それから数年後、3度続けて中国最大の都市上海へ旅行した。しかし、そこでも入手出来なかった。何とか筆者の私設資料館「播磨昆虫民俗資料館」に資料として収蔵したく参考資料等を見ていると「中国博物館めぐり」という本が目についた。早速読んだところ、蟬殻人形が「毛猴」(マウオ)として紹介してあり製作者も載っている。いつか北京へ「毛猴」を求めべく訪問する機会を待っていた。平成8年10月、中華民国台湾省台北動物園胡蝶館に勤務されている筆者の台湾の友人が筆者宅に泊まれ各地を観光されたおり、中国の古玩具展が筆者の居住地に近い日本玩具博物館で行われており、よい機会と案内した。その時以前から筆者と知り合いの女性学芸員、尾崎織女さんより中国の民間玩具の「毛猴」を見る機会を得た。中華民国台湾省の友人も全く「毛猴」については知らなかった。ところで話を聞くとところによると同年、同館の館長さんが北京にて入手されたという。そんな事からヒントをもらい、今回「毛猴」を入手し“心想事成”ことが出来た初の北京行、その紀行文を駄文ではあるが書いてみた。

### 第1日目(1997. II. 08)

大変忙しかった仕事から離れ、1月中旬急いで中国北京に旅立つ手続きをとった。本年で学生生活と別れ、一般社会人となるため、海外旅行などの機会が少なくなる息子との旅立ちである。

早朝6時の新幹線に乗車するため娘を早く起こし姫路駅まで自家用車で送ってもらい、関西空港での集合時間8時20分ころに到着、11時15分機上の人となり北京空港に現地時間の2時頃についた。中国の首都なので、もっと大きな空港かと思っていたが案外小さく、上海の虹橋空港のほうが大きく感じた。宿泊ホテルの新橋飯店へ着いたのは3時頃だっただろうか。ホテルには同じツアーの2人組の若い女性2カップルと一緒にだった。

諸手続きを済ませた後、タクシーで「魚虫市場」へ行くことにした。現地ガイドより「魚虫市場」があるという西直門の場所等聞き、現地へ行ったのだが、あるのは熱帯魚や金魚またそれらのグッズばかりで虫に関するものは全くなかった(写真1)。どうやら夏季以後に販売するようになるらしい。仕方がないので「魚虫市場」付近でタクシーを拾い早速グッズ物を求めるため北京友誼商店へ行った。そこではトンボ凧等を購入し、ホテルへ戻り明日の作戦を練ることにした。ホテルにあるJTBデスクで「毛猴」の製作者曹儀簡(サオイチェン)宅へ連絡をとってもらうことにした。よいことにJTBデスクを担当している女性は現地の方だったので地理に大変詳しく助かった。筆者は在北京中にいつでも曹氏の都合のよい日に訪問させて戴く旨を申し出たところ、JTBデスクの女性は早速明日9時にお越し下さいとの先方の返事であることを筆者に伝えて下さった。明日は日本というお正月。中国では春節の元旦である。訪問するのもし訳なく思ったが、2度とないチャンスなので厚かましくもお邪魔させていただくことにした。その夜は、上海ほど地理も分からないのでホテル内のレストランにて夕食をとることにした。普通の北京料理だったので何とか食べることにした。



ができたが、あまりにも多く注文しすぎたもので、かなりの料理を残す羽目になってしまった。本日は日本でいう大晦日、レストランではなくじ引きのようなものをやっけて、スリットの入ったチャイナ服の小姐が、筆者のテーブルへもやっけてきて、箱の中のくじを引けといっている仕草をしているので引いてみた。何も景品は出なかったが、明日からの力がつく、いい言葉がプレゼントされた。そのくじの紙には「心想事成」とある。明日は昔から思いを寄せていた「毛猴」こと蟬殻人形とその製作者のお目にかかれると。

## 第2日目(1997. II. 09)

今日の楽しみが頭に入っているのか朝早くから目覚め、朝食のバイキングを平らげた。そしてホテル待機のタクシーに乗車し曹氏宅へ向かっていった。しかし、目的地の大きな通りで降ろされてしまった。おそらくこの付近であるとタクシーの運転手は知っているのだろうが、全く言葉は分からない。降ろされた後が大変であった。筆者の新しい靴が靴ずれを起こしたのである。しまったと思ったが後のまつりである。たまたま新しい靴を子供にプレゼントしてもらったので履き試しをしたのだった。目的地付近で歩いてばかり、足が痛くてたまらなかった。中国の首都北京と云えども、観光地以外ではほとんど日本語は通じない。結局30分以上歩いて道行く人に住所を示して聞きまわったが、反応はいろいろで目的地には到着しない。時間もずんずん過ぎていくので、もう一度タクシーに乗り直し名の書いたメモを渡し乗車、降ろされたところは最初のタクシーの降りた側であった。もっと近くで聞いておけばよかったのにと後から悔やまれた。おおまかに曹氏宅のあるとおもわれる番地に近付いてきたが、曹氏宅は見付からない。そこで牛乳配達らしき男性が大声で、おそらく「牛乳」と声掛けしているのかと思うが、その人に聞いてみることにした。すると曹氏宅へも配達しているのか、番地と名前がメモに載っていた、やっと目的地にたどり着いたかとおもったら、すでに約束時間の9時が1時間も遅刻し、10時近くになっていた。遅くなってしまったが曹氏は快く出迎えて下さった。曹氏が「毛猴」の名人であるこ

とは「中華人民共和国博物館ガイド」によりよく存じていた。その曹氏が目の前におられるのである(写真2)。早速曹氏は自分の部屋に通して下さり、筆者が「毛猴」ばかりに目を輝かせていると、曹氏は息子に心配りされ、色々話しかけておられた。曹氏と話をしているなかで、自分は中国5,000年7大小説の一つ「紅樓夢」の原作者曹雪芹の子孫でもあるといわれた。話によると、曹雪芹氏は曹家の14代で、自分は19代であるとの話である。曹氏はまた美術界でも高い評価を受けておられ、理事や委員など種々の要職に就いておられる。また最近、榮譽賞も受けられたという(写真3)。多くの「毛猴」を見せて戴きながら数点譲って戴いた。大変民俗的価値の高いものである。譲って戴いたものは、

- ①毛主席の時代の林・副主席をモデルにしたもの
- ②三国志をモデルとしたもの
- ③猿回しをモデルとしたもの
- ④食後のくつろぎをモデルとしたもの
- ⑤喧嘩をしているところ(写真4)

を巧みにコブシの芽で猿の胴体部分を、蟬の抜け殻の肢部分で猿の手足を製作されているのである。いずれにしても、壊してはならない芸術品なので、早速ホテルへ帰り保管することとした。暫く休憩後、息子の目的であるハードロックカフェにタクシーにて乗り継いでいく。有名ブランドらしく10枚あまりTシャツを購入していた。筆者も1枚ついでに購入した。その後、その付近にある大型店舗燕沙友誼商場でショッピングを楽しむことにした。ここでは特大のチョウの剪画を発見購入すると共に七宝焼の昆虫ブローチなどを手にいれることができた。今度はタクシーにて骨董や玩具で有名な古玩城へいったが、残念ながら春節の2日目ということでお休みであった。しかし、そのまわりに骨董品を並べた市がたっており、物色したところセミの玉があったがだまされそうで迷ったあげく買わなかった。そこで、この日の予定は終了という感じであった。古玩城から今度はタクシーがなかなか拾われなかった。時間待ちし、何とか乗車、北京の繁華街經由でホテルへ戻ろうとした。途中、王府井通りにより北京工芸美術へ中国工芸品を手にいれるべく寄ったのだが、そのビルは解

体されていた。今度は近くの大きな百貨店を覗くと大きなチョウ風が吊してあるのが目につき平面的に大きなチョウ風を購入した。残念ながら立体的なチョウ風は持ち帰るのが大変だからである。ホテルへ帰ると夕食は無事「毛猴」が手に入ったので、ホテルのレストランで独特の民俗楽器を聴きながら広東料理で乾盃がてらの夕食と相なった。

### 第3日目(1997. II. 10)

今日はショッピングが無事終了したということで見学に力を入れることにした。というのも「毛猴」入手に協力して下さったJTBデスクの女性の顔を立て、オプショナルツアーに参加したのであった。先ず中国青年旅遊社のK社から案内を受け、マイクロバスに乗車。1番最初に天安門で記念撮影後、故宮博物院で故宮の文物を見学した。靴の底が擦れて床の傷みを防ぐため各自面白いスリッパをはかされた。故宮はその文物より建築物そのものが博物資料と数の多さにびっくりし、大変すばらしかった。台湾の故宮とは一味違う展示方法でもあり言葉では言い表しようがない。故宮見学は程々に早速土産物屋へ連れていかれた。いつも思うことだが全く旅行の案内人というのは土産物屋に連れていく機会が多い。バックマーゲンをねらったことだろう。お昼になったところで故宮を離れ次は万里の長城へいった。同じツアーの中には1人で参加している若い男性や夫婦、ギャルたちも数多くいた。万里の長城につくと寒さで全く震えあがった。息子は毛皮の帽子を無理矢理100円で買わせようになったが、プヤオ(不要)の連発で60元(約1,000円)にまで値が下がり結果的に安い買い物をしたようだ。グループでは年齢的に筆者が一番年上であったのだが、日頃の訓練が実を結んだのか万里の長城の坂道を一番早く歩き、目的地の展望台についた。そこからの景色は最高であったが、帰ってみたらカメラのボケで満足に写っていなかったことは残念であった。筆者は中国の桂林、万里の長城そして蘇州だけは死ぬまでに一度は生きたいところと思っていた場所である。案外早く目的を果たしてしまったので次の目標を作らねばならなくなってきた。万里の長城の観光を終え、またまた定番の土産物屋へ連

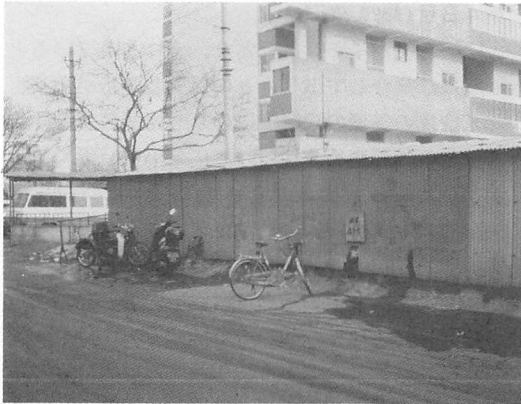
れていかれた。ここでは少しだけ景泰藍(七宝焼)のチョウ工芸品を購入した。本当にどこの土産物店でも「毛猴」のような民間工芸品はなく、民間工芸品と名の付くものは剪画があるぐらいでまず見あたらない。ホテルへ帰ってから再々度、友誼商店へ出掛けいよいよ買い残しの大型土産「龍頭ムカデ風」を大、中、小3点購入した。特に大のムカデ風は大きく頭部と胴部が2箱に入り調度空きがあるので前日分けて戴いた「毛猴」を入れるのに良い梱包用の箱となったのでうまく荷造りして荷物を小さくした。何とかショッピングの旅行も無事終わり明日の帰国を待つだけとなり寝床に入った。

### 第4日目(1997. II. 11)

ホテルでバイキングをとり、くつろいでいると9時には集合してほしいとの係員の連絡があり、北京空港の昼便の飛行機にのり一路関西空港へ到着、その後関空特急「はるか」に乗車後、新幹線に乗り換え姫路へと帰ってきた。

今回の北京訪問により魚虫市場は残念ながら空振りであったが、現地中国でも手に入りにくい「毛猴」が入手でき目的をはたした。尚、「毛猴」作者の曹氏はかなりの高齢で最近あまり「毛猴」の製作はされていないようである。筆者も分けて戴くのが気の毒に思ったほどである。この紀行文を読んで買い求めに行くことは先方にとって大変迷惑がかかることになると思われるので、くれぐれも自粛願いたい。訪北京の際、ホテルに於いて春節特別番組で、青年の「毛猴」作者がテレビにおいて紹介されていたので、この民間工芸品が廃絶することはないと思われる。また曹氏より日本から訪れた方々の名刺を拝見させて戴いたが、民族、民俗、玩具、教育関係の諸先生方が多く、昆虫関係の方は全くおられなかった。また近日中に北京を訪問し、北京での鳴く虫資料の入手に努めたい。今回の北京旅行で「毛猴」の入手にご協力願った日本玩具博物館長井上重義館長、同学芸員尾崎織女氏に御礼申し上げます。

心 想 事 成



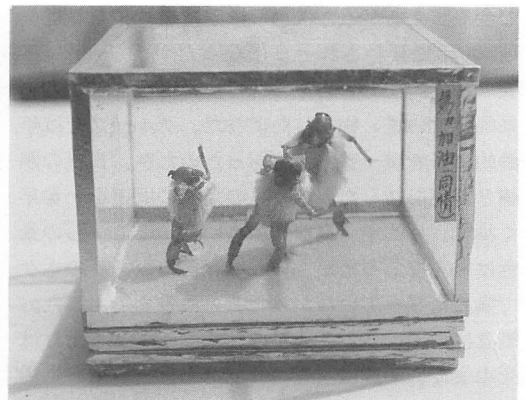
①



②



③



④

## 天津へ虫凧を求めて

相坂 耕作

本年2月に息子と北京へ行き、万里の長城、故宮へ観光し、目的であるセミ殻人形(毛猴)入手を成しとげた。その時にトンボ凧とムカデ凧を少々買い求め持ち帰ったが、残念ながら筆者の求める珍虫凧は手に入らなかった。そのため今回は凧のメッカ天津へ珍虫凧を求めに行くことにした。

### はじめに

筆者の私設資料館「播磨昆虫民俗資料館」には多くの虫凧を所蔵している。その中にはムカデ凧とともに昆虫凧としてセミ、チョウ、トンボ、バッタなどがみられる。筆者は日本の凧の会会員で、虫を形取った、虫凧収集を国内及び国外に行っている。まさしく昆虫の民俗資料として十分な価値があると思うからである。中国の凧もかなり以前から収集しており、今回、北京を拠点に北京凧、天津凧を入手したので雑文ではあるが紀行文を書いてみた。

尚、今回は家内と数えて結婚25周年目となり、いわゆる銀婚記念として旅行したもので、家族や身内のものに多分の御厚志を戴きました。紙面に厚く御礼申し上げます。

### 草編細工を入手

第1日目(1997.9.13)北京空港到着後、現地係員の女性と共に5ツ星の宿泊ホテル京広新世界飯店に到着。このホテルは1990年にオープン52階建ての北京一の高層ホテルで輝く外観が目立つホテルである(写真1)。早速、前回訪問した「毛猴(マオフォウ)」作家、曹儀簡氏宅へお土産を届けるべく係員に連絡をとってもらい、今日夕方5時に訪問出来るようになった。不思議なことに、現地係員がホテルにある公衆電話でかけようとしても長時間つながらずあきらめ、フロントの電話を借用したら瞬時に電話がかかるという中国の不可解さが知れた。暫く休憩後、タクシーに乗り北京友誼

商店分店へ、早速物色したのち長富宮飯店へ行く。明後日の天津行きのオプションツアーの予約を入れるべくホテル内のJTBデスクに立ち寄った。デスクではついでに曹氏宅へいく順序を聞いてもらった。前回いっても全くわからないものである。長富宮でタクシーに乗車し、何とかタクシーの運転手は曹氏宅にて降ろしてくれたが、いかんせん約10倍の値をふっかけてきた。メーターを倒したままでおかしいと気づいていたが、日本円の約3,000円くらいなので喧嘩することなく無事着いたのでチップ代わりにくれてやった。何しろ前回の靴づれを考えると全く楽に到着した。

曹氏宅へ行くと曹氏はよく覚えていて下さって手厚い出迎えをうけた。曹氏は勉強をされていたらしく机には書類がいっぱいになっていた。何かしておられるのですかと聞くと、中国四大小説の一つ「紅桜夢」の改編をしているとの事であった。そういえば曹氏は「紅桜夢」作者、曹雪芹氏の子孫にあたる方であったことを思い出した。前回訪問から半年ではあったが、元気なお姿を見せて戴き喜んでいる。しかし、身体はまだ少々不自由なのか「毛猴」は全く作成されていないようで、作品はむしろ少なくなっていた。それにも係わらず家内と筆者に一つずつ「毛猴」をプレゼントして下さった。部屋を見渡すと江沢民総書記と人民大会堂前で撮影された写真を飾っておられ、かなりの有名人と知った。明日の予定を聞かれ、鬮蟋(コオロギ相撲)の道具を物色する旨を話すと曹氏所有の草編みの鬮蟋をもプレゼントされた。帰国後調べると、その草編み細工は、ラストエンペラー清朝最後の皇帝愛新覚羅溥儀と同じ「満族出身」の草編み工芸師で、愛新覚羅裕庸氏の作品であることが分かった。氏の作品は美観細密であり、国の内外での評判が高く「満族代々に伝わる伝統工芸の唯一の継承者」でもある。全く唸りたくなるような作品である。前回訪問時に戴いた草編みのセミも

その緻密さから同氏製作に違いないと思った。

家内を含めての記念写真(写真2)の後、曹氏宅を離れタクシーを拾い友誼商店へ、その後夕食、ホテルへ帰った。

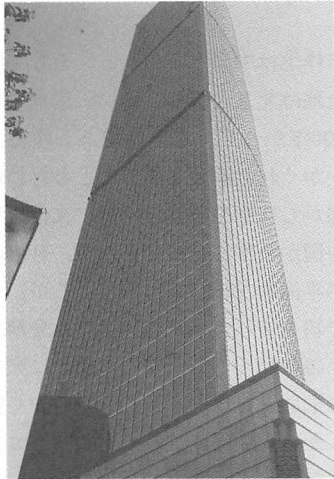
### 食用としてのセミ

2日目(1997.9.14) 前から調べていた所で、ここなら闊蟻の道具があるだろうという龍潭湖付近にある自由市場へ出かけた。普通、旅行案内書を見ていると観光者が多いところは本に出ている。例えば衣料品で有名な秀水市場などは有名な市場である。今回行った自由市場は外国人の姿もほとんどなく、お国の人が大半を占めている。逆にいえば日本語の通じない危険ゾーンなのかも知れない。市場へ入っていくと一番最初に目についたのが紙箱ではなく、紙包装の蚊取線香で素朴そのもの。早速購入すべく多少銭(トウシャオチェン=いくら)とやっところ1元(約15円)という。あまりの安さにびっくりした。包装紙の印刷を見てみると河北省製造で除虫菊使用となっている。色こそ日本のように鮮明な緑色でなく、黄緑色で効き目こそ分からないが入手して喜んだ。そして同じ店には何とセミの玉が売っていた。前回訪問した万里の長城付近で買い求めたセミ玉の約1/50の値段である。あまりの安さに開口した。それも2つ買うからといってまけさせた。足を進めると、やっと目的のコオロギの飼育道具等が目に入ってきた。手作りの虫籠などを、人もはばかりのような値段で買い求めた。そのうち、やっとこの目で一度見たいと思っていたキリギリスの流し売りの光景に出会った。何百とぶらさげたキリギリス籠からはうるさい鳴き声が響いている。籠こそ入手していたがキリギリスを入れたままのは初めてで、早速買い求めた(写真3)。1籠2元(約30円)であった。全く不思議でたまらない。この虫を入れる入り口のない竹製(葦の茎?)の虫籠で、いったいどうしてキリギリスを籠に入れたのか、また、成長するのに餌をどうやるのか全く不思議であった(後日その謎は解明できた)。今度は風が売っていた。ツバメ風の中にセミの絵のあるセミ風を発見

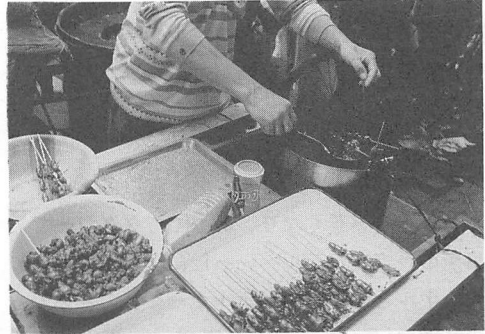
したが、分解できないことと、手持ちで持ち帰ることを考えると購入を断念した。同じ店でトンボ風を発見。昨日ホテル売店で250元していたのが10円で売っていた。色違いを3ヶ買うからというのと25元となった。中国は買うところによって全く値段が違う。

今度はコオロギ売りに出会った。金網の大きな虫籠に、大変多くのコオロギを販売しているのである。コオロギの種類はツヅレサセコオロギと思うが、買っている人は真剣そのものである。筆者もつい1元紙幣を出して買ってしまった。数十頭はあるだろうか、ビニールの中へ古新聞の紙片とともに入れてくれた。おそらく蟋蟀(コオロギ相撲)の選手に育てるためのコオロギに違いないと思われる(写真4)。そして暫く歩いていると、全く予想もしていなかったセミの幼虫を屋上で売っていた。昔、日本でも長野県などのリンゴ園で害虫として大発生したセミの幼虫に困り果て、ついに食用として唐揚げにしたり、缶詰にしたという。飽食の時代の現在では、珍味としてしか食べないようだ。タイなどではセミを食べることは聞いていたが中国の首都北京でも食べるとは思わなかった。1串1元(約15円)で食べさせてくれたが、案外こぼしく美味しかった。作り方は、セミの幼虫を尻の方から竹串で3頭刺して油で揚げ、それに味付け用にコショウのような香辛料を2種類ふりかけ売っていた(写真5)。ついでに食べる話であるが、鉄板に薄い小麦粉を広げ、中に卵を割り広げ、中に揚げたフライ状のものを入れ、さらにネギを加え、醤油をつけたお好み焼き風のものが売っていた。大変熱くとても美味しかったが、それを包む紙が日本で昔使っていた落とし紙の悪い紙みたいで急に食欲が落ちた。歩いていると時々テレビ等で見る頭の上から包丁で麺を切る刀削麵(タオシアオミェン)の麵料理を見かけたが、試食はしなかった(写真6)。

市場を離れることにして一度ホテルへ帰り休憩の後、今度は絹製品で有名な秀水市場を物色した。こちらは有名すぎてやたら外国人が多いところである。色々なものを買いもとめたあげく、最後に



①



⑤



②



⑥



③



⑦



④



⑧



はよく知られている毛沢東グッズのライターを買った。しかし中には火をつけても毛沢東を讃える曲がならない不良品も結構多かった。夕食を済まし友誼商店でショッピング後ホテルへ帰り明日の天津行きを夢見て寝ることにした。

### 天津へ風を求めて

3日目(1997.9.15) 朝早くから宿泊ホテルでバイキングを食べ遅くなり、あわててタクシーで集合場所の長富宮ホテルへいった。よく出てくる長富宮ホテルとは日本のホテルオークラの合弁で、万里の長城の「長」と富士山の「富」とった名称で、日本人が主に利用する日本語が自由に通じる5ツ星ホテルである。さて、ホテルで「ウスイ」という男性と、ドライバー、ガイドそして筆者夫婦の計5名でマイクロバスを天津に向け出発した。天津と云えば日本では甘栗でよく知られるが、少々触れてみると、天津は天京(北京)への津(渡し場)から名づけられたという。北京の海の玄関口で、かつての租界地の名残をとどめる洋館が点在する市街は緑豊か。東は渤海に望む新港をもつ天津は人口約880万、上海、北京に次ぐ第3の都市で中央直轄市である。

明代に江南から北京へ食料を運ぶ中継地として栄え、清代に交易港として繁栄、1840年のアヘン戦争以後8カ国の租界が海河の左右に設けられ今も当時の面影を残している(写真7)。天津は神戸市と友好都市でもある。その天津の古文化街へ行ったが土産物の風はありふれたものばかりであった。後、天津食品街で昼食をとり、水上公園へ行った。途中大きなヤブヤンマ風のトンボをマイクロバスの中でみた。水上公園ではシオカラトンボ風のトンボとショウジョウトンボ、またウスバキトンボは多かった。昆虫ではツチバッタや大きなカメムシ、キタテハをみたが、本当に昆虫の姿は少ない。オブショナルツアーでたいへん高い金を払ったわりには風があまり入手出来ず残念だった。しかし天津の帰り道、ガイド氏が天安門広場へ立ち寄り風揚げを見せてくれた(写真8)。そこで中国の風について少々記すると風は中国で風箏と書

き、発祥地は中国と言われる。そして中国の風の有名な地は北京、天津、維坊、広東であるが、中国4,000年かつ広大な土地であるゆえ、まだ知られないかくれた産地もあることと思われる。日本は中国から文字や思想を学び、文化を形成した。風も中国から学んだ訳であるが、日本の風はほとんどが平面的な紙(和紙)風であるが、中国では立体的で絹を使った風が多い。また分解できる構造が多い特徴がある。天安門でヤミに売っているチョウの形をしたフータン(風弾)を安く買い求めたのはよかった。帰りはハードロックカフェにより、息子に頼まれていたトレーナーを買いもためホテルへ帰った。ホテルでは日本へ接近中の台風19号のニュースばかりみていた。

### 帰国

4日目(1997.9.16) 集合時間を聞いていなかったで現地の旅行社へ連絡し、不安だったが近くのデパートへ最後の買い物に行った。午前11時頃現地案内人がべこべこ頭をさげながらやってきた。搭乗手続きこそ分かっているものの、やはり現地で係員がいなくて不安そのものである。北京空港では台風19号の接近で関西空港の連絡橋が不通になるおそれがあるので早く出発するとJAL職員の説明であったが、実際には時刻より遅れ離陸した。いかにも中国的である。何とか無事到着。台風の影響も少なく無事帰国できた。

## 赤相地区を中心とした播磨地方のオサムシ分布資料

大貝 秀雄

筆者はオサムシに関しては全くの素人である。しかし好きな昆虫の一つであり、目にする機会があればその都度ノートへの記録ないし採集を続けてきた。ごく一部の例を除いては見ドリしかおこなっていないうえに調査地も限られているのでデータとして不十分ではあるが、播磨地方における昆虫相の一資料として報告しておきたい。ここに示す記録は採集ノートから抽出・整理したものであって標本が手元に残っていないものも少なくない。

### エゾカタビロオサムシ *Campalita chinense* (Kirby)

上郡町金出地：1992-VII-27; 1sp(目撃)

赤穂市高雄：1995-VII-19; 1♂, 1995-VII-26; 1♂

3例とも夜間、灯火に飛来していたものである。

'92年金出地のデータは車にひかれた死体を見たもので、ノートには性別も書いていなかった。

### アキオサムシ *Carabus japonicus chugokuensis* (Nakane)

上郡町高山：1993-VIII-12; 1♀, 1995-V-27; 2♂  
2♀♀, 1995-V-28; 2♂2♀♀.

千種町西河内：1995-IX-2; 1♀, 1996-V-25;  
1♀, 1996-VII-13; 1♀, 1996-VIII-3; 1♂4♀♀,  
1997-VI-7; 1♀.

高橋寿郎氏によれば兵庫県では産地が限られた珍しい種であるらしいが、筆者の採集例は比較的多い。そのほとんどは銅色型であり、千種町で黒色型を1♀のみ得ている。上郡町における本亜種の分布は、瀬戸内海に近い低地としては東限に近い記録になると見られる。なお、上郡町'95年の記録はすべて酢酸トラップにかかったものであった。

### オオオサムシ *Carabus dehaanii dehaanii* Chaudoir

上郡町金出地：1992-VII-12; 1♀.

おそらく山地ではもっと多い種であると思われるが、筆者の記録は1例しかない。

### ヤコンオサムシ *Carabus yacoininus yacoininus*

### Bates

赤相地区の最普通種である。多くの個体は体色が黒く大型であるが、一部の産地では暗銅色でやや小型のものもとれている。後者のタイプの♀は、次種で大型のものと区別困難なことがあり、種間雑種の可能性も考えられるものの詳細は不明。採集ノートには赤穂市高雄の1♀(1976-VI-26)以降23回の記録があったが、実際に見た回数はずっと多かったと思われる。記録に出ている産地は次の通り、

赤穂市：富原，周世，牟礼，谷口。

相生市：矢野瓜生，矢野釜出，矢野榊。

上郡町：高山，行頭，八保，金出地，富満，作用谷，奥，高田台。

### マヤサンオサムシ *Carabus maiyasanus maiyasanus* Bates

前種に次いでよく見られ両種が混生する産地も少なくない。しかし赤穂市では本種の採集例が全くないなど、その分布には偏りが認められる。体色は美しい金銅色のものが多く黒色型は未見。上郡町野桑の1♀(1989-V-21)をはじめ18回の記録がノートにあった。次に産地を記す。

相生市：矢野小河，矢野釜出，矢野瓜生。

上郡町：野桑，笹谷池，作用谷，奥。

### クロナガオサムシ *Leptocarabus procerulus procerulus* (Chaudoir)

千種町西河内：1995-IX-2; 1♀, 1996-VIII-3; 1♂.

播磨では山地に多いと思われる種であって、赤相地区における筆者の採集例はない。また兵庫県に分布する近縁種であるオオクロナガオサムシ *Leptocarabus kumagaii* Kimura et Komiya とチュウゴククロナガオサムシ *Leptocarabus kyushuensis nakatomii* (Ishikawa) も筆者は採集していない。

### ホソアオクロナガオサムシ *Apotomopterus porrecticollis kansaiensis* (Nakane)

赤穂市谷口：1995-VI-7; 1♀.

本種の記録も1例しかない。これは車を運転中に舗装路を横断しようとしていた個体を偶然発見したものであった。

ホンマイマイカブリ *Damaster blaptoides blaptoides*  
Kollar

赤穂市大泊：1977-IV-19;1sp, 1978-XI-24;1sp.

赤穂市谷口：1987-秋;1sp, 1995-V-28;1♂.

上郡町作用谷：1991-V-19;1sp(目撃).

千種町西河内：1996-VIII-3;1♀.

採集例は必ずしも多くないが分布域はかなり広いようである。東播でも加古川市(1981-IV-12)と小野市(1994-V-6)で採集している。千種町で得た個体は体長57mmあり、兵庫県産としては最大クラスではないかと思われる。

#### <参考文献>

1. 高橋寿郎(1995) “オサムシ掘りをめぐりて” てんとうむし特別号遊蟲千年 26-31.
2. 石川良輔(1985) 原色日本甲虫図鑑(II) pp. 14-54, 保育社.
3. 石川良輔(1991) オサムシを分ける錠と鍵 八坂書房.

### 兵庫県相生市における アサギマダラ越冬幼虫の確認 唐土 洋一

1997年12月21日、相生市矢野町瓜生(鍛冶屋谷)の三濃山麓にてアサギマダラの若齢から中齢までの幼虫10数等をキジョランより確認した。そのうちの6頭を持ち帰り、鉢植えのキジョランにつけて飼育(玄関先にて)しているが、寒さにも負けず脱皮を繰り返し大きくなっていく。いずれ蛹になるものと思われるが、この寒さの中で幼虫が活動しているということ事態が奇異にとれる昨今である。

注記) 相生市矢野町瓜生(鍛冶屋谷)では、鍛冶屋

川砂防ダム工事に伴う市道付替工事が行われており、全面通行止め(～3月25日)となっているが、引き続き本工事に入れば、このコースからの三濃山への登山等は当面不可能となる。

問い合わせ先：兵庫県上郡土木事務所

(TEL 07915-2-5111 担当:公園砂防課)

#### <参考資料>

- 1) 奥野晴三他(1989) 大阪付近のアサギマダラ 昆虫と自然24(5)37-42
- 2) 広畑政巳(1995) 兵庫県に於けるアサギマダラの越冬の記録 -姫路昆虫同好会結成20周年記念- てんとうむし特別号 「遊蟲千年」 118
- 3) 唐土洋一(1997) アサギマダラの記録 てんとうむし(11)84

### ソバの花に來たチョウ 唐土 洋一

今年(1997)、佐用郡三日月町広山の休耕田にソバが植えられていた。ソバの花は白いものとばかり思っていたが、何とピンク色をしたそれは見事なものであった。聞くところによれば、この種は今年始めて植えられたヒマラヤ原産の高嶺ルビーという品種らしい。

来年もどこかの休耕田に植えられるものと思うが、詳しいことはわからない。興味のある方は「味わいの里三日月(0790-79-2521)」の小林所長に聞かれるとよい。

観察日：1997年10月19日 午前10～12時にかけて、観察出来たチョウの数(\*印のものは、写真撮影出来たもの)は下記に示した11種類であった。

- |               |             |
|---------------|-------------|
| ✓ *①アカタテハ     | ✓ *⑦テングチョウ  |
| ✓ *②ヒメアカタテハ   | ✓ *⑧ウラナミシジミ |
| ✓ *③キタテハ      | ✓ *⑨ベニシジミ   |
| ✓ *④ウラギンヒョウモン | ✓ *⑩ヤマトシジミ  |
| ✓ *⑤モンキチョウ    | ⑪チャバネセセリ    |
| ✓ *⑥モンシロチョウ   |             |

## 低温期のクロアゲハ／ナガサキアゲハの飼育例

唐土 洋一

### 1. クロアゲハ

1) 10月に入り自宅庭のフユザンショウにクロアゲハの若齢幼虫(2頭)がついていた。11月になって、経過をみるべく確認したところ、葉は食べつくされ幼虫の姿は見当たらなかった。まだ、蛹にまで至っていないはずだと思い直し、周囲の食樹となり得る木々の葉を探して見たところ120cmほど離れたところに置いていたプランターに植えているキハダの葉上より2頭の終齢幼虫が見つかった。このうちの幼虫1頭を取り込み、キハダの葉を与え飼育(玄関先にて)した。

'97年11月23日 蛹化場所を求めてはい回っていたので、鉢植えのアワブキにつける。

11月24日 蛹化場所を決めたのか下向きにじっとしていた(6時30分頃確認)。

11月25日 前蛹姿勢に入る(6時30分頃確認)。

11月27日 前蛹のまま。

11月28日 既に蛹化していた(6時30分頃確認)。

2) 相生市壺根にて温州ミカンよりクロアゲハの終齢幼虫を採集した。ミカン類は年中緑葉をつけているので低温期に入ってもほそぼそと生き続けることが出来るものと思われる。

自宅に持ち帰り、温州ミカンの葉を与え飼育(玄関先にて)した。

'97年11月30日 採集(持ち帰り)。

12月9日 蛹化場所を求めてはい回っていたので、鉢植えのアワブキにつける。

12月12日 蛹化位置を決定(6時30分頃確認)。

下向きになっている。

12月14日 上向きになったり、下向きになったりしている。

12月15日 前蛹姿勢に入る。

12月21日 前蛹のまま。

12月22日 蛹化(2時30分から6時までの間

に蛹化したものと思われる)。

### 2. ナガサキアゲハ

10月3日、赤穂市高雄の千種川畔でナツアカネ等の写真撮影をしていたところ、ナガサキアゲハの雌が飛来してきた。足元に置いていたネットを取り、追いかけて捕まえた。自宅に持ち帰り、スダチに袋掛けして採卵したところ10月5日に13卵産みつけたので母チョウは野外に放した。産みつけられた卵はそのまま屋外に放置しておいたところ黒く色づくも孵化にまで至るものは少なく、やっとのことで2頭が孵化していたので幼虫はタッパに取り込み、温州ミカンとスダチの葉を与えて飼育した(1齢から5齢までは玄関先に、5齢から蛹までは室内において飼育した)。

'97年10月22日 2頭孵化。

12月8日 1頭5齢に達す。残り1頭は休眠中。

12月9日 休眠中のもの1頭5齢に達するが、12月11日に死亡。

'98年1月16日 脱糞、前蛹に入る。

1月24日 前蛹のまま。

1月25日 蛹化(午前4時30分頃確認したところ、蛹化し終えたところであった)。

注) クロアゲハの飼育はタッパに取り込み、脱糞後の終令幼虫を鉢植えのアワブキに移動させ蛹化させた。ナガサキアゲハの飼育はタッパに取り込み、タッパ内で蛹化させた。観察経過の時間等の詳細は不明(日にちのみ抑えた)。

### <参考資料>

- 1) 広畑政巳(1982) 沖縄県産ナガサキアゲハ若齢幼虫の耐寒性について ひろおび(6)30.
- 2) 広畑政巳(1984) ナガサキアゲハ雌の黒化型 ひろおび(7)15.

## 西播地方で採集した注目すべき蛾

(兵庫県産蛾類分布資料・7)

高島 昭

*Herculia orthogramma* Inoue オオバシマメイガ

12. XI. 1997 1♂ 波賀町引原

東北から九州、対馬にかけて分布しているが少なくとも関西では採集例は少なく稀な種である。兵庫県では黒田庄町<sup>4)</sup>で記録がある。

*Habrosyne dieckmanni* (Graeser) ウスベニアヤトガリバ

26. VIII. 1988 1♂ 波賀町坂の谷

大図鑑では北海道から四国にかけて分布するが、関東以西では高地に分布し、産地は限定されるとある。キイチゴ類を食樹としている。兵庫県では氷ノ山<sup>8)</sup>での記録が唯一であった。

*Avitta fasciosa* Moore オオトウウスグロクテバ

21. X. 1997 1♂ 波賀町引原

暖帯性の少ない種で、紀伊半島の大塔山系で発見され、その後奥多摩、愛知県、三重県、大阪府箕面市、四国などから報告されている。県下では宝塚市<sup>9)</sup>、南淡町<sup>1)</sup>で記録がある。

*Xestia fuscostigma* (Bremer) クロフトビイロヤガ

23. X. 1997 1♂ 上郡町船坂

主に北海道から中部以北に分布し、西南日本では分布が限られる。兵庫県ではこれまで波賀町引原ダム<sup>7)</sup>、<sup>9)</sup>で記録されているだけで、分布状況は明らかとなっていないが、上郡町での分布確認によって、山地性というよりむしろ低山地に優勢な種ではないかと思われる。

*Eupsilia unipuncta* Scriba ムラサキミツボシキリガ

12. XI. 1997 1♂ 波賀町引原

暖温帯性の種であるが産地は局地的で個体数も少なく、得難い種のひとつとされ、採集されるたびに同好会誌に発表されている。これまで宮城県から大分県、熊本県まで15都府県で散発的に記録されており、近畿では奈良県川上村<sup>9)</sup>や大阪府箕面公園<sup>9)</sup>などで記録がある。晩秋に出現することも記録が少ない要因であろう。兵庫県では、筆者が同じ波賀町引原ダム<sup>7)</sup>で記録したものが唯一のものと思われる。

*Ctenostola aparganoides* (Bang-Haas) クシヒゲウスキヨトウ

4. X. 1997 1♀ 上郡町船坂

局地的な分布をする種で、大図鑑では北海道、宮城、群馬、新潟、長野、島根、福岡、隠岐が産地としてあげられている。年1回、秋に出現するということが記録が少ない一因と思われる。これまでの兵庫県での記録は、筆者が波賀町引原ダムで採集している1例のみである<sup>7)</sup>。

*Hypana pulverulenta* Wileman コテングアツバ

6. V. 1995 1♂ 姫路市太市

暖地性の種で、東海地方から紀伊半島、四国、九州にかけての主に太平洋沿岸地帯と石垣島に分布している。兵庫県では、高砂市<sup>5)</sup>から報告されている。今回は姫路市からの記録であり、瀬戸内海沿岸の平地など温暖な地域には少ないながら分布が広がっているものと思われる。

## &lt;参考文献&gt;

- 1) 藤平 明(1995) 淡路島南部で注目される蛾(I) PARNASSIUS(42):14-15.
- 2) 井上 寛(1982) 日本産蛾類大図鑑 講談社・東京
- 3) 木下總一郎(1989) 注目すべき蛾の記録報告 誘蛾燈116:58.
- 4) 岡本 清・猪股涼一(1962) 兵庫県多可西脇地方の昆虫2(蛾類I) 兵庫生物Vol. 4(3/4):154-178.
- 5) 岡本 清(1997) 高砂の蛾 てんとうむし(11):40-45.
- 6) 新家 勝(1986) 宝塚大橋の照明灯で採集した蛾(続報その5) きべりはむし14(1):21-22.
- 7) 高島 昭(1995) 波賀町引原ダム周辺における蛾相 第1報 きべりはむし23(1):6-16.
- 8) 山本義丸(1955) 氷ノ山の蛾について(第一報) 兵庫生物 3(1/2):21-22.
- 9) 山本義丸(1993) 大阪箕面公園で得られた注目すべき蛾類(VII) 誘蛾燈131:13-16.
- 10) 遊磨正秀(1973) 引原ダム(宍粟郡波賀町)のヤガ類(I) きべりはむし2(1):16-19.

## てんとうむし第11号の訂正について

てんとうむし第11号に掲載した報文に誤り、脱落、変更がありましたので、ここに訂正させていただきます。

page	位 置	誤	正
3	上から6行目	treceived	recieved
7	右側14行目	harolid-nus	haroldianus
29	左側1行目		はじめに(挿入)
29~31	左側下から15行目 左側下から11行目~ 右側2行目まで	<内 訳> 1. …… 9. 1) ……	1. 相生市より記録された蝶類 1) …… 9) ① …… (いずれも番号体系の変更)
30	右側16行目	5) ヘリグロチャパネセセリ	⑤ ヘリグロチャパネセセリ(5)
32	左側下から6行目 右側5行目	1976年 約400	1963年 約300
34	右側7行目	ヒメカンアンアオイ	ヒメカンアオイ
36	左側6行目 右側下から6行目	「遊蟲千年」: 3	「遊蟲千年」: 32-34 72) 近藤伸一(1997)兵庫県で見られるチョウについて(後編) 兵庫県環境政策課/林務課 (36)3-4 (追加)
59	左側10行目 左側12行目	G. viridopa-cus G. viridopa-cus	G. viridopacus G. viridopacus
60	右側下から10行目	両側	西側
72	左側下から10行目 右側下から2行目	「 」 カプト	「孳槽」 カプトムシ
81	右側下から16行目 右側下から18行目 右側下から21行目	セイダカアワダチソウ セイダカアワダチソウ セイダカアワダチソウ	セイタカアワダチソウ セイタカアワダチソウ セイタカアワダチソウ
82	左側2行目 左側下から1行目  右側5行目 右側7行目	1♀(黄色型)目撃	1♀(黄色型) 青葉台(植栽) のあとに川原町(植栽)を追加 岩木甲のあとに与井新を追加 上月町 小赤松 (追加)
83	左側下から23行目 左側下から22行目 左側下から14行目	1996. 10. 赤穂市有年牟礼 タテハチョウ科 1種 文献 6)	1996. 10. 6 赤穂市有年牟礼 タテハチョウ科 2種 … 文献 6)
87	左側下から9行目 左側下から6~7行目 右側1行目 右側下から6行目 右側下から5行目	群家町 (6, 6, 6(1), 5, 4(1), 4, 3卵) 見受粉花で 群家警察署 扇ノ山から	郡家町 (6, 6, 1(6), 5, 1(4), 4, 3卵) 未受粉花で 郡家警察署 扇ノ山林道から

## [交換誌紹介]

- すかしば 1997. 1 山陰むしの会  
 すずむし No.131 1997. 5 倉敷昆虫同好会  
 すずむし No.132 1997.12 倉敷昆虫同好会  
 IRATSUME No.21 1997.11 但馬むしの会  
 混虫ずかんNo.60 1997.12 但馬むしの会連絡誌  
 混虫ずかんNo.61 1998. 2 但馬むしの会連絡誌  
 KURAKON No.41 1997.12 倉敷昆虫同好会連絡誌  
 ハチ蜜の森から ビーズファーム通信 No.12 1997.11 Bee's farm  
 ハチ蜜の森から ビーズファーム通信 No.13 1998.2 Bee's farm  
 きべりはむし No.25(2) 1997.11 兵庫昆虫同好会  
 きべりはむし No.25(3) 1997.12 兵庫昆虫同好会  
 FUTAO No.1~26 フタオ会誌

## [会費の納入について]

1998年度の会費を同封の振替用紙を御利用の上、納入下さいますようお願いいたします。

1998年度会費 3,000円

郵便振替 01100-6-

姫路昆虫同好会 相坂耕作方

## [新入会員紹介]

松尾隆人  
 穂積俊文  
 市川憲平  
 柴田 剛  
 今給黎靖夫

## 寄稿者一覧(五十音順)

相坂耕作(あいさかこうさく)  
 大貝秀雄(おおがいはひでお)  
 岡本 清(おかもとときよし)  
 近藤伸一(こんどうしんいち)  
 大東康人(だいとうやすと)  
 高島 昭(たかしまあきら)  
 高橋寿郎(たかはしとしお)  
 広畑政巳(ひろはたまさみ)  
 唐土洋一(もろこしやういち)



\* \* \* 編 集 後 記 \* \* \*

新生「てんとうむし」の第12号をお送り致します。多くの方々に毎回寄稿して戴き、県下の昆虫相解明が進んでおります。しかし、今一度足踏み状態というのが本当のところでしょう。例えば、神戸や淡路地区になると多くの研究者によりマクロの昆虫相は解明がかなり進んでいます。その点、我が播磨は但馬地方と共に残念ながら解明されたとは決して云えません。播磨は一つの地方としては大きすぎるのでしょうか。また、国宝であり、世界遺産にもなった姫路城が立派すぎて自然文化の不毛の地になったのでしょうか？。決して播磨は人材不足ではないはずです。旧くは大上宇市、井口宗平、近代昆虫学の祖である松村松年、森為三など錚々たる偉人を輩出した地であり、現在も在野の研究者は数多いと思えます。しかし、大きな仕事をする事など期待はできません。たとえば兵庫県産昆虫目録や播磨産昆虫目録などです。一枚岩の団結がはかれない理由があるはずです。我々播磨人は狭量か排他的で小さなグループを作ったりしているからではないでしょうか。結局は個人的活動になるため、どうしても小さな研究となってしまう惨めな結果となります。これからの同好会活動には出来るだけ参加していただき、大きな仕事に向かって行こうではありませんか。

てんとうむし 12 号

発 行／姫路昆虫同好会  
発行日／1998年4月30日  
編集者／相坂耕作・高島 昭  
事務局／〒671-1143

姫路市

相坂耕作方

TEL/FAX 0792-36-

# てんとうむし12号 目次

兵庫県産蝶類分布資料(10) —ミドリシジミ族6種の記録— (ウラキツジミ・ウラゴマダラシジミ・オガシジミ・ウスイオオガシジミ・ウラミスジシジミ・ウラクロシジミ)	広畑政巳・近藤伸一	1
兵庫県のキクイムシ類(兵庫県甲虫相資料・340)	高橋寿郎	14
黒田庄町で採集した蛾(1)	岡本 清	30
台湾のコオロギ相撲	相坂耕作	39
兵庫県の蝶／観察と知見③ —ヒロヒミドリシジミ—	大東康人	44
兵庫県のギフチョウ覚書	唐土洋一	49
チュンペリーの見た日本の昆虫	大貝秀雄	53
北京へ毛猴を求めて	相坂耕作	57
天津へ虫凧を求めて	相坂耕作	61
赤相地区を中心とした播磨地方のオサムシ分布資料	大貝秀雄	65
兵庫県相生市におけるアサギマダラ越冬幼虫の確認	唐土洋一	66
ソバの花にきたチョウ	唐土洋一	66
低温期のクロアゲハ／ナガサキアゲハの飼育例	唐土洋一	67
西播地方で採集した注目すべき蛾(兵庫県産蛾類分布資料・7)	高島 昭	68
てんとうむし11号の訂正		69
交換誌紹介		70
寄稿者一覧		70